埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告書

—XIX—

台耕地（Ⅱ）

1984

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒田第17号墳太刀形埴輪

第３号製錬炉

序

埼玉県を縦走する関越自動車道はすでに開通して、県内の産業など多方面に活用されており、埼玉県の発展の原動力の一つになっております。

本道路建設にかかる遺跡は、数も多く、埋蔵文化財保護上やむをえず記録保存をすることになりました。その大半は、すでに報告書として刊行しました。

本書は、花園町台耕地遺跡の古墳、平安時代編の報告書であり、本書をもって関越自動車道関係の報告書は完結の運びとなりました。ここに、委託者である日本道路公団の埋蔵文化財保護に対する深い御理解と、発掘調査に際して賜わった花園町教育委員会・同町文化財保護関係者・地元住民の方々の御協力に対し深く感謝いたしております。

本書を刊行することにより、その責を果たすとともに、本書が教育、学術研究の資料として広く活用されるよう希望いたします。

昭和59年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　長　井　五　郎

例　　言

1　本書は埼玉県大里郡花園町大字黒田に所在する台耕地遺跡の発掘調査報告書　古墳・平安時代編である。

2　調査は関越自動車道花園インターチェンジ建設に先だつ事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し日本道路公団の委託により埼玉県教育委員会が主体となり実施したものである。整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和58年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は4ページに示したとおりである。

3　出土品の整理および図の作成は酒井清治、鈴木仁子が担当し、酒井和子、滝瀬芳之の補助を受けた。

4　発掘調査における写真は鈴木敏昭、山形洋一が、遺物写真は酒井が撮影した。

5　本書の執筆は｜を好富が他は酒井が担当した。

6　本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。

遺構　住居跡・土坑　1/60　古墳および溝・ピット群は不統一である。

遺物　坏・塊・皿・蓋など小形品は1/3、壺・甕など大形品は1/4で、1/4以上の縮尺については土器番号の後に記入した。

7　挿図の土器番号の後のHは土師器、Kは灰釉陶器、その他は須恵器である。

土器に入れたスクリーントーンは鉄滓付着部分である。ただし49—17は砥面、38—11は吸炭部である。羽口のスクリーントーンで細かい方は鉄滓付着範囲、荒い方は還元範囲である。

土器の中心線が1点鎖線のものは、180°転回して復元実測したものである。

遺物表の胎土はA砂粒、B石英、C長石、D片岩、E酸化粒、F角閃石、G浮石、H雲母、I白色針状物質である。

遺物表の焼成の数字は5段階分類で1不良、3普通、5良である。

遺物表の色調は「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修1976）によった。

8　遺構の中には原則としてグリットポイントか座標軸が入れてある。グリッドポイントに併記した「西へ1m」はポイントから移動した方向と距離を表わす。

9　遺物写真図版中の番号は、出土遺構名と遺物番号で、挿図番号と同じである。住居跡挿図平面図中の番号は、挿図遺物番号と同じである。

10　本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第4課職員があたり横川好富が監修した。

11　本書の作成にあたり下記の方々に御教示いただいた。

武田宗久、薬師寺崇、村田六郎太、井上喜久男、斉藤孝正

目　　次

序

例　言

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5

Ⅲ　遺跡の概観 …… 7

Ⅳ　古墳時代前期の遺構と遺物 …… 11

1　住居跡 …… 11

Ⅴ　古墳と出土遺物 …… 28

Ⅵ　平安時代の以降の遺構と遺物 …… 50

1　住居跡 …… 50

2　製鉄関連遺構 …… 226

3　土　坑 …… 233

4　溝状遺構 …… 245

5　ピット群 …… 246

Ⅶ　グリッド・トレンチ・表採遺物 …… 251

Ⅷ　結　語 …… 266

Ⅸ　付　編 …… 296

1　台耕地遺跡出土土器の胎土分析結果報告 …… 296

2　台耕地遺跡試料樹種同定報告 …… 308

3　台耕地遺跡出土の鋳銅・製鉄関係遺跡の
金属学的調査 …… 309

挿　図　目　次

第１図　台耕地遺跡および周辺の古墳時代以降の遺跡……6
第２図　台耕地遺跡と地形図……9～10
第３図　第１号住居跡……12
第４図　第２号住居跡……13
第５図　第２号住居跡出土遺物……13
第６図　第５号住居跡出土遺物……13
第７図　第５号住居跡……14
第８図　第７号住居跡出土遺物……14
第９図　第７号住居跡……15
第10図　第10号住居跡……15
第11図　第11号住居跡……16
第12図　第11号住居跡出土遺物……16
第13図　第17号住居跡……17
第14図　第17号住居跡出土遺物……17
第15図　第19号住居跡……18
第16図　第20号住居跡……19
第17図　第20号住居跡出土遺物……19
第18図　第38号住居跡……21
第19図　第38号住居跡出土遺物(1)……22
第20図　第38号住居跡出土遺物(2)……23
第21図　第47号住居跡……26
第22図　第56号住居跡……27
第23図　第56号住居跡出土遺物……27
第24図　黒田第17号墳墳丘図……29
第25図　黒田第17号墳石室および断面図　31～32
第26図　黒田第17号墳石室遺物出土状況……33
第27図　黒田第17号墳出土直刀……33
第28図　黒田第17号墳出土土器……34
第29図　第号墳17石室出土遺物……35
第30図　黒田第17号墳出土円筒埴輪(1)……39
第31図　黒田第17号墳出土円筒埴輪(2)……40
第32図　黒田第17号墳出土形象埴輪……44
第33図　黒田第20号墳全体図……46
第34図　黒田第20号墳石室および断面図……47
第35図　黒田第20号墳出土遺物……48
第36図　黒田第21号墳全体図……49
第37図　第３号住居跡……50
第38図　第３号住居跡出土遺物……51
第39図　第４号住居跡……53
第40図　第４号住居跡出土遺物……54
第41図　第６号住居跡……55
第42図　第６号住居跡出土遺物……56
第43図　第８号住居跡……58
第44図　第８号住居跡精錬炉……59
第45図　第８号住居跡出土遺物(1)……60
第46図　第８号住居跡出土遺物(2)……61
第47図　第９号住居跡……63
第48図　第９号住居跡出土遺物……64
第49図　第13号住居跡……65
第50図　第13号住居跡出土遺物……66
第51図　第21号住居跡……69
第52図　第21号住居跡出土遺物……69
第53図　第23号住居跡……71
第54図　第23号住居跡出土遺物……71
第55図　第24号住居跡……72
第56図　第24号住居跡出土遺物……73
第57図　第25号住居跡……73
第58図　第25号住居跡出土遺物……74
第59図　第42号住居跡……75
第60図　第43号住居跡……76
第61図　第43号住居跡出土遺物……77
第62図　第44号住居跡……79
第63図　第44号住居跡出土遺物(1)……80
第64図　第44号住居跡出土遺物(2)……82
第65図　第44号住居跡出土遺物(3)……84
第66図　第48号住居跡……85

第67図　第48号住居跡出土遺物(1)……86
第68図　第48号住居跡出土遺物(2)……87
第69図　第49号住居跡……90
第70図　第49号住居跡出土遺物(1)……91
第71図　第49号住居跡出土遺物(2)……93
第72図　第49号住居跡出土遺物(3)……95
第73図　第50・53号住居跡……97
第74図　第50号住居跡出土遺物(1)……98
第75図　第50号住居跡出土遺物(2)…… 100
第76図　第52号住居跡…… 102
第77図　第52号住居跡出土遺物…… 103
第78図　第57号住居跡…… 104
第79図　第57号住居跡出土遺物(1)…… 105
第80図　第57号住居跡出土遺物(2)…… 107
第81図　第58号住居跡…… 108
第82図　第58号住居跡出土遺物…… 109
第83図　第59号住居跡…… 111
第84図　第59号住居跡出土遺物…… 112
第85図　第60号住居跡…… 114
第86図　第60号住居跡出土遺物(1)…… 115
第87図　第60号住居跡出土遺物(2)…… 117
第88図　第61号住居跡…… 118
第89図　第61号住居跡出土遺物…… 119
第90図　第62号住居跡…… 122
第91図　第62号住居跡出土遺物…… 123
第92図　第63号住居跡…… 125
第93図　第64号住居跡…… 126
第94図　第64号住居跡出土遺物(1)…… 127
第95図　第64号住居跡出土遺物(2)…… 127
第96図　第65号住居跡…… 129
第97図　第65号住居跡出土遺物…… 129
第98図　第66号住居跡出土遺物(1)…… 130
第99図　第66号住居跡…… 131
第100図　第66号住居跡出土遺物(2)…… 132
第101図　第67号住居跡…… 134
第102図　第67号住居跡出土遺物…… 135
第103図　第68号住居跡出土遺物…… 136
第104図　第68号住居跡…… 137
第105図　第69号住居跡出土遺物…… 137
第106図　第70号住居跡出土遺物…… 138
第107図　第72号住居跡出土遺物…… 138
第108図　第69・70号住居跡……139～140
第109図　第71・72号住居跡…… 141
第110図　第73号住居跡……143～144
第111図　第73号住居跡出土遺物(1)…… 145
第112図　第73号住居跡出土遺物(2)…… 147
第113図　第74号住居跡…… 148
第114図　第74号住居跡出土遺物…… 149
第115図　第75号住居跡……151～152
第116図　第75号住居跡出土遺物…… 153
第117図　第76号住居跡……155～156
第118図　第76号住居跡出土遺物(1)…… 157
第119図　第76号住居跡出土遺物(2)…… 159
第120図　第76号住居跡出土遺物(3)…… 161
第121図　第76号住居跡出土遺物(4)…… 163
第122図　第76号住居跡出土遺物(5)…… 164
第123図　第77号住居跡…… 166
第124図　第77号住居跡出土遺物(1)…… 167
第125図　第77号住居跡出土遺物(2)…… 170
第126図　第77号住居跡出土遺物(3)…… 172
第127図　第78号住居跡…… 173
第128図　第78号住居跡出土遺物…… 174
第129図　第79号住居跡…… 176
第130図　第79号住居跡出土遺物…… 177
第131図　第80号住居跡…… 179
第132図　第80号住居跡出土遺物…… 179
第133図　第81号住居跡…… 180
第134図　第81号住居跡出土遺物…… 181
第135図　第81号住居跡…… 183
第136図　第82号住居跡出土遺物…… 184
第137図　第83号住居跡…… 185
第138図　第83号住居跡出土遺物…… 186

第139図 第84号住居跡…… 189
第140図 第84号住居跡出土遺物…… 191
第141図 第85号住居跡…… 192
第142図 第85号住居跡出土遺物…… 194
第143図 第86号住居跡…… 195
第144図 第86号住居出土遺物…… 196
第145図 第87号住居跡…… 197
第146図 第87号住居跡出土遺物(1)…… 199
第147図 第87号住居跡出土遺物(2)…… 201
第148図 第88号住居跡…… 202
第149図 第88号住居跡出土遺物…… 202
第150図 第89号住居跡…… 203
第151図 第89号住居跡出土遺物…… 205
第152図 第90号住居跡出土遺物…… 206
第153図 第90号住居跡…… 206
第154図 第91号住居跡…… 207
第155図 第91号住居跡出土遺物…… 207
第156図 第92号住居跡…… 208
第157図 第92号住居跡出土遺物…… 209
第158図 第93号住居跡……211～212
第159図 第93号住居跡出土遺物(1)…… 213
第160図 第93号住居跡出土遺物(2)…… 215
第161図 第94号住居跡…… 216
第162図 第94号住居跡出土遺物…… 217
第163図 第95号住居跡…… 218
第164図 第95号住居跡出土遺物…… 218
第165図 第96号住居跡…… 220
第166図 第96号住居跡出土遺物(1)…… 221
第167図 第96号住居跡出土遺物(2)…… 222
第168図 第97号住居跡…… 224
第169図 第97号住居跡出土遺物…… 224
第170図 第1号製製炉…… 226
第171図 第2号製錬炉…… 228
第172図 第2号製錬炉出土遺物…… 229
第173図 第3号製錬炉…… 230
第174図 第3号製錬炉近辺出土遺物…… 231
第175図 製鉄関連遺構…… 233
第176図 第99号土坑出土遺物…… 233
第177図 第1～6・8号土坑…… 235
第178図 第9～11・37・54・65・66号土坑 236
第179図 第63・64・67～70号土坑…… 237
第180図 第71～76号土坑…… 238
第181図 第77～85号土坑…… 239
第182図 第86～92・98～100号土坑……240
第183図 第101～107号土坑…… 241
第184図 第108～112号土坑…… 242
第185図 第113号土坑・土坑群……243
第186図 土坑群断面図…… 244
第187図 土坑群出土遺物…… 244
第188図 第1号溝状遺構…… 245
第189図 第2号溝状遺構及び第1ピット群 247～248
第190図 第1ピット群…… 249
第191図 第2ピット群…… 250
第192図 Ⅰ区トレンチ出土遺物(1)…… 252
第193図 Ⅰ区トレンチ出土遺物(2)…… 254
第194図 Ⅰ区トレンチ出土遺物(3)…… 256
第195図 Ⅱ区表採遺物…… 259
第196図 Ⅳ区A・B・Cトレンチ、B地区、表採遺物…… 260
第197図 Ⅳ区トレンチ設定図…… 261
第198図 Ⅳ区トレンチ土層図…… 262
第199図 Ⅴ区A・B地点、表採遺物…… 264
第200図 黒田第17号墳出土歴史時代遺物… 265
第201図 須恵器の生産地別搬入率…… 271
第202図 時期別住居跡分布図(1)…… 282
第203図 時期別住居跡分布図(2)…… 283
第204図 時期別住居跡分布図(3)…… 284
第205図 住居跡の規模…… 286
第206図 住居跡の主軸方位…… 287
第207図 製鉄関連遺物出土状況…… 292

付編1

第1図　三角ダイヤグラム位置分類図…… 298
第2図　菱形ダイヤグラム位置分類図…… 298
第3図　三角ダイヤグラム位置分類図…… 300
第4図　菱形ダイヤグラム位置分類図…… 300
第5図　QT—PL相関図…… 304
第6図　胎土分析資料…… 307

付編3

Fig. 1　Cu—Su 合金状態図…… 328
Fig. 2　台耕地遺跡出土品の鉄鋼製造法概念図…… 329
Fig. 3　製鉄原料の還元反応を示す相ダイヤグラム…… 331
Fig. 4　Fe—C—O 系に対する浸炭と還元の平衡状態図…… 332

付　図　目　次

付図1　台耕地遺跡全体図
付図2　黒田第17号墳全体図
付図3　黒田第17号墳太刀形埴輪
付図4　製鉄遺構周辺図
付図5　台耕地遺跡平安時代土器編年

表　目　次

第1表　住居跡名新旧対照表…… 8
第2表　黒田第17号墳石室出土ガラス玉……37
第3表　土坑統計測表…… 234
第4表　台耕地遺跡土器編年…… 280
第5表　住居跡出土製鉄関連遺物表…… 289

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景　第１号住居跡
図版２　第２号住居跡　第５号住居跡
図版３　第７号住居跡　第10号住居跡
図版４　第11号住居跡　第17号住居跡
図版５　第19号住居跡　第20号住居跡
図版６　第38号住居跡　第47号住居跡
図版７　黒田第17号墳近景　黒田第17号墳
図版８　黒田第17号墳石室　黒田第17号墳石室
図版９　黒田第17号墳墳丘土層断面　黒田第17号墳周溝
図版10　黒田第17号墳太刀形埴輪出土状況　黒田第17号墳奥壁　黒田第17号墳直刀出土状況
図版11　黒田第20等墳・第97号住居跡　黒田第20号墳石室
図版12　第３号住居跡　第３号住居跡竈
図版13　第４号住居跡　第６号住居跡
図版14　第８号住居跡　第８号住居跡精錬炉
図版15　第９号住居跡　第13号住居跡
図版16　第21号住居跡　第23号住居跡
図版17　第24号住居跡　第25号住居跡
図版18　第42号住居跡　第43号住居跡
図版19　第44号住居跡　第44号住居跡遺物出土状況
図版20　第48号住居跡　第49号住居跡
図版21　第50号住居跡　第52号住居跡
図版22　第53号住居跡　第57号住居跡
図版23　第58号住居跡　第59号住居跡
図版24　第60号住居跡　第61号住居跡
図版25　第62号住居跡　第62号住居跡羽口出土状況
図版26　第63号住居跡　第64号住居跡
図版27　第65号住居跡　第66号住居跡
図版28　第67号住居跡　第68号住居跡
図版29　第69号住居跡　第70号住居跡
図版30　第73号住居跡　第74号住居跡
図版31　第75号住居跡　第76号住居跡
図版32　第77号住居跡　第78号住居跡
図版33　第79号住居跡　第81号住居跡
図版34　第82号住居跡　第83号～86号住居跡
図版35　第83号住居跡　第84号住居跡
図版36　第85号住居跡　第86号住居跡
図版37　第87号住居跡　第88号住居跡
図版38　第89号住居跡　第89号住居跡竈
図版39　第90号住居跡　第91号住居跡
図版40　第92号住居跡　第93号住居跡
図版41　第93号住居跡　第93号住居跡
図版42　第94号住居跡　第94号住居跡鉄滓出土状況
図版43　第95号住居跡　第96号住居跡
図版44　製錬炉近景　第１号製錬炉
図版45　第２号製錬炉　第２号製錬炉
図版46　第３号製錬炉　製鉄遺構
図版47　竈集成
図版48　竈集成
図版49　土坑集成
図版50　土坑集成
図版51　土坑集成　第１ピット群
図版52　第17・20号住居跡出土遺物
図版53　第38号住居跡出土遺物
図版54　第38号住居跡出土遺物
図版55　黒田第17号墳出土遺物
図版56　黒田第17号墳出土土器及び埴輪
図版57　黒田17号墳出土埴輪　黒田17号墳・20号墳出土遺物
図版58　第３・４・６号住居跡出土遺物
図版59　第６・８・９号住居跡出土遺物
図版60　第13・21・25号住居跡出土遺物

図版61　第25・43・44号住居跡出土遺物
図版62　第44号住居跡出土遺物
図版63　第48・49号住居跡出土遺物
図版64　第49・50・52・57・59号住居跡出土遺物
図版65　第59・60・61号住居跡出土遺物
図版66　第60・61・61号住居跡出土遺物
図版67　第64・65・66号住居跡出土遺物
図版68　第73・74・76号住居跡出土遺物
図版69　第76号住居跡出土遺物
図版70　第77号住居跡出土遺物
図版71　第77・78・79号住居跡出土遺物
図版72　第79・81・82・83号住居跡出土遺物
図版73　第83・84・85・87号住居跡出土遺物
図版74　第87・89号住居跡出土遺物
図版75　第89・93号住居跡出土遺物
図版76　第93・94・95号住居跡出土遺物
図版77　第96・97号住居跡、99土坑、土坑群出土遺物
図版78　出土遺物
図版79　出土遺物（紡錘車）
図版80　出土遺物（土錘）
図版81　鉄製品
図版82　製鉄関連分析資料(1)　製鉄関連分析資料(2)
図版83　土器胎土分析
図版84　樹種同定
図版85　小銅塊・砂鉄・獣脚の顕微鏡組織
図版86　鉄鏃の顕微鏡組織
図版87　刀子・容器状鋳造品の顕微鏡組織
図版88　獣脚・須恵器付着鉄滓の顕微鏡組織
図版89　製錬滓・小鉄塊の顕微鏡組織
図版90　精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓・製鉄滓の顕微鏡組織
図版91　砂鉄・製錬滓の顕微鏡組織
図版92　小銅塊（ＤＡＩ－１）のエネルギー分散分析結果
図版93　鉄鏃中（ＤＡＩ－３）の非金属介在物の走査Ｘ線像（金属鉄）
図版94　鉄鏃中（ＤＡＩ－３）の非金属介在物のエネルギー分析結果（金属鉄）
図版95　容器状鋳造品（ＤＡＩ－６）金属鉄のエネルギー分散分析結果
図版96　小鉄塊（ＤＡＩ－９）中の非金属介在物の走査線像（金属鉄）
図版97　小鉄塊（ＤＡＩ－９）中の非金属介在物のエネルギー分散分析結果

Ⅰ　発掘調査に至る経過

関越自動車道新潟線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る310㎞の高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年8月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間2遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至る、いわゆる東松山以北については、昭和44年4月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、5万分の1の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あて提出した。

1　県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。

2　その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。

3　出土品が多量にあると予想されるので、資料館・陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。

4　当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約2キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年5月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、5千分の1の図面によるルート説明、さらに、本年6月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この5千分の1のルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、量大な支障のある場合は、5月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約1年が経過。昭和46年4月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道建設計画にかかる東松山町～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打合せ会が行われ、同年8月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建

設局と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と並行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、5万分の1の地形図上にルート案のセンター両側2キロメートル、さらに2千分の1の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、5万分の1の地形図を利用したセンター両側2キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団では、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年4月、日本道路公団高速道路建設局から千分の1平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
滑川　1号	屋田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川　2号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房字寺の台	塚	
嵐山　1号	越畑城跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山	城館跡	戦国
寄居　1号	おかね塚	大里郡寄居町大字鷲巣	塚	
花園　1号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居　2号	新堀遺跡	大里郡寄居大町字用土字新堀	塚	
寄居　3号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部　1号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部　2号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古墳
美里　1号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉　1号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　2号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　3号	女堀条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字堰場	条里跡	奈良・平安
上里　1号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七本木字本郷下	集落跡	古墳
上里　2号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七本木字愛宕耕地	集落跡	古墳
上里　3号	中堀遺跡	児玉郡上里町大字堰字中堀北	集落跡	奈良・平安
上里　4号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帯刀字堀の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年2月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月、上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければならないとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とかち合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要する遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議を開始した。

その後、公団側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ了解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建総総第222号で、日本道路公団高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を経由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付けで締結した「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公団と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との副申を付け、文化庁に進達した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会に上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公団東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号（本郷東遺跡）をトップに関越自動車道東松山―上里町間約36キロメートル内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、随時確認調査を進めた。そして新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公団に提示し、発掘調査を実施した。

（横川好富）

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
嵐山 2号	中郷遺跡	比企郡嵐山町大字広野字中郷	集落跡	縄文
寄居 5号	中井丘遺跡	大里郡寄居町大字用土字中井丘		縄文
寄居 6号	中山遺跡	大里郡寄居町大字用土字中山		
寄居 7号	狐久保遺跡	大里郡寄居町大字用土字狐久保		縄文
寄居 8号	平原遺跡	大里郡寄居町大字用土字平原	集落跡	奈良・平安
寄居 9号	鶴巻遺跡	大里郡寄居町大字赤浜字鶴巻	集落跡	縄文・平安
岡部 3号	北坂遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	古墳群・集落跡	縄文・古墳
美里 2号	甘粕山遺跡	児玉郡美里村大字甘粕字東山	集落跡	縄文・古墳・平安
児玉 4号	後張遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字下モ田 本庄市大字四方田字堰場	集落跡	古墳
上里 5号	耕安地遺跡	児玉郡上里町大字堤字中堀北	寺院跡	平安・鎌倉
上里 6号	久城前遺跡	児玉郡上里町大字嘉美字一本松西 本庄市大字今井字久城前		奈良・平安

発堀調査の組織

1　発　　掘

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田　正利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課　長	杉山　泰之
		主幹兼課長補佐	秋葉　一男
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早川　智明
			柿沼　幹夫
			駒宮　史朗
			本間　岳史
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川　清
			太田　和夫
			千村　修平
			沼野　　勉
発　　掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横川　好富
			鈴木　敏昭
			中島　　宏

2　整　　理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井　五郎
		副理事長	岩上　　進
		常務理事	石川　正美
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野　長二
			関野　栄一
			江田　和美
			福田　啓子
			福田　　浩
			本庄　朗人
整　　理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川　好富
		調査研究副部長	小川　良祐
		調査研究第四課長	今泉　泰之
			酒井　清治
			鈴木　仁子

3　協力者　大里郡花園町教育委員会・地元区長及び地元住民

Ⅱ　遺跡の立地と環境

台耕地遺跡は大里郡花園町大字黒田字竹後1870番地ほかに位置し、秩父鉄道永田駅の南西1.5㎞にある。現状は関越自動車道花園インターチェンジとなっている。

遺跡の南を流れる荒川は秩父山地を源として皆野・長瀞の三波川結晶片岩から成る狭谷地形を流れ、寄居にて山地を抜け広い川幅となって東流する。荒川は左右に河岸段丘（寄居鉢形段丘）をつくり、寄居から東へ5㎞の地点で緩やかに北東に屈曲するが、台耕地遺跡はこの北側の左岸段丘上に立地する。この地域は3段の段丘を形成するが、台耕地遺跡はいずれの段丘上にも占地する。しかしその主体は下から2・3段目の段丘であり、1段目の2基の古墳は西から延びる黒田古墳群の一部である。遺跡は表土近くまで砂礫が見られ、遺構はそこに掘られており、遺構の確認を不明確にする原因となった。

まず古墳群は流川左岸上流から花園町小前田古墳群・黒田古墳群（塩野・小久保1975）、川本町見目古墳群と続き、右岸では寄居町赤浜古墳群、川本村箱崎古墳群、塚原古墳群、鹿島古墳群がある。

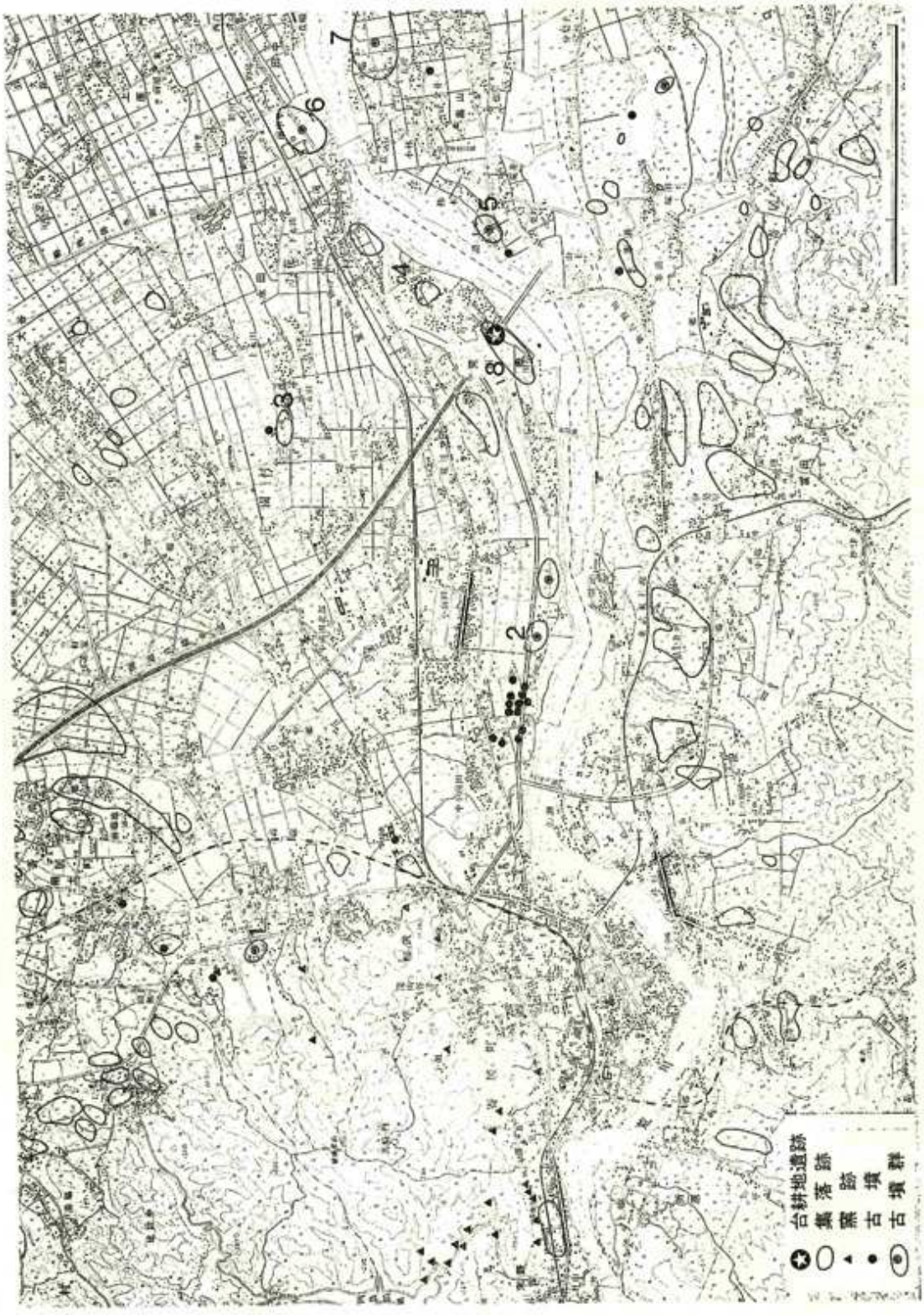
このうち発掘調査されたのは小前田、黒田、見目、塚原、箱崎、鹿島の各古墳群でいずれも内部主体は河原石を使用した横穴式石室であった。石室は胴張りを持つもの持たないもの様々であるが、台耕地遺跡検出の胴張り石室と類似する石室は、小前田に5基（塚原遺跡3基を含む）、箱崎に2基、鹿島に27基がある。このうち鹿島古墳群は7世紀後半以降の築造と考えられ、台耕地遺跡内の古墳よりも新しいが、他の古墳は6世紀後半から7世紀前半にかけて築造され、近接する年代であろう。台耕地遺跡内の2基の古墳は、黒田古墳群として含まれているが、群の主体から300㎡北東に位置しており、古墳群の主体の石室が狭長な長方形であることからも時期的、空間的な差を窺うことができる。

平安時代の集落は、荒川北の櫛引台地上、南の江南台地に立地し、台耕地遺跡から北側にも狭い範囲の遺跡分布が見られる。この分布のあり方は、縄文時代の分布と類似しており、湧水に左右された占地の可能性がある。

しかし平安時代の集落の調査が進行すれば、台耕地遺跡のような荒川の砂鉄を使い鉄生産、鉄器生産を行なう、製鉄関係の集落も増加することであろう。5～7㎞上流には、台耕地遺跡へも供給する須恵器生産の行なわれた末野窯跡群があり、付近には工房、工人の集落跡も存在するはずである。このように当地域は生産にかかわる集落の探究、生産物の需給関係の解明など問題とすべきことは多い。

周辺の遺跡地名表

1.　飯塚古墳群	2.　小前田古墳群	3.　東大塚遺跡
4.　宮台遺跡	5.　箱崎古墳群	6.　見目古墳群
7.　塚原古墳群	8.　黒田古墳群	



第1図　台耕地遺跡および周辺の古墳時代以降の遺跡

Ⅲ　遺跡の概観

遺跡は大里郡花園町黒田に位置し、緩く蛇行する流川左岸の段丘上に立地する。

遺跡は３段の河岸段丘のいずれにも広がり、下から１段目を上川端地区（台耕地ⅠではＡ区）、２段目（Ｂ区）は１列から北側をⅠ区に、１列から南で９列から西をⅡ区、東をⅤ区とした。３段目（Ｃ区）はⅣ区として発掘を進めた（付図１）。

まず上川端地区では古墳２基と平安期の住居跡１軒が調査されたが、墳丘を持つ黒田第17号墳は周知されていた（塩野・小久保1975）。新しく発見された古墳跡は黒田第20号墳と名付けた。

２段目の段丘は中央がやや高くなり、北へ張り出す形となる。そこに住居跡が集中して見られるが、南西へ行くにしたがい疎らとなる。縄文時代の住居跡はⅠ区の高い位置に26軒が集中していたが、東へ広がる集落の一部と考えられる（台耕地Ⅰで報告済）。次に古墳時代前期の住居跡群が、Ⅰ区の高まりが北西へ緩やかに傾斜する、72ｍラインに沿ってほぼ１列に10軒がつくられる。そこから南東と南の段丘中程にも、それぞれ１軒づつつくられるが、主軸方向にやや違いが見られる。平安時代の住居跡は40軒検出されたが、集中傾向は認められず、北東部と南部で数軒が切り合うことから、数期にわたり集落が形成されたと考えられる。住居跡のほか、Ⅴ区では古墳の周溝と考えられる溝が検出されたが、黒田第21号墳と名づけた。また西端では溝跡、ピット群などが検出されたが、時期・性格については不明である。

３段目の段丘からは平安時代の住居跡と製錬炉が、狭い範囲に集中していた。まず住居跡は18軒を数え、その多くは平坦面に存在し、その南側の段丘傾斜面には７～８ｍの間隔で製錬炉が３基検出された。同じ段丘傾斜面の南西側未発掘部分にも、鉄滓の散布する地域があり、大規模な製鉄作業が行なわれていたようである。

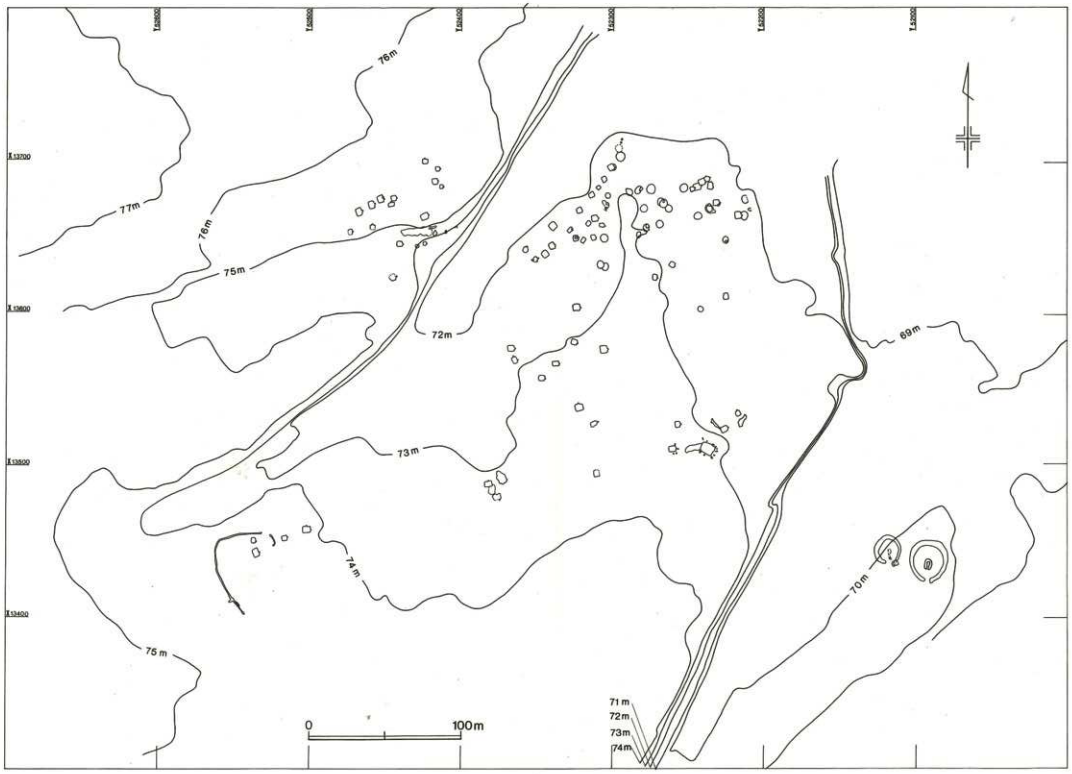
台耕地遺跡の平安時代の住居跡は、各段丘にわたり総数59軒を数えた。住居の方位はほぼ東を向き、風向きなどの規制を受けたものと思われる。２・３段目の段丘の全域には鉄滓が分布し、住居内にも多く流入していた。この鉄滓は多くが住居での製鉄作業あるいは鉄器製作工程で排出されたと考えられる。特に８号住居跡では中央から精錬炉が、44号住居跡からは鉄鋌が検出された。また93号住居跡からは獣脚の鋳型とその鋳造品が出土し、工房跡と考えられる。工房跡の下の96号住居跡内には、上から投げ込まれた羽口が50点検出されている。このように平安時代においては段丘を越えて、製錬炉を中心に製鉄工人の集落を形成していたと考えられる。

また製鉄とともに、44・49号住居跡では銅印を鋳造しており、管掌者と当遺跡を考える材料となろう。

各時期の集落は、発掘区域内で完結するものでなく、西方の未検出の製錬炉を中心に、まだ広がりを見るようで、Ⅱ区西端に検出された住居跡はその分布の一部と考えられる。今後このような生産と加工という、鉄生産の機構が解明される材料となろう。

第1表　住居跡名新旧対照表

新番号	旧番号	時期	新番号	旧番号	時期	新番号	旧番号	時期
1	Ⅰ区—1	五領	33	Ⅰ区—33	縄文	65	Ⅱ区—10	平安
2	Ⅰ区—2	五領	34	Ⅰ区—34	縄文	66	Ⅱ区—11	平安
3	Ⅰ区—3	平安	35	Ⅰ区—35	縄文	67	Ⅱ区—12	平安
4	Ⅰ区—4	平安	36	Ⅰ区—36	縄文	98	Ⅱ区—13	平安
5	Ⅰ区—5	五領	37	Ⅰ区—37	縄文	69	Ⅱ区—14	平安
6	Ⅰ区—6	平安	38	Ⅰ区—38	五領	70	Ⅱ区—15	平安
7	Ⅰ区—7	五領	39	Ⅰ区—39	縄文	71	Ⅱ区—16	平安
8	Ⅰ区—8	平安	40	Ⅰ区—40	縄文	72	Ⅱ区—17	平安
9	Ⅰ区—9	平安	41	Ⅰ区—41	縄文	73	Ⅱ区—18	平安
10	Ⅰ区—10	五領	42	Ⅰ区—42	平安	74	Ⅴ区—1	平安
11	Ⅰ区—11	五領	43	Ⅰ区—43	平安	75	Ⅴ区—2	平安
12	Ⅰ区—12	縄文	44	Ⅰ区—44	平安	76	Ⅴ区—3	平安
13	Ⅰ区—13	平安	45	Ⅰ区—45	縄文	77	Ⅴ区—4	平安
14	Ⅰ区—14	縄文	46	Ⅰ区—46	縄文	78	Ⅴ区—5	平安
15	Ⅰ区—15	五領	47	Ⅰ区—47	五領	79	Ⅳ区—1	平安
16	Ⅰ区—16	縄文	48	Ⅰ区—48	平安	80	Ⅳ区—2	平安
17	Ⅰ区—17	五領	49	Ⅰ区—49	平安	81	Ⅳ区—3	平安
18	Ⅰ区—18	縄文	50	Ⅰ区—50	平安	82	Ⅳ区—4	平安
19	Ⅰ区—19	五領	51	Ⅰ区—51	縄文	83	Ⅳ区—5	平安
20	Ⅰ区—20	五領	52	Ⅰ区—52	平安	84	Ⅳ区—6	平安
21	Ⅰ区—21	平安	53	Ⅰ区—53	平安	85	Ⅳ区—7	平安
22	Ⅰ区—22	縄文	54	Ⅰ区—54	縄文	86	Ⅳ区—8	平安
23	Ⅰ区—23	平安	55	Ⅰ区—55	縄文	87	Ⅳ区—9	平安
24	Ⅰ区—24	平安	56	Ⅱ区—1	五領	88	Ⅳ区—10	平安
25	Ⅰ区—25	平安	57	Ⅱ区—2	平安	89	Ⅳ区—11	平安
26	Ⅰ区—26	縄文	58	Ⅱ区—3	平安	90	Ⅳ区—12	平安
27	Ⅰ区—27	縄文	59	Ⅱ区—4	平安	91	Ⅳ区—13	平安
28	Ⅰ区—28	縄文	60	Ⅱ区—5	平安	92	Ⅳ区—14	平安
29	Ⅰ区—29	縄文	61	Ⅱ区—6	平安	93	Ⅳ区—15	平安
30	Ⅰ区—30	縄文	62	Ⅱ区—7	平安	94	Ⅳ区—16	平安
31	Ⅰ区—31	縄文	63	Ⅱ区—8	平安	95	Ⅳ区—17	平安
32	Ⅰ区—32	縄文	64	Ⅱ区—9	平安	96	Ⅳ区—18	平安



第2図　台耕地遺跡と地形図

Ⅳ　古墳時代前期の遺構と遺物

1　住居跡

古墳時代前期の住居跡は第２段丘上の、北へ張り出す高まりを持つ地域に分布する。

第１号住居跡（第３図）

14・15—２区に位置するが、規模は4.85×4.82m、深さは0.3mを測る、僅かに台形の住居跡である。長軸はN—44°30′—Wを測り、床標高は71.17mである。炉は未確認であり、壁はやや傾斜を持つ。10本のピットが見られるが、径0.35m前後で深さ0.1～0.2mを測るが、主柱穴は不明である。床には25～35cmの石が２点見られるが、出土遺物はなく、形態から五領期と考えられる。

第２号住居跡（第４図）

13—ミ区に位置し、規模は3.96×3.48m、深さは0.15mを測る。形態は西壁が短かいが、ほぼ正方形である。長軸はN—68°30′—Eを測り、床標高は71.25mである。炉は不明確で、壁はやや急である。ピットは６本存在するが、径0.23～0.34mで、深さ0.1mと浅く、主柱穴は中央寄りの4本の可能性がある。

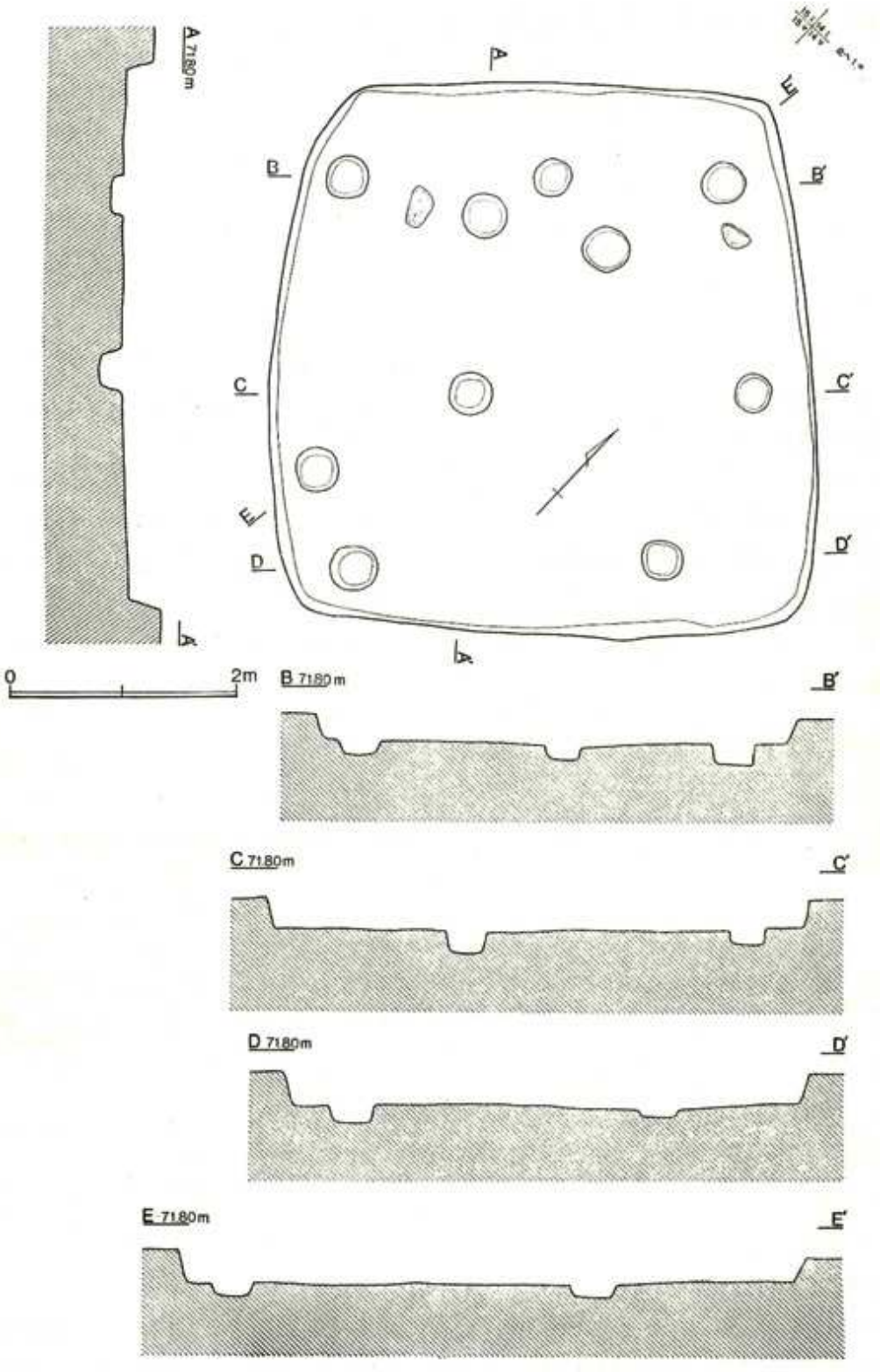
出土遺物は西壁寄りに土器が１点出土する。(1)は６号住居跡竈右ピットの破片と接合したが、当住居跡に伴なう遺物は(2)の高坏だけであり、五領期と考えられる。

第２号住居跡出土遺物（第５図）

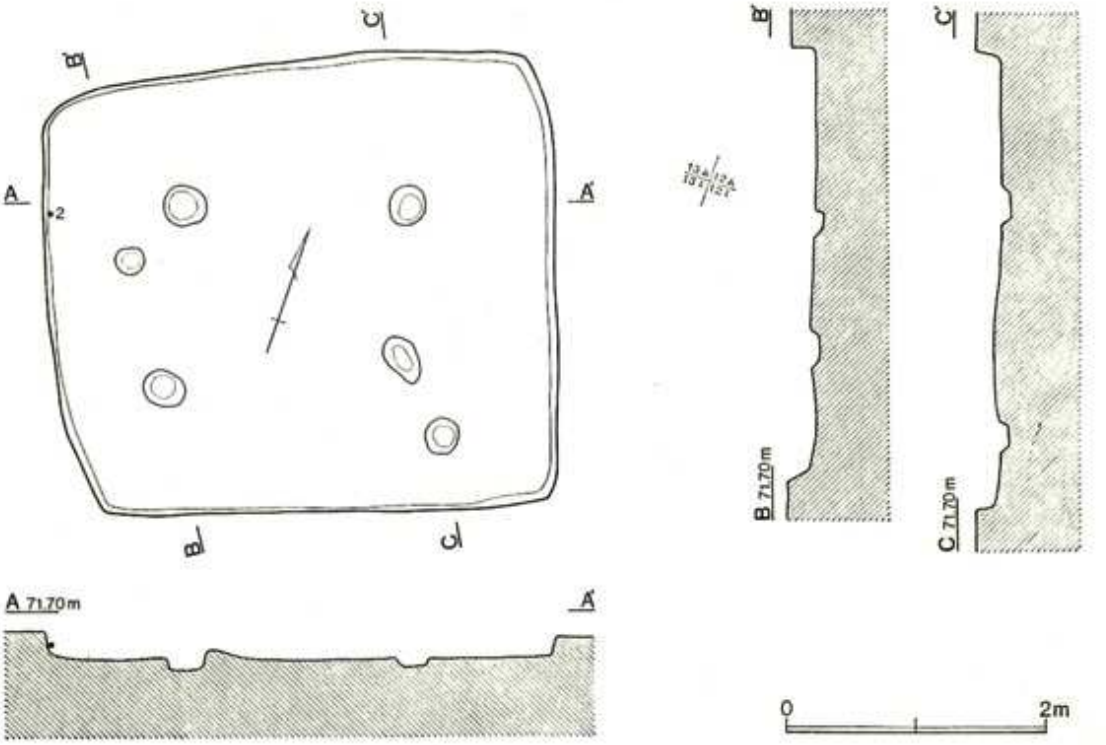
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	埦 須恵器	口径(18.5)	大形で胴は丸味を持ち、口唇は反り返る。	右轆轤撫で、９回転以上。	胎土：A＋B＋E＋G 焼成：３ 色調：５Y6/1灰 残存：口縁27%底部欠
2	高坏 土師器	脚径　8.3 現高　7.2	括れた基部から直線的に広がり、端部で大きく開く。内面には粘土帯接合痕が見られ、基部は肥厚する。	外面縦位の篦撫で後、篦磨き。裾部のみ横撫で。基部内面に絞り目あり。	胎土：細A＋B＋E＋F＋G　焼成：５ 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：脚部95%
3	甕 土師器	口径(17.0)	口縁はやや内傾するコの字口縁となる。	口縁は内外からの押圧により指頭痕が残り、その上を２段の横撫でが巡る。胴部は右から左への篦削り。	胎土：微A＋B＋E＋F＋G＋H　焼成：５ 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：口縁８%頸部15%

第５号住居跡（第７図）

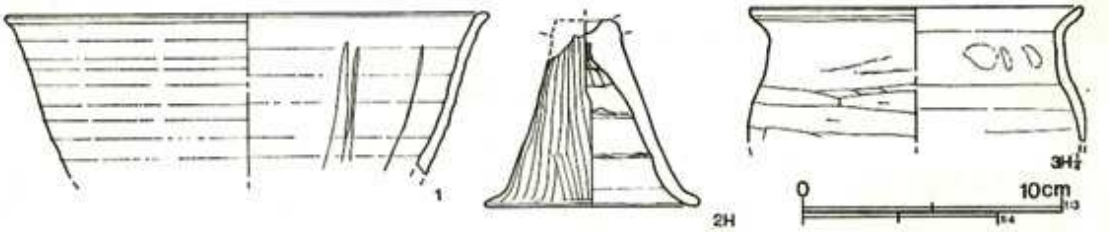
15—ヘ・ホ区に位置し、４号住居跡と６号住居跡の間にある。規模は4.5×3.8mで、深さ0.12mを測る。形態は長方形であり、長軸はN—45°—Wで、床標高は71.6mである。床は西隅に向いやや低くなり、柱穴は存在しない。遺物は覆土から五領期の壺(1)が出土する。



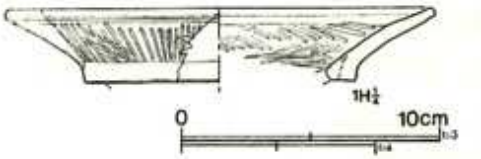
第3図　第1号住居跡



第4図　第2号住居跡



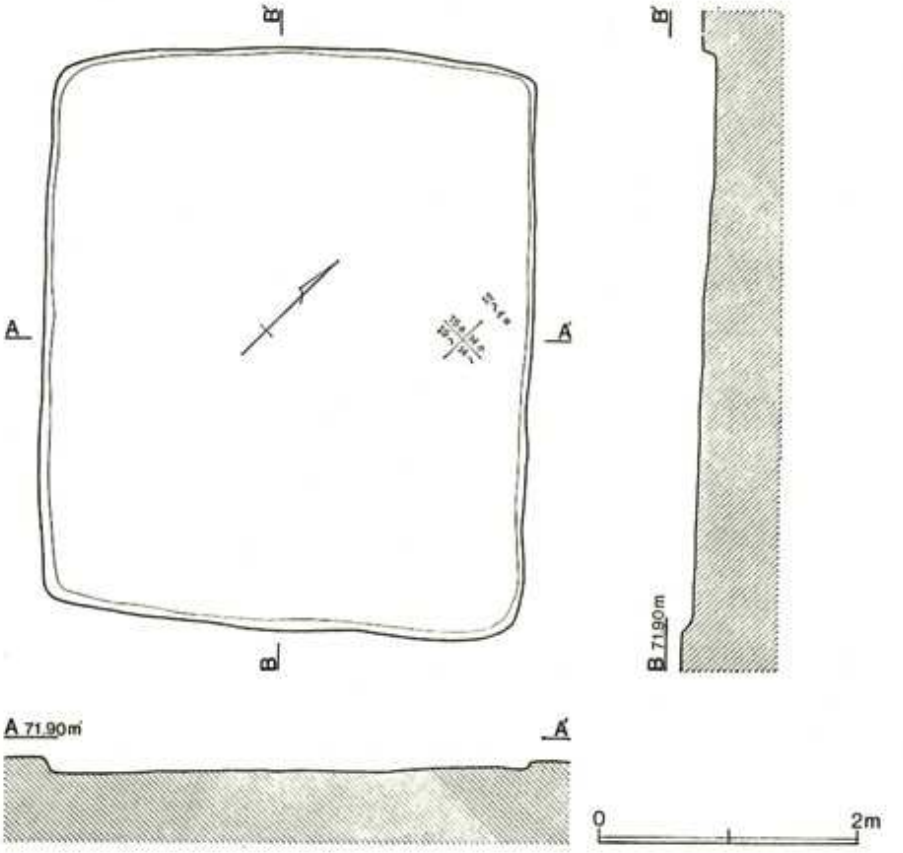
第5図　第2号住居跡出土遺物



第6図　第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物（第6図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 土師器	口径(22.0)	口縁中位の稜部から大きく外傾して口唇に至る。口唇は矩形につくられ、外面に浅い沈線を巡らす。	口縁外面は左上がりの刷毛目の後、横撫でを施し、その上を縦方向に篦磨きする。内面は左上がりの篦磨きの後、稜部付近は右上がりの篦磨きを施す。内面丹彩。	胎土：微A＋B＋E＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 内面下半吸炭 残存：18%　覆土

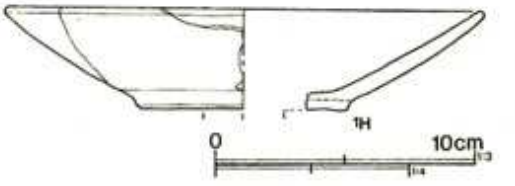


第7図　第5号住居跡

第7号住居跡（第9図）

13—マ区に位置するが、規模は3.5×2.7mで、深さは0.41mと少形でやや深い住居跡である。形態は北西壁と南西壁の不明確な、不整長方形である。長軸はN—48°—Eで、床標高は71.43mを測る、炉は未検出で、東隅に極く浅い落ち込みがあるが柱穴はない。

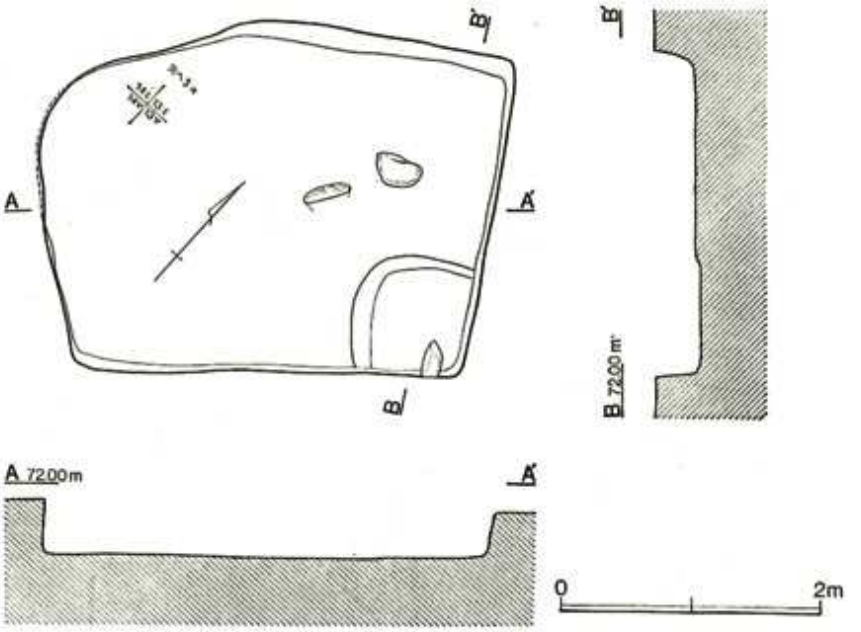
遺物は床面から五領期土師器高坏(1)が出土する。



第8図　第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡出土遺物（第8図）

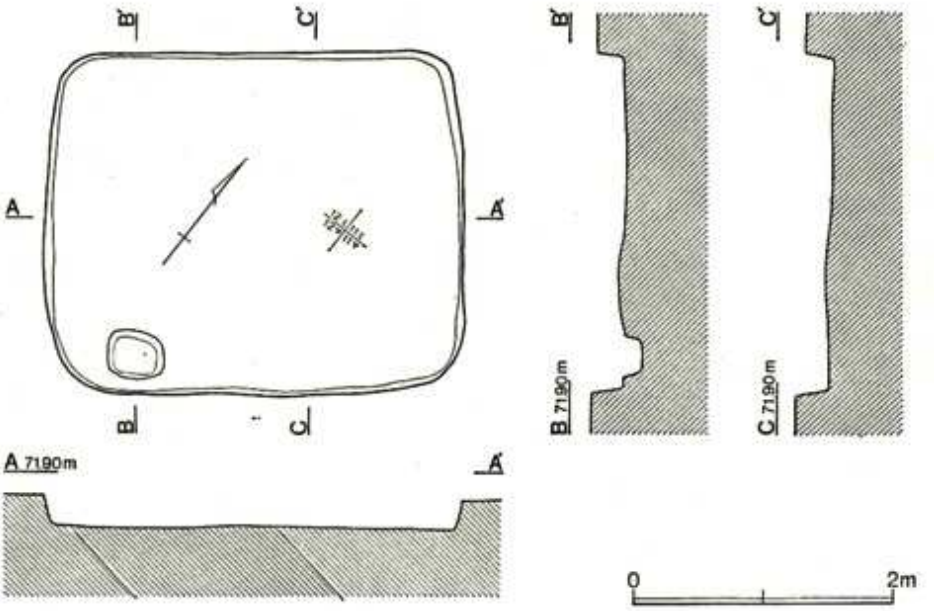
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高坏 土師器	口径(18.6) 現高　3.8	鈍い稜から僅かに丸味を持って立ち上がる。口唇部は丸くつくられる。内面は器面が荒れる。	内外面とも横撫でを施した後、僅かに縦位の磨きを施す。内外面とも丹彩。	胎土：細A＋B＋D＋G 焼成：2 色調：10R 4/6赤　外面吸炭　残存：20%　床面



第9図　第7号住居跡

第10号住居跡（第10図）

12—マ・ミ区に位置し、第3号住居跡に近接する。規模は3.26×2.64mで、深さは0.25mを測る。形態は隅丸長方形で、長軸はN—53°—W、床標高は71.46mを測る。炉は未検出で、南隅に貯

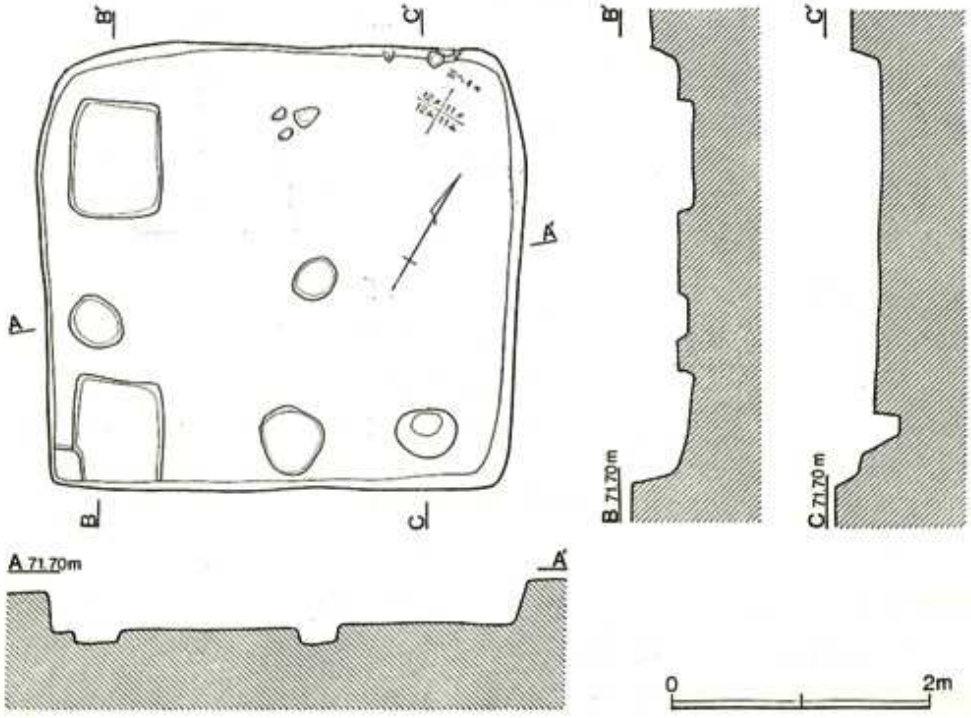


第10図　第10号住居跡

蔵穴と考えられる0.44×0.36m、深さ0.15mの隅丸長方形のピットがある。

出土遺物は須恵器坏片が覆土上層から出土するのみであるが、住居形態から五領期と考えられる。

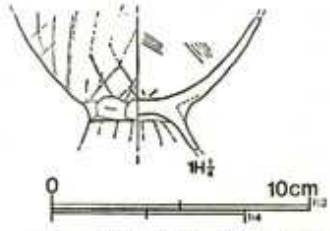
第11号住居跡（第11図）



第11図　第11号住居跡

12—ム区に位置する。規模は3.82×3.47mで、深さは0.34mと深い。形態は西隅が丸いが長方形では、長軸はN—58°30′—Eで、床標高は71.26mを測る。炉は検出されず、西壁に沿って長方形の浅い掘り込みが2ケ所と、円形のピットが4ケ所ある。中でも東隅のピットは0.47×0.37mで、深さが0.22mあることから貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物は台付甕(1)のみであり、五領期と考えられる。



第12図　第11号住居跡出土遺物

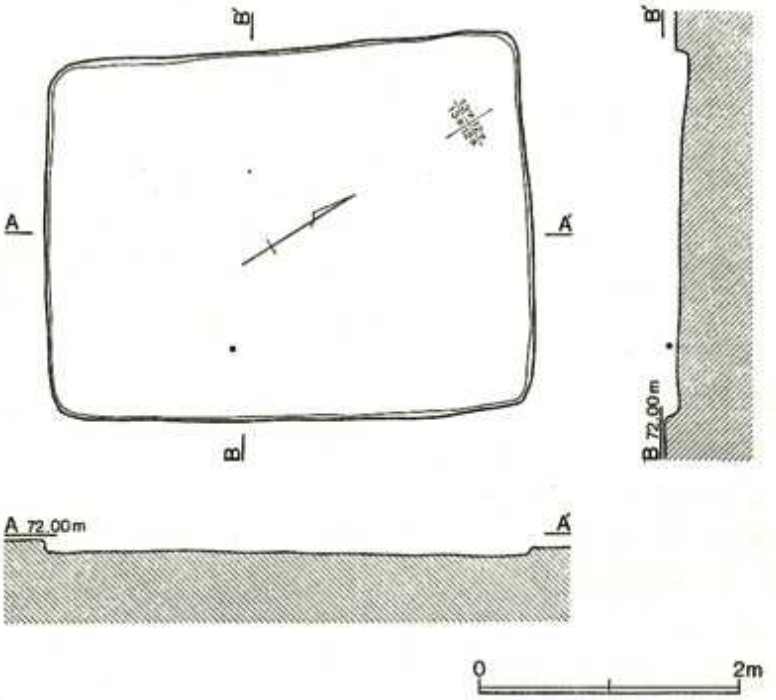
第11号住居跡出土遺物（第12図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	台付甕 土師器	基部径 4.9	基部から脚部へハの字状に開き、胴部はやや丸味を持ちながら立ち上がる。	外面は指頭痕が残り、その上を箆状工具により右上→左下へ撫でつける。内面底部中央は箆状工具による右→左への不連続撫で、胴部は左上への木口状工具撫で	胎土：粗A多＋B 焼成：4 色調：5YR7/6橙 残存：甕底部30%

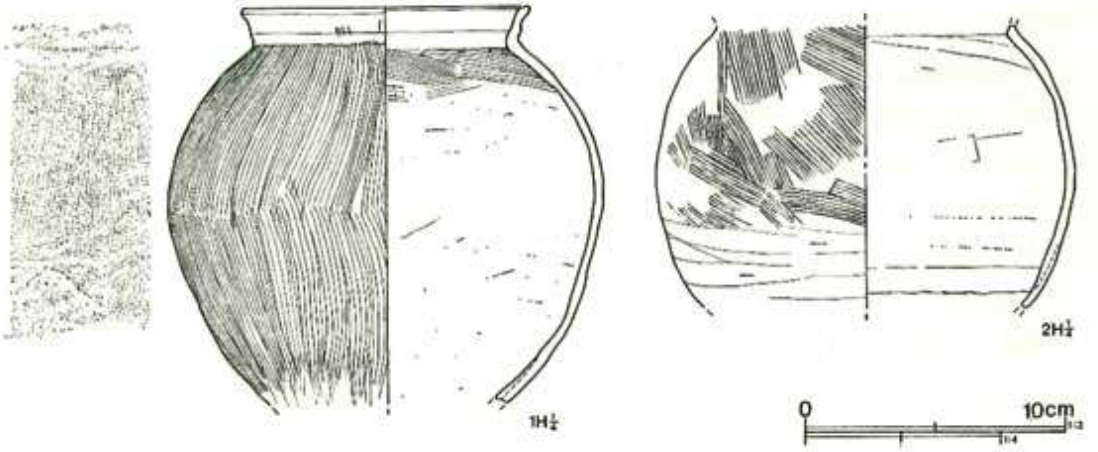
第17号住居跡（第13図）

12・13—ホ区に位置し、8号住居跡に近接する。規模は3.74×2.92m、深さ0.1mを測る。形態は僅かに隅丸の長方形であり、長軸はN—30°—Eで、床標高は71.85mを測る。炉および柱穴は未検出である。

出土遺物は土師器S字口縁の台付甕(1)が、南東壁寄りから出土するほか、甕(2)が1点出土しており、遺物から五領期の住居跡である。



第13図　第17号住居跡



第14図　第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物（第14図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	台付甕 土師器	口径 14.7 胴径 22.1 現高 20.0	最大径を胴やや上位に持ち、下半部はいちじく形に窄まる。口縁は僅かな稜を持ち、口唇にてやや外反するS字口縁となる。口縁の内側も稜に対応して浅く窪む。器肉は厚くなる。	口縁に横撫でを施した後、胴部上半を右上→左下へ、胴部下半を右→左へ箆削りする。その上を胴下半部は下→上、上半は左下→右上へ刷毛目が施される。内面は胴上位を右下→左上の刷毛目の後、下位を下→上、中位を左→右へ箆削りする	胎土：A＋B＋C＋E＋F＋G＋H 焼成：3 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：70%底部欠 二次加熱を受ける。 床面
2	甕 土師器	胴径(21.2)	球胴の胴部を持つ。	胴下位を右下→左上へ箆削りした後、胴上半部を右下→左上へ不連続の刷毛目を施す。口縁は横撫でをする。内面は胴下位の接合部と胴上位を箆削りした後、全体を右→左への箆撫でする。	胎土：細A＋B＋E＋F＋G＋H 焼成：2 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：20% 二次加熱を受ける。

第19号住居跡（第15図）

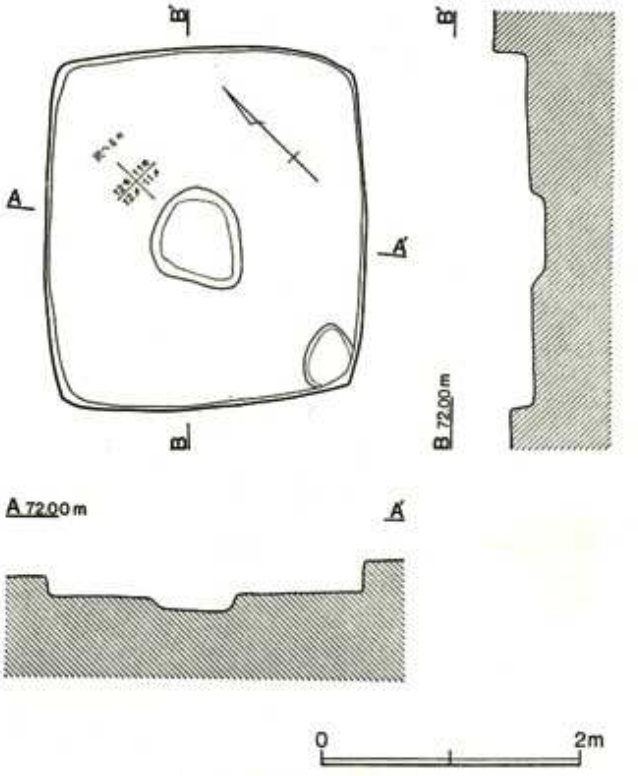
11・12—メ区に位置しており、規模は2.78×2.5m、深さ0.23mの小形住居跡である。形態はやや隅丸長方形で、長軸はN—45°—E、床標高は71.42mを測る。炉は未検出で、床中央に径0.72mの浅い不整円形ピットがあり、南隅にも貯蔵穴の可能性のある小ピットがあるが、柱穴はない。

出土遺物はないが、住居形態から五領期と考えられる。

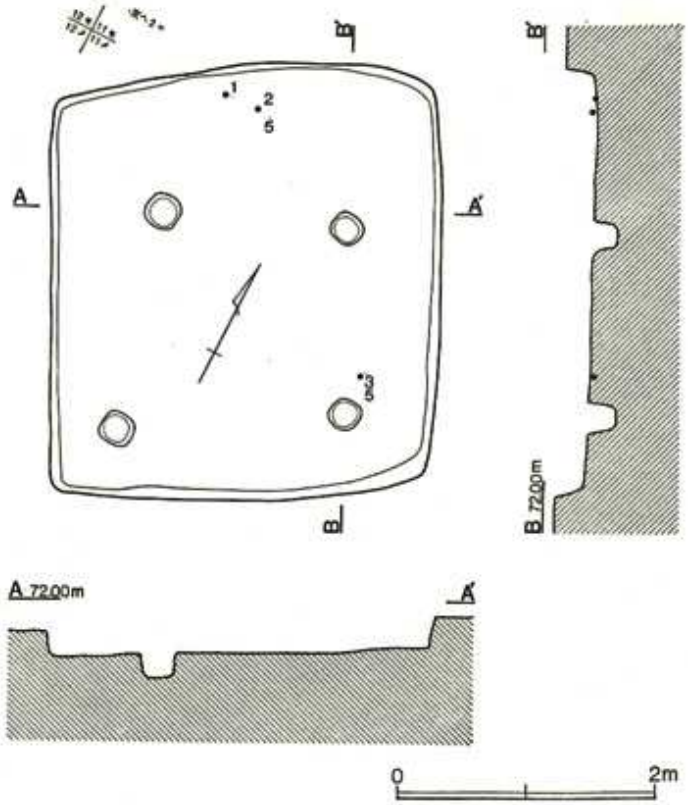
第20号住居跡（第16図）

11—メ区に位置する。規模は3.4×3.05m、深さm0.24を測る。形態はやや長方形で、長軸はN—27°—W、床標高は71.59mを測る。柱穴は4本存在するが北壁側はやや離れる。

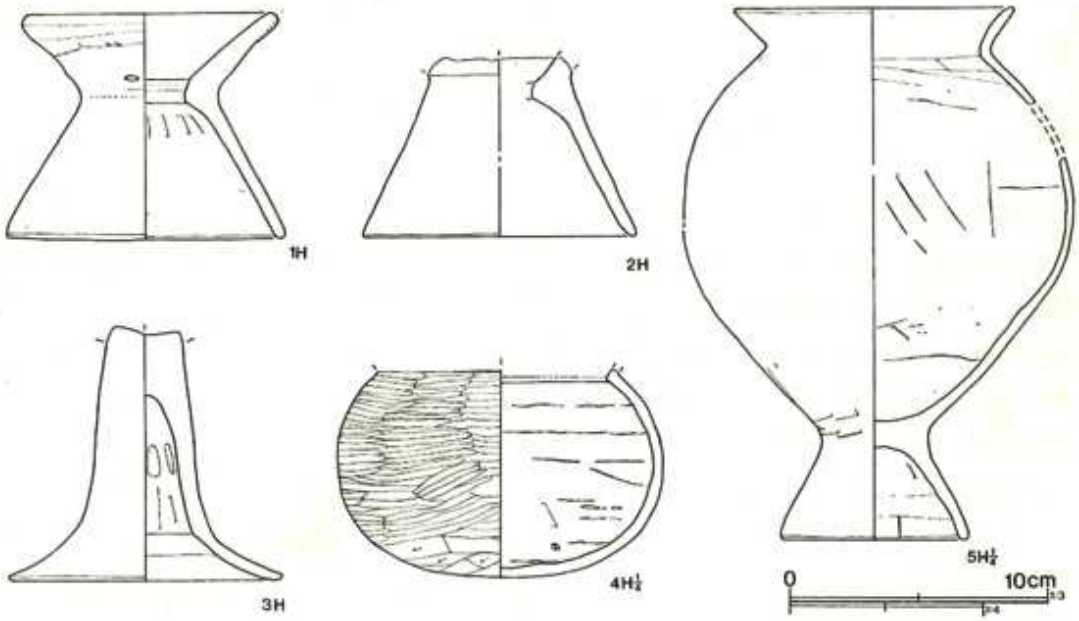
遺物は北壁中央付近に五領期の器台（1・2）、高坏（3）、台付甕（5）が、南東柱穴脇より高坏（3）、壺（4）が出土する。



第15図　第19号住居跡



第16図　第20号住居跡



第17図　第20号住居跡出土遺物

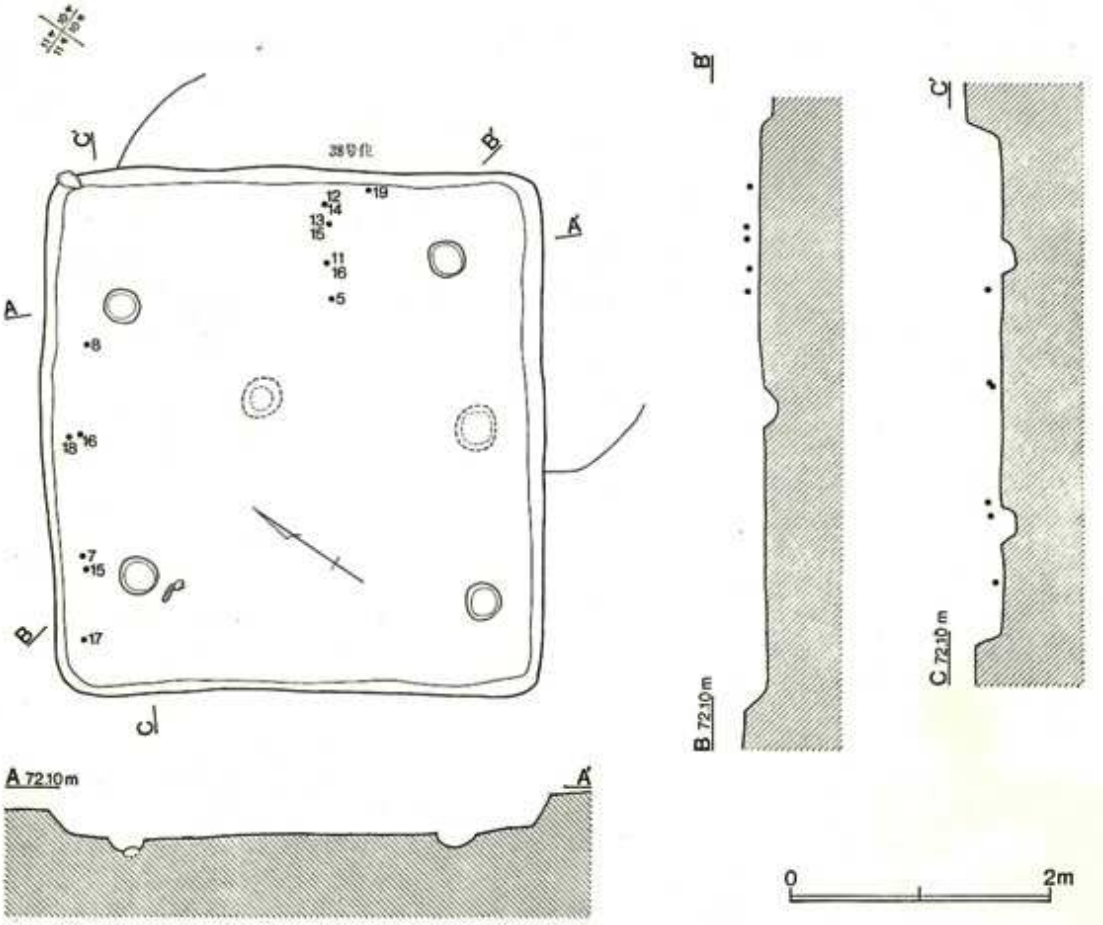
第20号住居跡出土遺物（第17図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	器台 土師器	口径 10.0 脚径 10.8 器高 8.7	脚台は直線的にハの字状に広がり、口縁も直線的に開くが、口唇にて名側に粘土を補足するため肥厚する。貫通する孔部を持つ。	摩滅が著しいため不明瞭であるが、脚台部上位に右→左への篦撫でが施される。	胎土：細A＋B＋C＋E＋F＋G　2・4と胎土類似 焼成：2 色調：7.5YR8/2灰白 残存：80%　床面 基部付近に紐痕あり。
2	器台 土師器	脚径(10.7) 現高 6.9	脚台部は直線的にハの字状に開く。脚端部は薄く、孔部は貫通する。	摩滅するため整形不明。	胎土：A＋C＋F＋G 焼成：1 色調：7.5YR8/2灰白 残存：脚台部25%
3	高坏 土師器	脚径 10.6 現高 9.8	僅かに開く細味の脚部から裾部へ大きく開き、薄くつくられる。	摩滅が著しいが、脚上位は縦位の篦磨きが施され、内面は右→左への篦削りが見られる。	胎土：細A＋B＋C＋E＋F＋G　焼成：2 色調：7.5YR8/2灰白 残存：脚部80%坏部欠床面
4	壺 土師器	胴径 16.7 現高 10.6	緩やかな丸底で、胴中位に最大径を持ち、下半部の脹れる扁平な球胴を呈する。	胴・底部に横位の篦削りを施した後、胴部に横位の篦磨きを行なう。内面は底部を篦削りした後、胴部を右→左へ横撫でする。	胎土：A＋B＋E＋F＋G 焼成：4 色調：5YR6/6橙 残存：胴部70%口縁欠 床面
5	台付甕 土師器	口径 14.3 胴径 19.9 脚径 9.1 現高(27.0)	脚台部は僅か内彎気味にハの字状に開き、胴部はいちじく形となる。口縁はくの字状に開くが、内面は丸味を持って外反する。	摩滅が著しい。脚台部内外とも一部木口状工具の撫でが見られる。胴部外面下位は篦により下→上へ削り上げており、内面は右→左への篦撫でが施される。口縁は内外とも横撫でする。	胎土：0.4以下A＋C＋F＋G 焼成：2　二次加熱を受る 色調：7.5YR8/3浅黄橙 残存：70%

第38号住居跡（第18図）

11—モ区に位置して、第55号住居跡（縄文時代）と切り合う。規模は4.02×3.9m、深さは0.29mを測る。やや長方形で長軸はN—56°—E、床標高は71.73mを測る。炉は不明であるが、床下に第55号住居跡の柱穴が2本ある。当住居跡に伴う柱穴は各隅に4本見られるが、北西壁側の柱穴間が狭くなる。層位は壁際に炭化物を含む茶褐色が、その上に同様な暗褐色が、中央付近の床直上には砂質の褐色土層が、上層には炭化物を含む黒色と黒褐色土が堆積する。

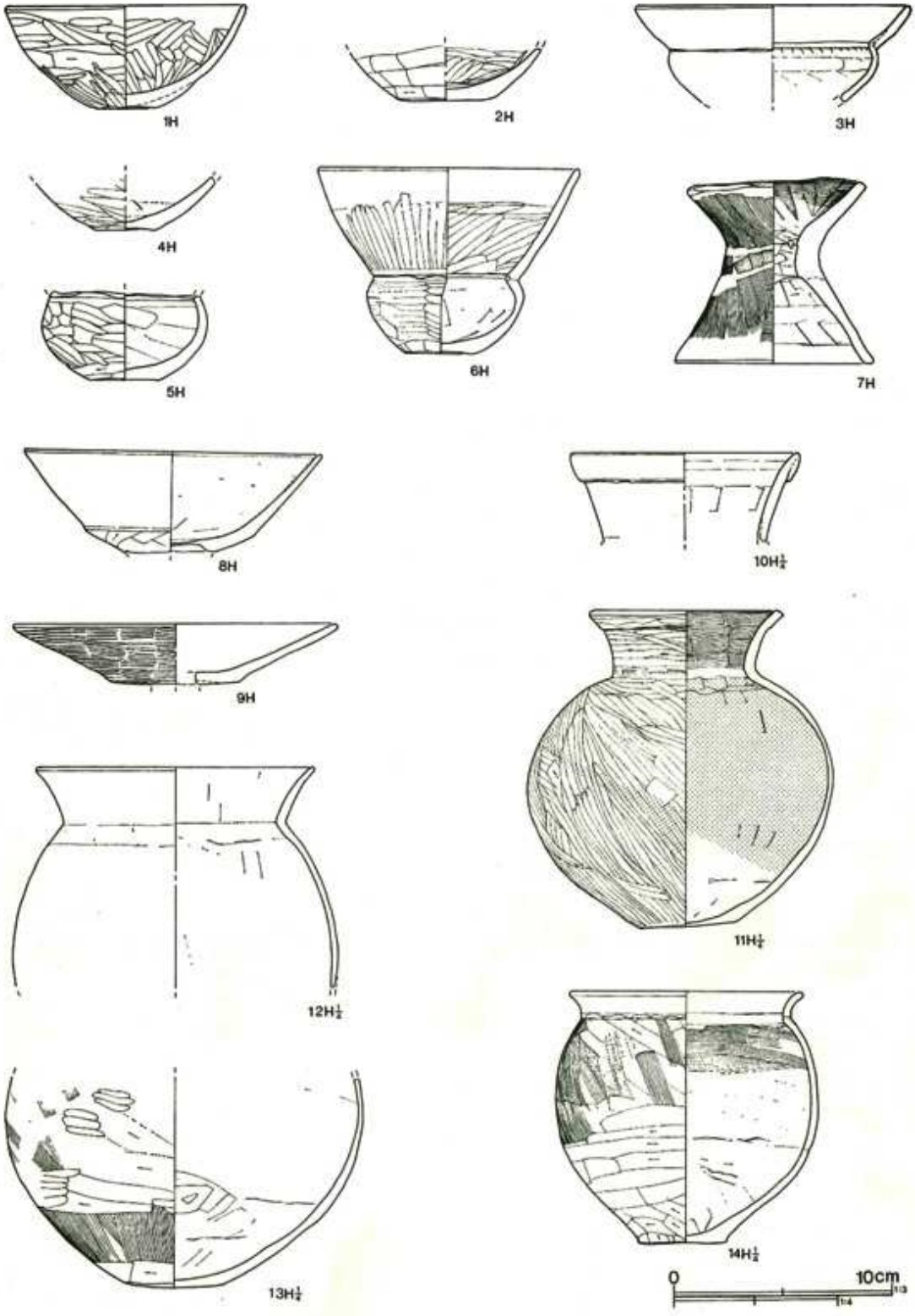
遺物は多く、いずれも五領期である。東壁中央付近より埦(2)、坩(5)、壺（11・13)、小形甕(14)台付甕(16)、S字口縁甕(15)、壺(19)が、北壁寄りから高坏(8)、器台(7)、台付甕（16・17・18)、S字口縁甕(15)が出土する。



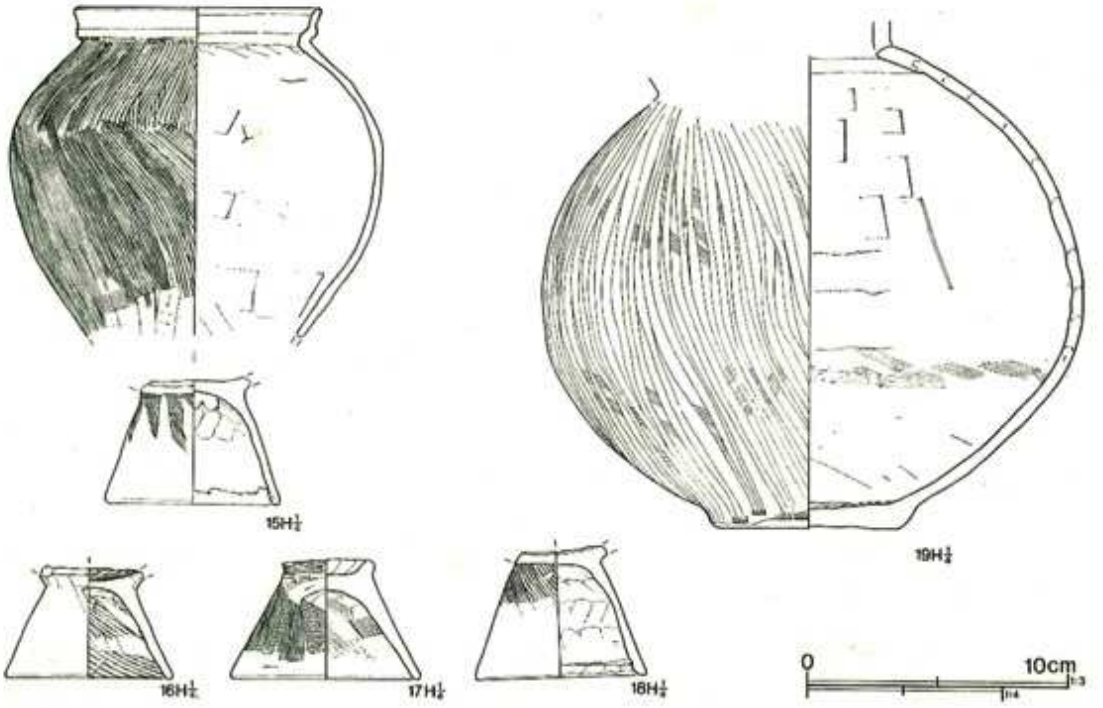
第18図　第38号住居跡

第38号住居跡出土遺物（第19・20図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	椀 土師器	口径(11.1) 器高　4.7	小さな平底から内彎しながら立ち上がる。	外面底部および体部は右→左への削りの後、縦位の篦磨きが入る。内面も縦位の篦磨きが入る。内外丹彩。	胎土：微A＋C＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR6/4にぶい橙 残存：25%　覆土
2	椀 土師器	底径(4.0)	平底から内彎気味に立ち上がる。	底部は一方向の削りが施され、胴部は左→右への削りの後、磨きが施される。内面は撫での後、磨きを行う。	胎土：微A＋B＋C＋F＋G　焼成：4 色調：5YR6/2灰褐 残存：体部下位25%　覆土
3	坩 土師器	口径(12.6)	直線的に開いた胴部から鋭く屈曲して括れ、内彎気味に開いて口縁に至る。屈曲部には接合痕が見られる。	体部および口縁の外面には、左上がりの磨きがある。内面体部は指撫でが、口縁は横位の磨きが施される。	胎土：微A＋C＋F＋G 焼成：4 色調：7.5YR7/2明褐灰 残存：25%底部欠



第19図　第38号住居跡出土遺物(1)



第20図　第38号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	坩？ 土師器	底径（2.7）	小さな上げ底から内彎して立ち上がる。	体部は右→左への篦削りの後、横位の磨きが施される。内面は篦状工具により右→左へ撫でられる。	胎土：0.3以下A＋B＋C＋G　焼成：4 色調：2.5YR3/1暗赤灰 残存：体部下位30%
5	坩 土師器	底径　3.1 頸部径　7.0 現高　4.0	極く僅かな上げ底から大きく開き、最大径を上位に持つ扁平な胴に至る。	体部は右→左への篦削りが施され、その上を左上がりの篦磨きしている。体部内面は横位の指撫でを行う。	胎土：微A＋B＋C＋G 焼成：5 色調：10R 5/4 赤褐 残存：体部のみ 100% 床面
6	坩 土師器	口径　12.0 胴径　7.2 器高　8.5	小さな上げ底から内彎しながら立ち上がり、鋭く括れて屈曲する。口縁は僅かに内彎気味に開く。	底部、体部とも右→左への削りを施し、その上を磨く。口縁は口唇部を横位に磨いた後、口縁中位以下を上→下へ左回りに磨く。内面体部は右→左への篦撫で、口縁は口唇を横撫でした後全体を磨く。	胎土：微A＋B＋C＋E＋G 焼成：3 色調：5YR 6/4にぶい橙 残存：80%　覆土
7	器台 土師器	口径　8.2 脚径　9.1	脚台部はほぼ直線にハの字状に開き、基部は緩やかな	口縁部は篦で不連続にカットする。外面脚端は右→左	胎土：微A＋G＋H 焼成：5

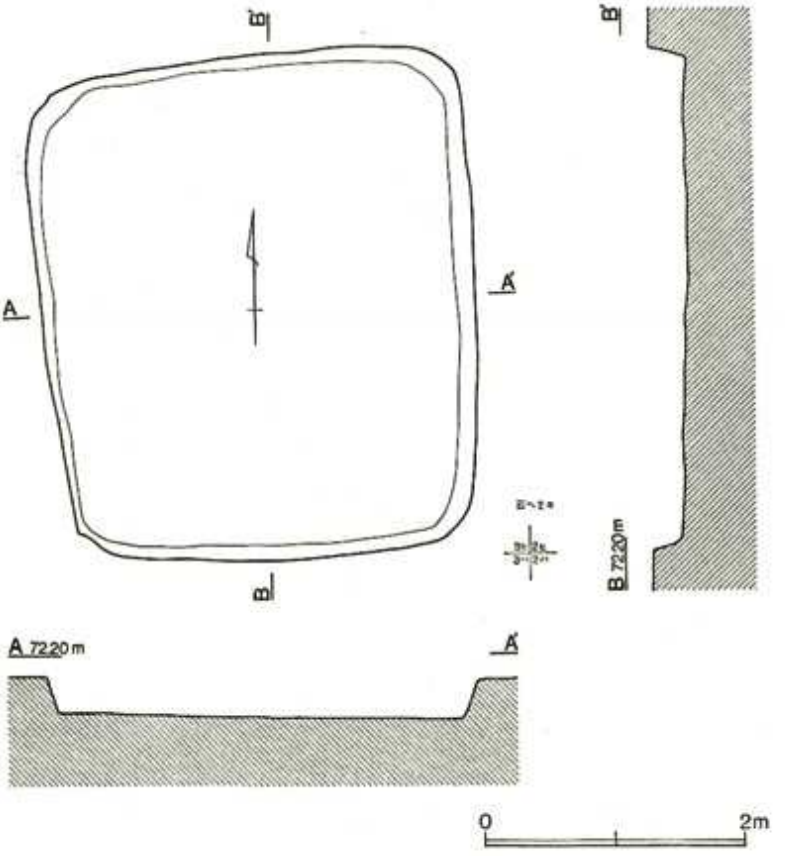
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 8.3	屈曲を経て直線的に開く器受部に至る。口唇、脚端とも矩形につくられる。孔部は製作段階からの大きな孔が開く。	への横撫でする。次に脚台部を下→上へ、続いて器受部も下→上へ刷毛目を施す。内面脚台部は左↔右の篦撫で、器受部は右→左への刷毛目を施す。	色調：10YR 7/3にぶい黄橙　残存：95%　床面
8	高坏 土師器	口径 13.7 現高 4.6	大きく開いた後、稜を経て直線的に開く。口唇は薄いつくりとなる。	摩滅が著しい。坏部下位は左下→右上へ篦削りする。内面坏部は篦撫でする。内外面丹彩。	胎土：微A＋B＋C＋G 焼成：2　色調：7.5YR 7/3にぶい橙　残存：坏部口唇欠脚部欠　床面
9	高坏 土師器	口径(14.9) 現高 2.7	坏部下位の稜を経て、直線的に口縁に至る。	摩滅が著しい。外面坏部下位は横位に削られた後、坏部全体に横位の刷毛目を施す。外面丹彩。	胎土：B＋C＋E＋G 焼成：2 色調：10R 5/4赤褐 残存：15%脚部欠　覆土
10	壺 土師器	口径(13.9) 現高 5.3	僅かに外反する口縁で、口唇部は折り返えす。	内外面とも横撫でする。	胎土：C＋E＋G　焼成：2　色調：7.5YR7/2明褐灰　残存：口縁30%　覆土
11	壺 土師器	口径 11.8 胴径 18.6 底径 5.7 器高 19.0	平底から球胴部に移り、頸部にて屈曲し外反する口縁に移る。口縁部は折り返えされ肥厚する。口唇部は矩形につくる。	外面底部を一方向、胴部を右下→左上に篦削りした後、右下→左上への篦磨きをする。口縁は縦位の刷毛目の後、折り返し口縁をつくり、さらに口縁部全体を篦磨きする。内面は胴部に右→左への篦撫で、口縁に右→左への刷毛目を施す。	胎土：微A＋B＋C＋G 焼成：4　色調：上部2.5YR 4/3にぶい赤褐　下部2.5RY5/6明赤褐 他の器種の口縁に斜めに置いて火をかけたため、斜めの環状の黒斑が付着する。 残存：80%　床面
12	甕 土師器	口径(16.9) 胴径(19.7) 現高 13.2	やや長い胴から強く屈曲する頸部を経て、外反する口縁部に至る。	外面胴部最上位は頸部に向って篦削りし、その上を部分的に磨く。口縁は右→左への横撫でをする。内面は右→左への篦撫での後、口縁は外と同時に横撫でする。	胎土：B＋C＋G 焼成：4 色調：5YR 6/3にぶい橙 残存：胴中位以上40%胴下半欠　床面
13	壺 土師器	胴径 21.6 現高 12.6	僅かに突出した平底から緩やかに球胴に移る。	外面胴部下位を下→上へ、中位を右下→左上へ刷毛目を施した後、底部付近と、接合部に当たる胴中位付近を右→左へ篦削りする。内面は横位の木口状工具撫での後、磨いている。	胎土：細A多＋B＋C＋G 焼成：3 色調：5YR 5/4にぶい赤褐 残存：胴下半70%上半欠　床面

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
14	甕 土師器	口径 14.1 胴径 14.9 底径 5.3 器高 15.1	平底から急に立ち上がり大きく外反して球胴に至る。頸部で強く括れ外反する短い口縁をつくる。	外面胴部上半に左上がりの刷毛目を施した後、胴最下位を上方に、胴下位を右→左へ篦削りする。口縁は内外面とも横撫でする。内面は木口状工具により右→左へ撫でる。	胎土：微A＋B＋E＋G 焼成：3　二次加熱 色調：10R 4/4 赤褐 残存：口縁一部欠　床面
15	台付甕 土師器	口径(12.5) 胴径 18.9 脚径 8.9 器高(19.0)	脚台部はハの字状に直線的に開く。胴部はいちじく形となり最大径は胴上位にある。頸部にて強く屈曲し、S字状口縁に至る。	脚端部は内側に折り返し、脚天井部は粘土を補充して撫でつける。外面脚基部には刷毛目が見られる。胴部は左上がりの篦削りの後、下半部を下→左上への刷毛目の後、上半部を右上→左下への刷毛目を施す。その後口縁を内外とも横撫でする。内面胴部は右→左へ篦撫でする。	胎土：A＋B＋C＋E＋G 焼成：4　二次加熱 色調：5YR 6/4 にぶい橙 残存：体部60%口縁15%脚部100%　床面
16	台付甕 土師器	脚径 8.4 脚高 4.6	脚台部は直線的にハの字状に開く。	外面基部付近は上→下への刷毛目を施す。内面は脚部に右下りの荒い刷毛目を、底部に左回りの細かな刷毛目を施す。	胎土：細A＋B＋C＋F＋G＋H 焼成：2　二次加熱 色調：5YR 5/8 明赤褐 残存：脚部端部25%欠床面
17	台付甕 土師器	脚径 9.6 脚高 5.3	脚台部は直線的にハの字状に開く。	脚端部内外面を左回りに横撫でし、脚部外面は下→上へ細かな刷毛目を施し、胴部へも基部から上に刷毛目を行なう。脚部内面は右下方向へ左回りに細かな刷毛目を施す。底部内面は左上へ左回りの指撫でをする。	胎土：細A＋B＋C＋F＋G 焼成：5 色調：10YR 5/2 灰黄褐 残存：脚部98% 作りと焼きが7に類似する。　床面
18	台付甕 土師器	脚径 8.6 脚高 5.8	脚台付は直線的にハの字状に開くが、開き方は15に類似する。	脚端部は内側に折り返えす。脚部上位は右下→左上へ刷毛目を施す。脚部内面は天井部から放射状に指頭撫でを施す。	胎土：細A＋C＋E＋F＋G　焼成：3　二次加熱 色調：5YR 6/4 にぶい橙 残存：脚部98% 作りなどが15と類似。床面
19	壺 土師器	胴径 27.3 底径 9.5 胴部高24.3	大きく僅かな上げ底から急に立ち上がり、球胴を経て窄まるが、胴部が一方へ傾き、頸部が中心よりずれる。	外面胴部は左上がりの刷毛目を施した後、右→左への篦削りを部分的に行い。さらに全面に右下→左上へ磨きを行う。胴内面は右→左への木口状工具撫でを施す。	胎土：0.6以下A＋C＋E＋G＋H 焼成：5　二次加熱 色調：2.5YR6/6橙 残存：底部100%胴部60% 床面

第47号住居跡（第21図）

3—ヒ区にやや離れて位置する。規模は3.84×3.37m、深さ0.32mを測る。形態は隅丸長方形で長軸はN—3°—W、床標高は71.72mを測る。壁は傾斜持ち、床には柱穴はなく、炉も未検出。

遺物はないが、住居形態から五領期と考えられる。

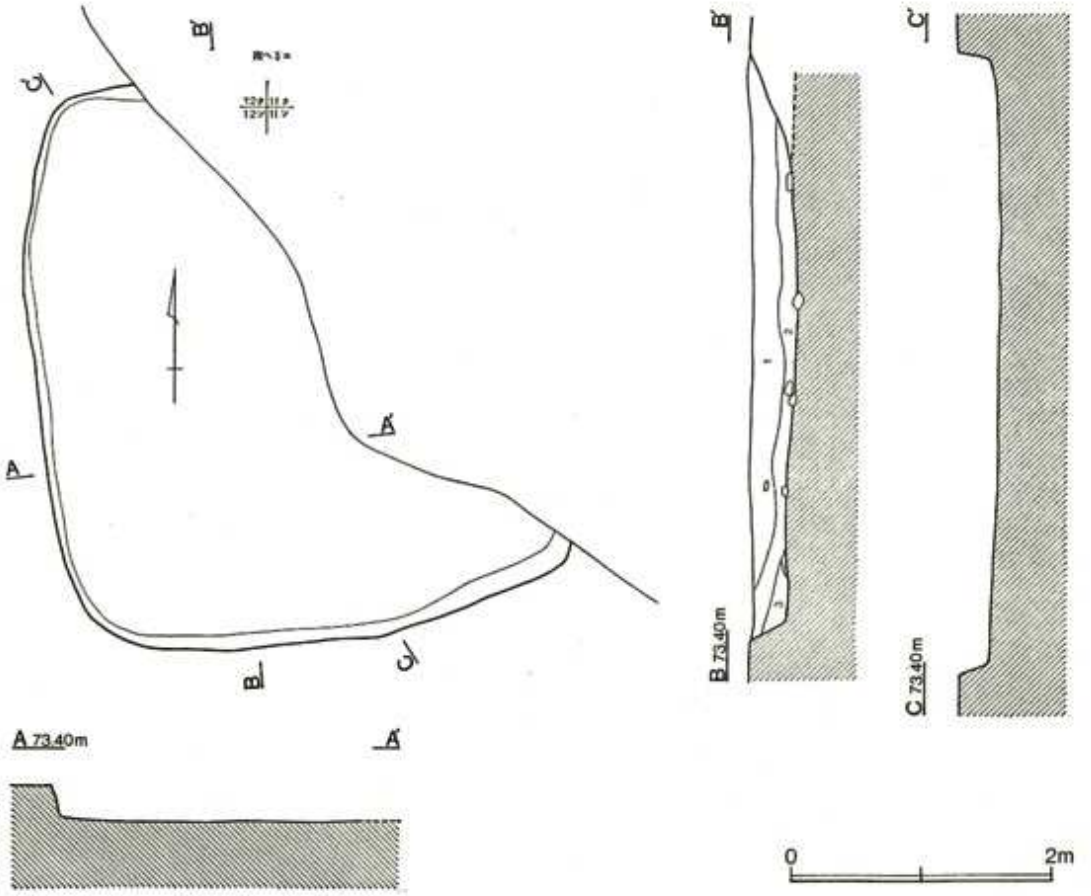


第21図　第47号住居跡

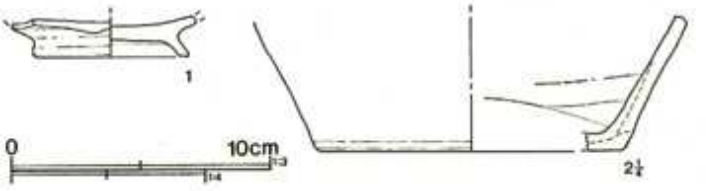
第56号住居跡（第22図）

11・12—ソ区にやや離れて位置する。規模は4.34×4.23m、深さ0.34mを測る。形態は隅丸方形であるが北東側を破壊されるため不明な点が多い。長軸はN—5°30′—Wで、床標高は72.86mである。柱穴は現状では未確認である。覆土は茶褐色あるいは黒色土で埋まる。床には大きな石が数個散乱する。

遺物は坏(1)と甕(2)が出土するが、住居形態から五領期と考えられる。



第22図　第56号住居跡



第23図　第56号住居跡出土遺物

第59号住居跡出土遺物（第23図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	高台径 6.1	ハの字状に直線的に開く高台を持つ。	摩滅顕著。右轆轤撫で。	胎土：0.4以下A＋B＋E＋F　焼成：1　色調：5Y 7/3浅黄　残存：高台
2	甕 須恵器	底径(15.5)	大きな平底から直線的に開く。	底部篦削り。胴部右轆轤撫で。	胎土：0.6以下A＋B＋E　焼成：5　色調：N 6/0灰　残存：80%

V　古墳と出土遺物

本調査では墳丘を持つ古墳を１基、墳丘はないが石室の形骸をとどめる古墳を１基、幅や断面形形態から考えて周溝の一部ではないかと判断された例があり、発掘時、前二者を地名から上川端１号墳、２号墳と呼称していた。周溝だけの例は溝状遺構とされていたが、発掘時の所見から古墳と判断してここで報告する。

今回報告する古墳は黒田古墳群に包括されており、最も残りのよい上川端１号墳は黒田古墳群の報告書の中で、「黒田第17号古墳」として、上川端1869番地の高荷次良氏邸内に所存する。東西10ｍ、南北10ｍ、高さ2.50ｍの円墳と記載されている。報告書の中では第19号古墳まで番付けされているため、新しく発見された上川端２号墳を黒田第20号墳とし、周溝の一部が検出された古墳跡を黒田第21号古墳とする。第17～21号墳は南西方向300ｍに位置する黒田古墳群の主体とは離れる。

黒田第17号墳（第24～26図・付図第２図）

台耕地遺跡の東南部、９・10―ク～コ区に位置するが、北西には近接して新しく名付けた黒田第21号墳が存在する。また北40ｍには黒田第18号墳が見られる。

形態は円墳であるが、北東・南東・南西が破壊され、南北７ｍ、東西7.5ｍを測る。墳丘の破壊は石室の一部を破壊して止っている。墳頂部の標高は73.0ｍで、墳丘の高さは2.75ｍを測る。

表土を除去すると、墳頂部に石室内に倒れ込む状態で太刀形埴輪の完形品が検出された（第24図№１）。また新しい時期の蔵骨器も近接して存在する（第24図№２）。蔵骨器の中には頭の火葬骨が入っていた。

表土の除去によって上部と下部の葺石帯が検出できたが、東部と南部は墳丘の破壊とともに消失していた。下部葺石帯は周溝の立ち上がった平坦部に存在し、直径20.7ｍを測るが、周溝へ転落した石や、裾部の破壊により移動した石も多いことと思われる。

上部葺石帯は直径10.2～13ｍを測り、北から北西部の残りがよい。北西部の葺石帯の下部の傾斜面には円筒埴輪が２本倒れて存在するが、ほぼ原位置を保っていると考えられる。葺石帯は石室左脇まで続くが、数10cmの高さに積まれ直線的に延びることから、古墳破壊の際に積まれた石垣と考えられる。上部葺石帯の石はほぼ均一であるが、西側の石の中に長さ30～40cmのものもある。

周溝は南北にやや長く石室前方で幅３ｍ切れている。南北方向で外径27.8ｍ、内径で22.0ｍ、東西で外径25.7ｍ、内径で20.6ｍを測る。周溝幅は石室前方が狭く約２ｍで、北東部で広く4.3ｍを測る。最も広い北東部は周溝の円周と関係なく、長さ10ｍが直線的に深くなる。

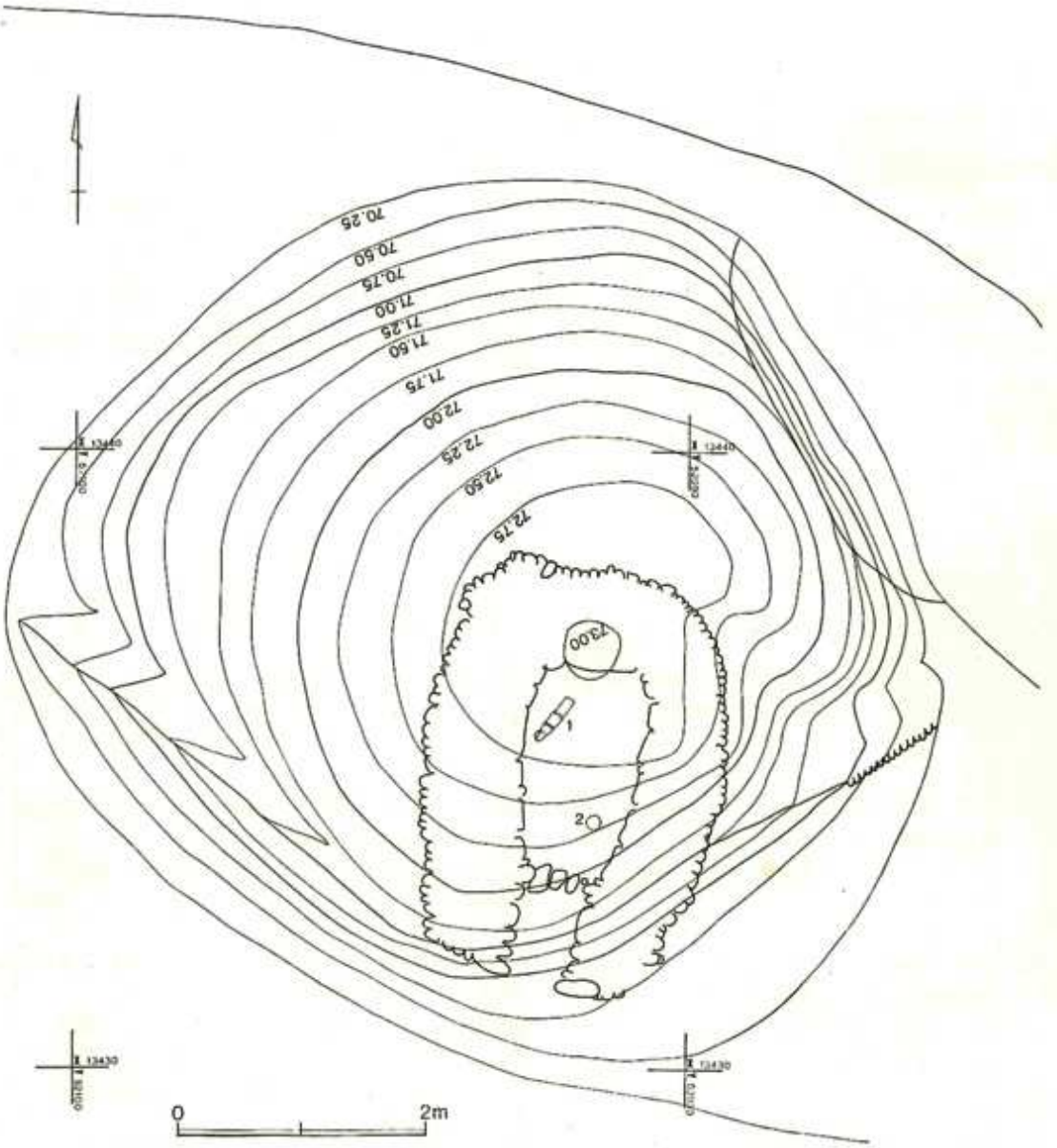
石室は天井石が崩落し、石室内に転落していたが河原石であり、側壁も奥壁付近を除いて上方½が崩落していた。羨道付近は特に著しく、墳丘破壊の際行なわれたものと思われる。しかし床面はそれ程荒されていないようである。石室中軸はN―10°―Wである。石室規模は全長5.24ｍ、玄室長3.55ｍ、玄室奥壁幅1.18ｍ、玄室最大幅2.0ｍ、玄室前幅1.1ｍ、玄門幅0.84ｍ、羨道長1.69ｍ、羨道幅0.9ｍを測る。

玄室の平面形態はやや奥壁側の広い胴張り形である。奥壁は大きな石を３段に重ね、その上位お

よび2・3段目の左右は、やや横長の石を積み重ねている。持ち送りは2段目の石から始まる。

側壁は左右とも根石に35～50cmの大きな石が使われるが、羨道には小さな石が置かれている。根石の上には人頭大の河原石が積まれ、その隙間には拳大の河原石が詰め込まれている。羨道部は根石の上の石はやや大きく、隙間の石も大きく雑な積み方である。玄門は側壁を張り出して作る。

床面には小さな河原石が敷かれるが、西半分の石が薄く隙間が見られる。羨道にも河原石が敷かれるが、玄室よりもやや高い。玄室の標高は70.42mを測る。玄室と羨道の境には框石が4個置かれる。



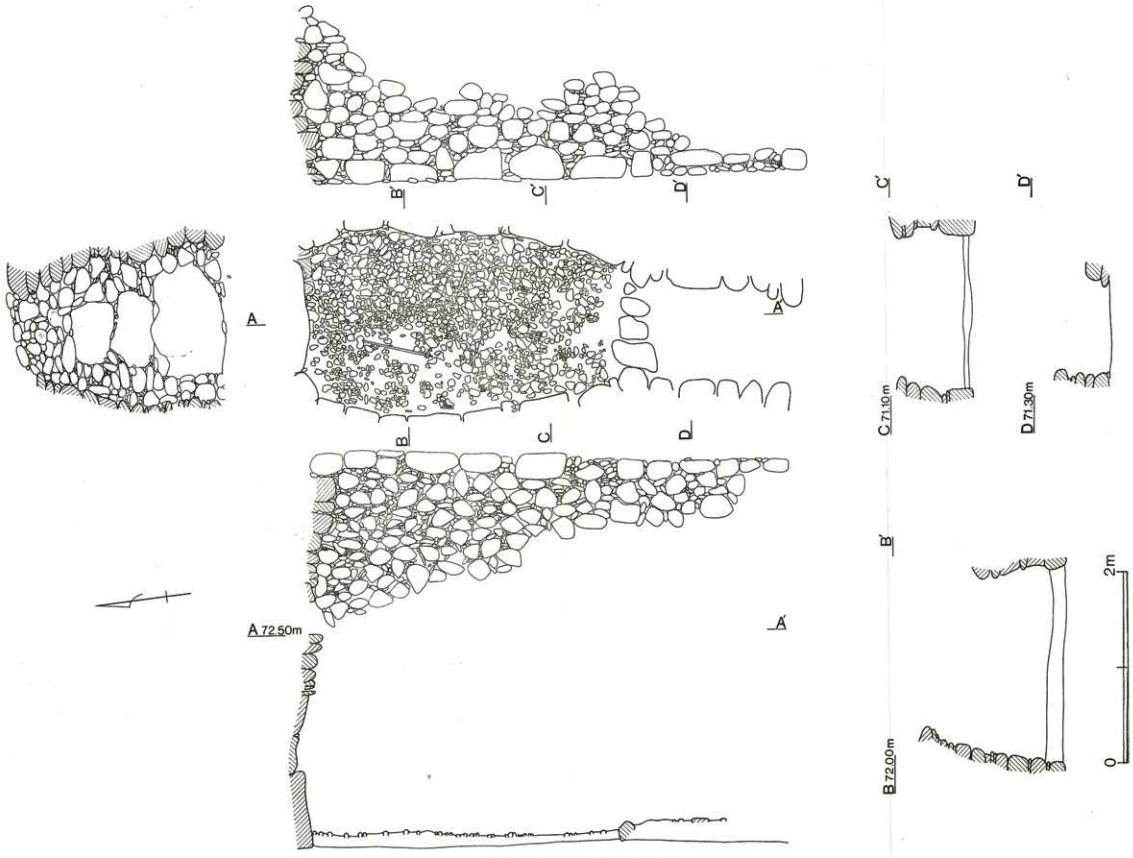
第24図　黒田第17号墳墳丘図

墳丘の構築はまず旧表土である黒色土上に根石を据え置くと同時に、控え積みを行ない、その間には裏込めをしながら積み上げている。控え積みは左側壁で1.7m、右側壁で1.5m、奥壁で1.7mを測り、平面形態は口の窄まるU字形となる。墳丘は石室を約⅓の高さまで積み上げるとともに黒褐色土を石室側を厚くして斜めに積み重ねる。さらに石室を積み上げるとともに石室から斜めに黒色・黄色土を積み重ねている。この段階ではほぼ石室は完成していると考えられる。その後斜めに積み重ねた土の上に最初は下の傾斜に左右されて、やや斜めに積み重ね、続いて水平に数層積んだ後、傾斜を持って積み上げ石室をほぼ補強するようである。この後積み上げた土を削り墳形整える作業を行なう。以上のような工程を行なうのは土層観察では左側壁と奥壁側であり、右側壁側は水平積みは行なわれず、最後まで傾斜を持って積み重ねられている。水平積み後の整形を経て墳丘全体を覆うように、灰褐色の砂質土を積み重ねている。なお古墳の封土に砂質土が多いのは、地山が黄灰褐色砂質土層のためである。

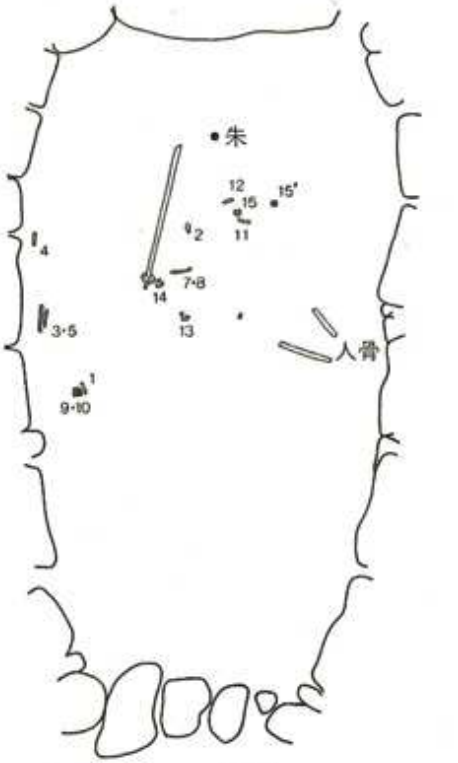
出土遺物は墳丘あるいは周溝出土の埴輪の他、土師器坏、大形壺、須恵器片がある。また石室出土遺物として直刀、鍔、刀装具、鉄鏃、刀子、金環、ガラス玉が出土する。人骨は右側壁中央寄りに足か腕の骨が、その奥壁寄りには耳環が2個検出されていたことから、被葬者は頭部を奥壁に向け、右側壁寄りに葬られたと考えられる。耳環の近辺には刀子が2本置かれ、その奥壁寄りには朱が見られた。耳環の左壁寄りには、鉄鏃、直刀、刀装具が、さらに西の左側壁際には鉄鏃が数本置かれていた。他にガラス玉が46個検出されている。

黒田第17号墳出土土器（第28図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	頸部径 9.5 胴径 16.6	球胴から強く屈曲して外傾する口縁に移る。	右回転撫で。体部下位回転篦削り。表採品のため共伴疑問。 末野産	胎土：0.2以下A＋B＋E 焼成：5　色調：5G 3/1 暗緑灰　残存：胴50%
2	坏 土師器	口径 12.1 器高 4.3	丸底から鈍い稜を経て、僅かに外反する口縁に至る。器厚は0.8cmと厚い。	内面底部左回りの篦撫での後、口縁内外右回りの横撫で。底部は右→左への篦削りを施す。	胎土：A多＋B＋C多＋D F＋H　焼成：4 色調：7.5Y R6/6橙 残存：75%　周溝
3	甕 土師器	口径 23.7 胴径(42.0) 底径(9.0) 器高(46.5)	小さな平底から最大径を上位に持つ、やや長い胴を経て大きく外反する口縁に移る。	胴下位に積み重ね時の粘土接合痕明瞭。口縁横撫で。胴部上位は下→上、胴部下位は上→下への篦削り。	胎土：A＋B＋C＋D＋E＋H　焼成：3 色調：7.5Y R5/6明褐 残存：口縁45%　胴部15% 20号墳石室周囲と接合、
4	甕 須恵器	器厚 1.1	胴中位の破片。	左上がりの平行叩きが施される。 末野産 古墳に伴なうか疑問。	胎土：細A＋B＋C＋E 焼成：5　色調：N 4/0灰 残存：胴部片



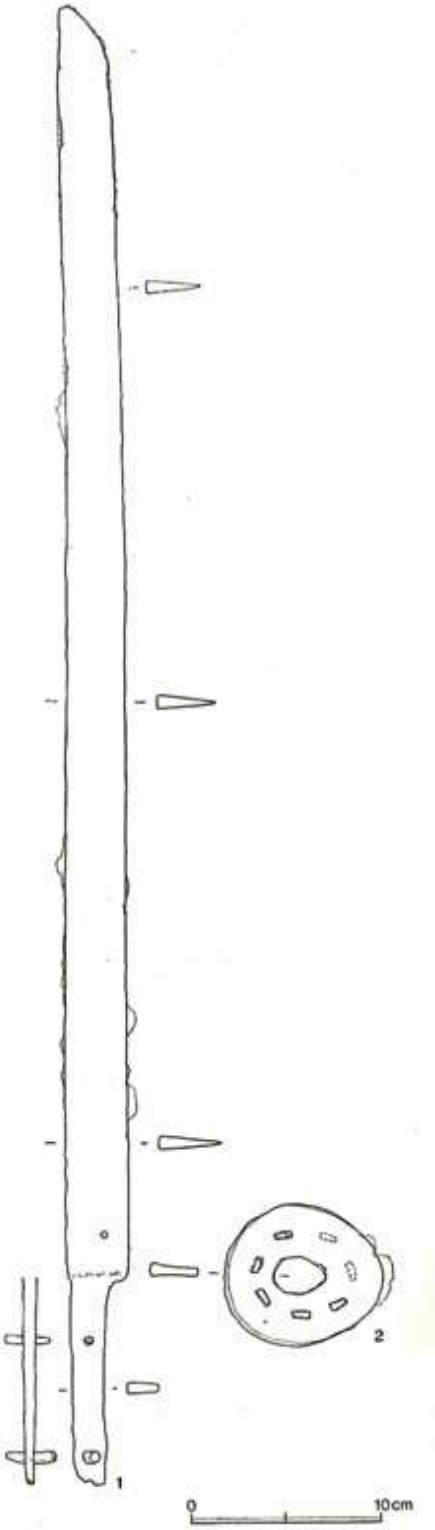
第25図　黒田第17号墳石室および断面図



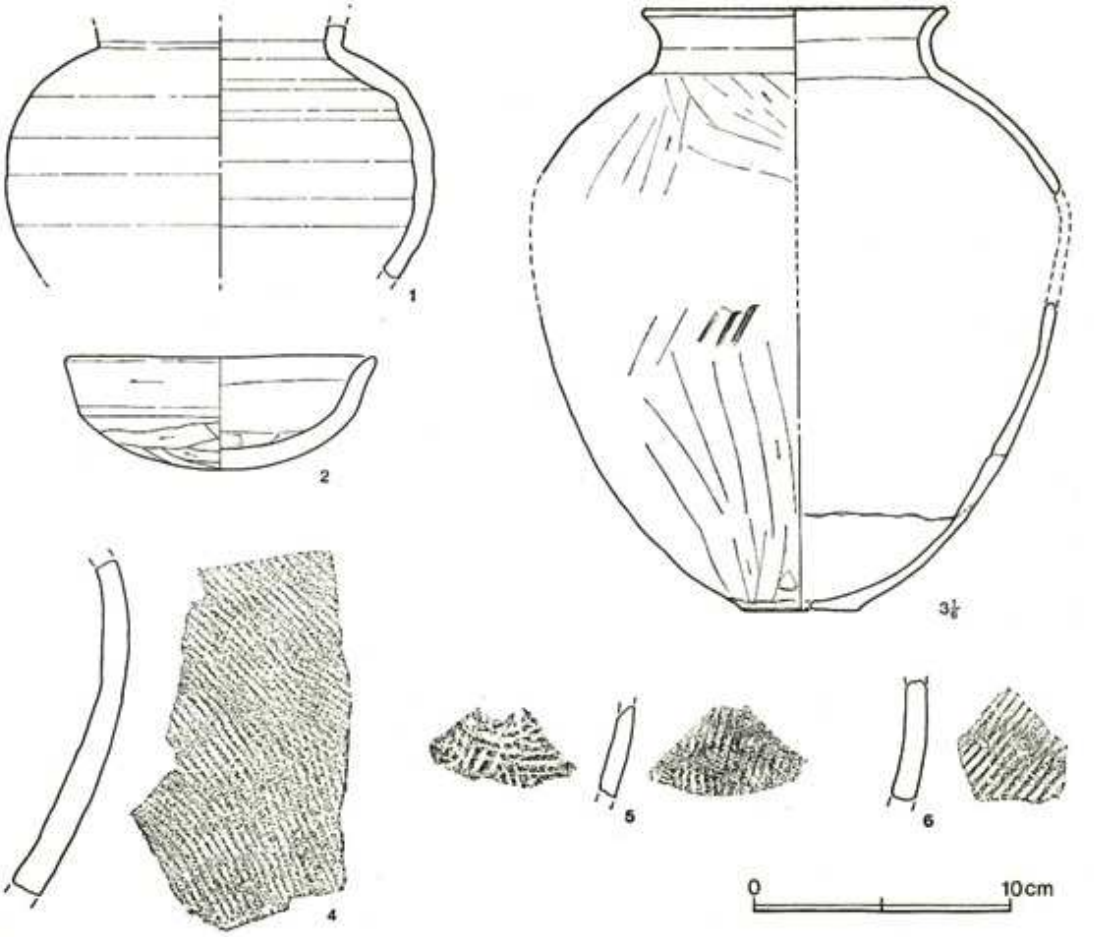
1．鉄鏃　7．鉄鏃　12．刀子
2．鉄鏃　8．鉄鏃　13．鎹
3．鉄鏃　9．鉄鏃　14．鎹
4．鉄鏃　10．鉄鏃　15．金環
5．鉄鏃　11．刀子　15'．金環

0　2m

第26図　黒田第17号墳石室遺物出土状況



第27図　黒田第17号墳出土直刀

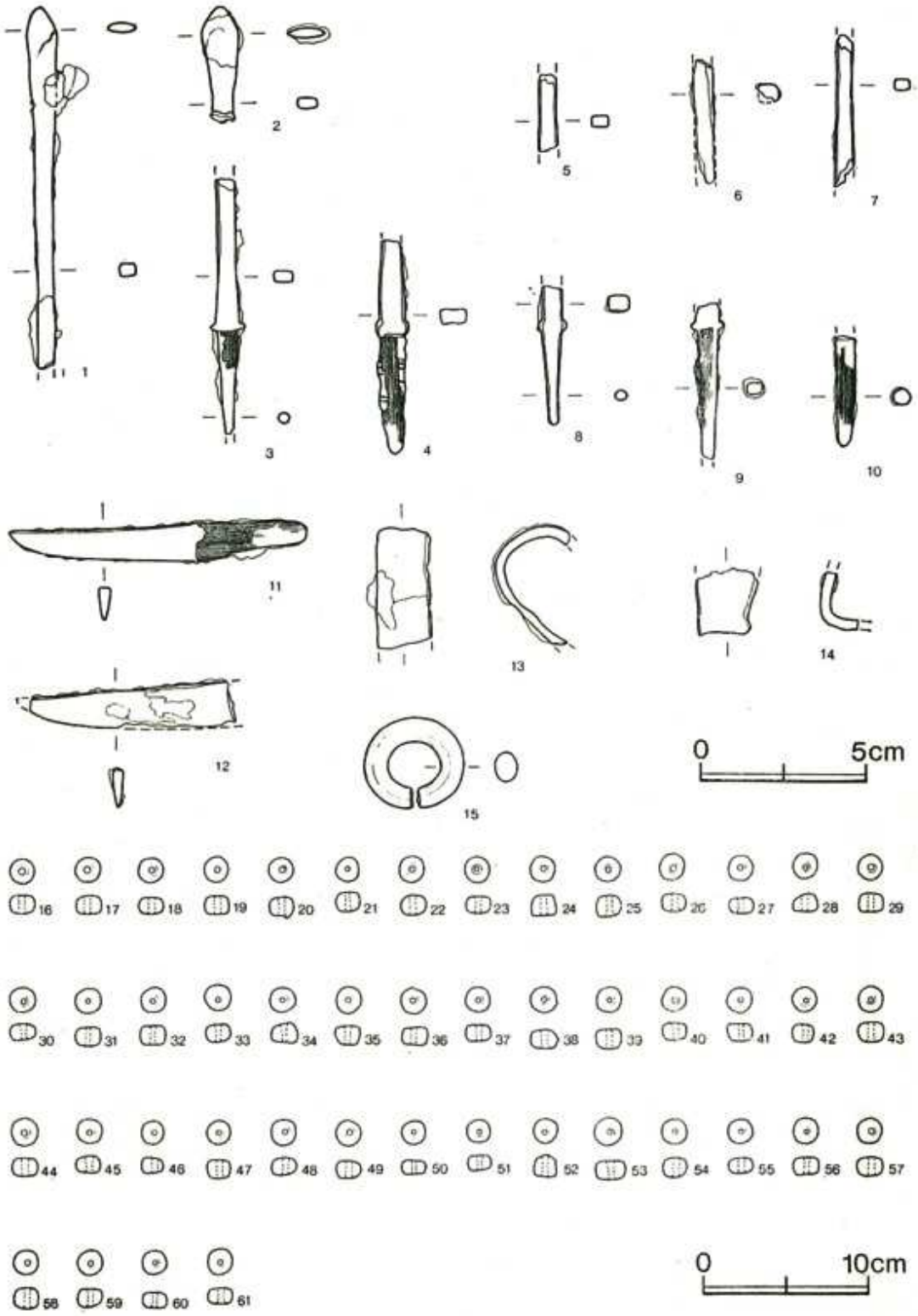


第28図　黒田第17号墳出土土器

番号	器種	法量		形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕 須恵器	器厚	0.7	やや薄い。	外面平行叩き1㎝＝4本。 内面青海波。	胎土：微A　夾雑物少ない 焼成：3　色調：10YR7/3 にぶい黄橙　残存：胴片
6	甕 須恵器	器厚	0.8		外面平行叩き2㎝＝6本。 内面青海波。	胎土：微A　夾雑物少ない 焼成：5　色調：10YR7/2 残存：胴片

黒田第17号墳石室出土遺物（第27・29図）

番号	器種	法量		形態の特徴	手法の特徴	備考
第27図-1	直刀	全長 茎長 身幅 背幅	77.2 10.7 3.3 0.7	ほぼ完存するが、茎先が欠失している可能性がある。造込は平造り、棟幅は角棟である。両関は明瞭に残り	茎の目釘は2つ見られるが、左右それぞれから打ち込まれている。目釘長は2.3と2.6㎝を測る。	重量：634.80g



第29図　黒田第17号墳石室出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		茎幅 1.8	柄木はここまで及んでいたようである。鋲元孔は径0.3cmある。		
2	鍔	長径 8.3 短径 7.4 厚さ 0.7	倒卵形である。錆で覆れるため5窓見られるが、配置から7窓の可能性がある。		重量：102.31g
第29図-1	鉄鏃	現長 11.0	長頸片丸造柳葉式（後藤氏の鑿箭式）。関は僅かに残る。	断面形は0.4×0.5の長方形。	重量10.43g。9・10と近接して出土しているため、接合する可能性あり。
2	鉄鏃	現長 3.5 身幅 1.15	片丸造柳葉式（後藤氏の鑿箭式）。1に比べやや身の幅が広くなる。	断面形0.3×0.6に長方形。	重量2.63g。
3	鉄鏃	現長 7.8	長頸棘篦被の頸部から茎。茎には木質部が残る。	断面形は0.35×0.6の長方形。茎は円形。	重量：6.21g。5と近接して出土しており同一個体か。
4	鉄鏃	現長 6.5	長頸棘篦被の頸部から茎。茎には木質とそれを巻きつけた痕跡が残る。	断面形は0.4×0.8の長方形。	重量：5.12g
5	鉄鏃	現長 2.35	長頸棘篦被の頸部と考えられる。	断面0.35×0.5の長方形。	重量：1.67g。3と近接して出土しており同一個体か。
6	鉄鏃	現長 3.8	長頸棘篦被の頸部と考えられる。	断面0.35×0.55の長方形。	重量：3.08g
7	鉄鏃	現長 4.6	長頸棘篦被の頸部と考えられる。	断面0.35×0.5の長方形。	重量：2.87g。8と近接して出土しており同一個体か。
8	鉄鏃	現長 4.2	長頸棘篦被の頸部から茎。	断面は頸部が0.5×0.65の長方形で、茎が円形。	重量：2.56g。7と同一個体か。
9	鉄鏃	現長 4.7	長頸棘篦被の茎。茎には木質部が残る。	断面は篦被付近では隅丸長方形。	重量：3.21g。10と近接して出土しており同一個体か。
10	鉄鏃	現長 3.4	茎の残欠。茎には木質部が残る。	断面は円形。	重量：2.02g。9と同一個体か。
11	刀子	全長 9.1 身幅 1.2 背幅 0.35	背には関はなく、背が僅かに反る。刃部は擦り減る。茎には木質部が残り茎先は	錆が浮き、一部変形する。	重量：10.26g

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			丸くつくられる。		
12	刀子	現長 6.3 身幅 1.35 背幅 0.3	切先と茎が欠失する。	錆が著しく変形する。	重量：8.06g
13	鏃	幅 1.6	倒卵形を呈すると考えられる。	錆が著しく折れ曲る。	重量：10.43g。14と同一個体と考られる。
14	鏃	幅 1.9		錆が著しく変形する。	重量：4.09g。13と同一個体か。
15	金環	長径 3.05 短径 2.75	1.5mmの間隙が開き、断面0.9×0.7cmの楕円形となる。	青銅芯金張製。つくりはよいが一部錆が出て破裂する部分がある。細かな槌目が見られ、間隙の小口面は包み込んで押えたため、縮み状になっている。	重量：25.75g

黒田第17号墳石室出土ガラス玉（第29図）

石室出土のガラス玉は完形品46個と小片4片が出土している。色は同一で青色を呈し、重量もほぼ均一で0.05g前後を測り、46個の総重量は2.33gである。つくりはやや悪く、表面が荒れ、細かなひびが入る。

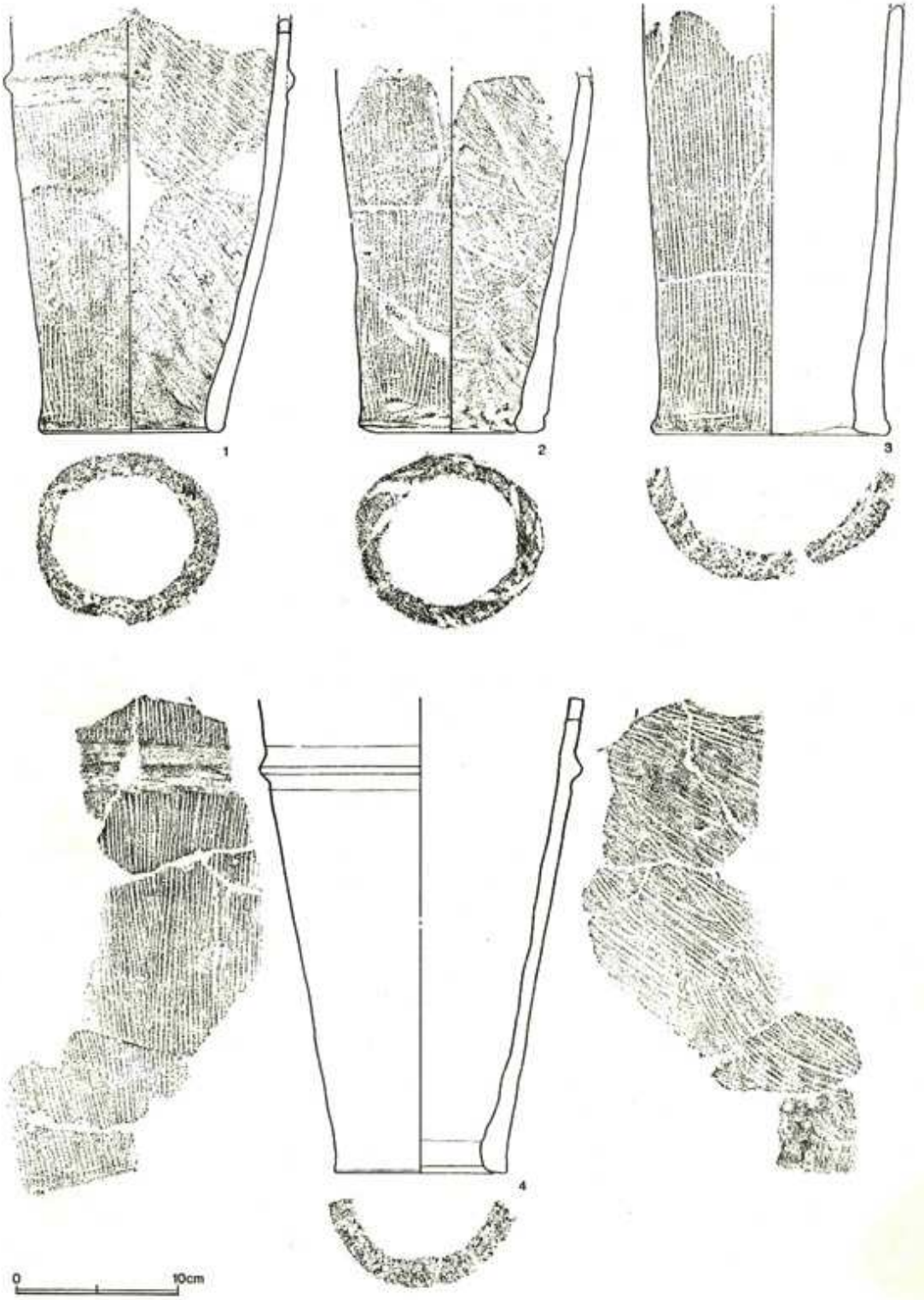
第2表　黒田第17号墳石室出土ガラス玉（第29図）

番号		長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	番号		長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)
第29図	16	0.395	0.39	0.29	0.1	第29図	35	0.4	0.39	0.295	0.09
	17	0.395	0.39	0.28	0.1		36	0.4	0.39	0.27	0.1
	18	0.385	0.38	0.25	0.11		37	0.39	0.39	0.25	0.11
	19	0.39	0.38	0.275	0.1		38	0.405	0.395	0.275	0.11
	20	0.39	0.38	0.32	0.1		39	0.4	0.37	0.3	0.08
	21	0.395	0.37	0.29	0.09		40	0.38	0.375	0.26	0.1
	22	0.41	0.395	0.3	0.1		41	0.39	0.38	0.26	0.09
	23	0.395	0.39	0.26	0.1		42	0.38	0.38	0.29	0.09
	24	0.395	0.385	0.33	0.1		43	0.4	0.39	0.29	0.09
	25	0.41	0.39	0.325	0.09		44	0.4	0.4	0.28	0.11
	26	0.4	0.395	0.28	0.11		45	0.8	0.395	0.28	0.1
	27	0.38	0.38	0.23	0.11		46	0.38	0.375	0.265	0.09
	28	0.38	0.375	0.29	0.08		47	0.38	0.38	0.29	0.1
	29	0.385	0.38	0.29	0.11		48	0.39	0.385	0.28	0.09
	30	0.4	0.385	0.25	0.08		49	0.4	0.395	0.29	0.11
	31	0.4	0.38	0.295	0.08		50	0.38	0.37	0.24	0.09
	32	0.395	0.395	0.29	0.08		51	0.375	0.37	0.24	0.1
	33	0.41	0.4	0.28	0.08		52	0.385	0.38	0.34	0.1
	34	0.4	0.38	0.31	0.09		53	0.42	0.42	0.295	0.1

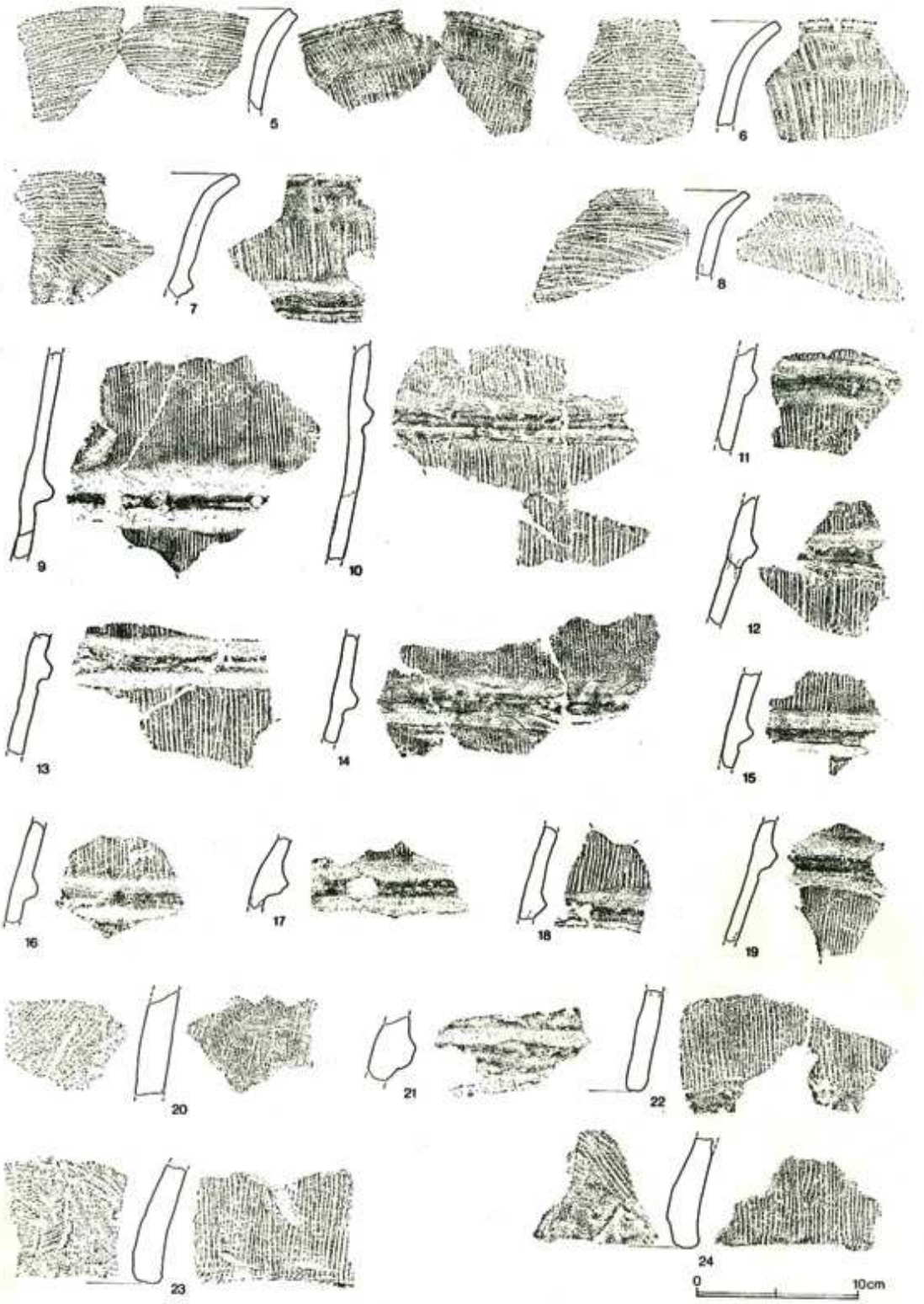
番　号		長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	番　号		長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)
第29図	54	0.395	0.38	0.3	0.09	第29図	58	0.385	0.38	0.32	0.1
	55	0.39	0.38	0.225	0.1		59	0.39	0.385	0.275	0.09
	56	0.39	0.39	0.275	0.08		60	0.39	0.39	0.24	0.08
	57	0.39	0.385	0.29	0.1		61	0.395	0.39	0.23	0.09

黒田第17号墳出土円筒埴輪（第30・31図）

番　号		法　量	形態の特徴	手法の特徴	備　考
第30図	1	底径 11.5 現高 25.5 器厚 0.8 ～1.85	第一突帯まで21cmを測る。突帯はくずれ、下位稜は下の強い指撫でにより作り出されている。突帯の2cm上に円孔が見られる。	底部は粘土帯1周重ねでつくり、外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施す。内面は下位が左上への指撫での後、刷毛目を施しさらに指撫でを行なう。刷毛目は1cm＝4本で左上へ断続的に行なう。	胎土：1.1以下A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：第一突帯以下60% 作りが2と類似。 上部葺石帯付図第2図No.2
	2	底径 11.0 現高 28.0 器厚 0.9 ～1.7	底部は外へ張り出す。底面には棒状の痕跡が見られる。	底部は粘土帯1周重ねの痕跡が明瞭に見られる。外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施し、内面は下位が左上がりの指撫で後、やや上を左上がりの不連続刷毛目を施す。刷毛目は1cm＝5本である。	胎土：0.8以下A＋B＋C＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR6/6橙 残存：第一段70% 上部葺石帯付図第2図No.1
	3	底径 14.7 現高 26.2 器厚 0.9 ～2.3	底部は外へ張り出し、底面は砂粒痕が見られる。第一段は外へ開かず円筒になる。	外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施し、内面は右下→左上へ指撫でを行なう。	胎土：0.5以下A＋B＋F＋G　焼成：5 色調：5YR6/8橙 残存：第一段50%
	4	底径 10.7 現高 29.0 器厚 0.7 ～1.6	底部は外へ張り出し、底面には砂粒痕が見られる。第一突帯まで24.1cmを測る。突帯はくずれ、下位稜は下の強い指撫でにより作り出される。第一突帯の2cm上には円孔が開けられる。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目を施す。内面は最下位の肥厚する部分から底面にかけては全く整形されない。肥厚部より上は左上がりの指撫での後、右下→左上の不連続刷毛目を施す。刷毛目は1cm＝8本。	胎土：0.9以下A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：第一突帯以下30% 作り1と同じ。



第30図　黒田第17号墳出土円筒埴輪(1)



第31図　黒田第17号墳出土円筒埴輪(2)

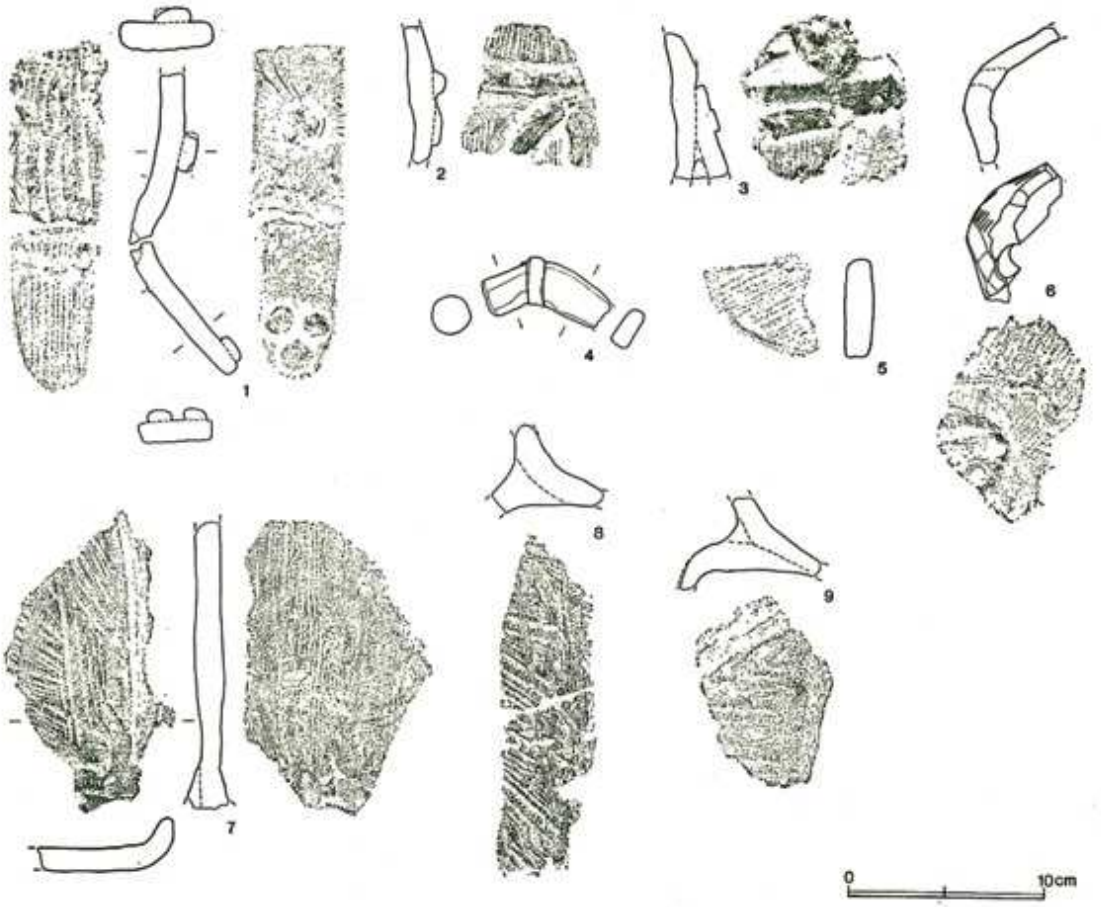
番　号	法　量	形態の特徴	手法の特徴	備　考
第31図　5	器厚　0.95	外反する口縁で、口唇部は窪む。	外面は上→上へ2cm＝9本の刷毛目の後、口縁部を右回りの横撫で。内面右→左へ1cm＝4本の刷毛目。	胎土：A＋B＋C＋F＋G 焼成：5 色調：10R 4/6 赤 残存：口縁15%　表採
6	器厚　0.9	外反する口縁で、口唇は窪む。	外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目の後、口縁部を右回りの横撫で。内面右→左へ2cm＝8.5本の刷毛目。	胎土：A＋B＋C＋F＋G 焼成：5 色調：10R 4/6 赤 残存：口縁片　周溝
7	器厚　0.95	口縁は外反し、口唇には浅い沈線が巡る。突帯は下の撫でにより稜がつくられるとともに、粘土の持ち上がりにより突帯が窪む。	外面下→上へ2cm＝8本の刷毛目の後、突帯を張りつけ右回りの横撫でを行なった後、口縁も同様な横撫でを行なう。内面は左上がりの刷毛目の後、右→左への刷毛目を施す。1cm＝4本。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：4 色調：10R 5/6 赤 残存：口縁片
8	厚さ　0.5 ～0.9	外反する口縁で、口唇は僅かに窪む。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目の後、口唇部を右回りの横撫で。内面右→左へ1cm＝4本の刷毛目。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R 4/4 赤褐 残存：口縁片　表採
9	厚さ　0.9	第二突帯と考えられ、突帯はやや高く、その下位は深く撫でられる。突帯の下2.0cmには円孔が開けられる。	外面は下→上へ2cm＝10本の刷毛目を施した後、突帯を付す。内面は刷毛目が見られず左上がりの指撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R 5/6 赤 残存：第3段20%　表採
10	厚さ　0.9	実帯は下位が低く、突帯下が強い撫でにより形造られた後、突帯頂部を右→左へ撫でる。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目を施した後、突帯を付す。内面は左→上へ指撫でを行なう。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R 3/6 暗赤 残存：突帯上下15%　表採
11	厚さ　1.05	突帯は断面三角形。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目を施した後、突帯を張りつけ上下から押えて右→左へ横撫でする。	胎土：A＋B＋C＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：突帯付近のみ
12	厚さ　1.05	第二突帯と考えられ、突帯下位は低い。突帯の下は強く撫で、突帯下位の稜をつくり出している。突帯下1.5cmに円孔。	外面は下→上へ2cm＝7.5本の刷毛目を施した後、突帯を張りつけて上下から右→左への横撫で。内面は左上がりの指撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：4 色調：10R4/6赤 残存：突帯片　表採
13	器厚　1.0	第二突帯と考えるが、下位の強い撫でにより突帯下位	外面は下→上へ2cm＝7.5本の刷毛目を施し、突帯を	胎土：A＋B＋C＋F＋G 焼成：4

番　号	法　量	形態の特徴	手法の特徴	備　考
		が形造られる。突帯頂部は下位が低いがM字となる。突帯下3cmには円孔がある。	付着する。突帯上下および頂部は右→左へ撫でる。内面は下→上へ指頭撫で。	色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：突帯片　表採
14	器厚　0.85	第二突帯と考えられるが、突帯は高い。突帯頂部は丸くつくられる。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目を施し、突帯を付け上下を撫でるが、下位が強い撫でである。内面は指頭撫で。	胎土：A多＋B＋C＋F 焼成：3 色調：10YR7/6明黄褐 残存：突帯片
15	器厚　0.95	突帯は頂部下位が低い。	外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施し、突帯を付け上下を撫でる。下位の撫では強く稜をつくるが、その後突帯頂部を右→左へ撫でる。内面は指撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R4/6赤 残存：突帯片　表採
16	器厚　1.0	突帯は丸味を持ち、くずれる。	外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施し、突帯をつけ右→左へ撫でる。内面は左下→右上へ不連続の刷毛目を施す。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：突帯片
17	器厚　0.85	突帯頂部は窪み、稜をつくる。	外面は下→上へ1cm＝5本の刷毛目を施し、突帯付着後上下を右→左へ撫でる。内面は指頭撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R4/8赤 残存：突帯片　表採
18	器厚　0.9	突帯下位は低く断面三角形に近くなる。突帯上3.8cmに円孔がある。	外面は下→上へ1cm＝5本の刷毛目を施し、突帯付着後上下を右→左へ撫でる。突帯頂部を右→左へ撫でる。内面指頭撫で。	胎土：A＋B＋F 焼成：5 色調：10R4/6赤 残存：突帯片　表採
19	器厚　0.75	突帯下位は低いが、稜は明瞭である。突帯下1.7cmには円孔がある。	外面は下→上へ2cm＝10本の刷毛目を施し、突帯付着後上下を右→左へ撫でる。内面は左上がりの指撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：突帯片　表採
20	器厚　1.95	器厚が最も厚い。	外面は下→上へ1cm＝7本の細かな刷毛目を不連続に施す。内面は左下→右上へ1cm＝4本の荒い刷毛目を施す。その上に一部外面と同じ刷毛目を行なう。	胎土：A多＋B＋C＋F＋G 焼成：4 色調：5YR6/6橙
21	器厚　1.7	器厚は厚く、突帯は太いが	外面は下→上へ刷毛目を施	胎土：A＋B＋F＋G

番　号	法　量	形態の特徴	手法の特徴	備　考
		低い。突帯下位は粘土接合痕が明瞭である。	し、突帯を付着し右→左へ撫でる。内面は右下→左上へ1cm＝4本の刷毛目。	焼成：3 色調：5YR 6/6橙 残存：突帯片
22	器厚　0.1 ～1.25	底部は薄い。	外面は下→上へ2cm＝9本の刷毛目を施す。内面は左上への指撫で。底面の一部が焼成時の吸炭により暗赤褐色となる。	胎土：0.7以下A＋B＋F 焼成：3 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：底部20%
23	器厚　1.3 ～1.8	底面やや上で肥厚する。	外面は下→上へ1cm＝4本の刷毛目を施す。内面は左上の指撫でを施した後、底面やや上から右→左への1cm＝5.5本の刷毛目。	胎土：0.7以上A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：底部25%　　表採
24	器厚　1.3 ～1.9	底部やや上が肥厚し、底面がやや張り出す。	外面は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施す。内面は指撫でを施した後、右下→左上への1cm＝4本の刷毛目を施す。	胎土：1.0以下A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：底部25%

黒田第17号墳出土形象埴輪（付図第3図・第32図）

番号	器　種	法　量	形態の特徴	手法の特徴	備　考
付図第3図	太　刀	器高　97.4 把部長14.5 把部径　5.7 勾金長29.0 底径　15.0	把頭は長方形で9.6×6.9、厚さ1.8cmを測り、中央に径1.1cmの円孔が上→下へ貫通する。把部は把頭の下方に広がり、下方では突帯に移行する。勾金は幅4.8cmで頂端部は丸く、下端部は斜に切られている。表には三輪玉が釦状に3個水平に配され、四列見られる。勾玉の下には緒が二方向に垂れ下がり、その左右には小さな円孔が開き、高さ32.5cmの第一突帯下にも円孔が開く。	粘土帯の積み上げは第一段が基底部、第二段が第二突帯付近、第三段が上位の円孔付近、第四段が第二突帯までで、その上に把下部にあたる粘土帯を置いて接合し、細い粘土紐を巻き上げる。把頭は粘土板を置き外面から撫でる。外面の整形は下→上へ2cm＝8本の刷毛目を施す。内面は右下→左上へ指撫でする。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：橙 残存：ほぼ完形であるが、基底部外面が剥離し、把頭の一部が欠ける 墳頂部第24図№1
第32図1	太　刀	上部 現長　9.0 幅　4.8	勾金の一部であるが2つの破片から復元したもの。上部片には三輪玉と考えられ	粘土板の内外面に刷毛目を施した後、特に外面には指撫でが行なわれる。上部片	胎土：0.5以下A＋B＋F＋G 焼成：5



第32図　黒田第17号墳出土形象埴輪

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		下部 現長 8.0 幅 4.1	るものが釦状に1個付着される。下部片は端部が丸くつくられ、先端部には釦状の三輪玉が左右に2つ、その下に一つの逆三角形に配される。	は内面が2cm＝2.5本の荒い刷毛目を施すのに対して、下部片は2cm＝7.5本の刷毛目を施すことから、あるいは別個体の可能性もある。	色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：勾金部下位 周溝
2	太刀？	器厚 1.0	突帯がめぐり、そこに接して緒が紐状に垂れ下がる。	外面下→上へ1cm＝5本の刷毛目を施し、突帯は右→左へ撫でる。内面は左下→右上への指撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R 5/8赤 残存：突帯片
3	馬　？	器厚 1.3	筒部に粘土板が当てられ、その上に粘土紐が巻きつけられる。上方には小さな円孔が開けられるが、ここが鼻の孔という考えもある。	外面には1cm＝4本の刷毛目が見られる。内面は指撫でが横位に走る。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR6/8橙 表採

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	刀子	全長 4.5 径 1.95	人物埴輪の太刀あるいは鎌とも考えられる。粘土紐を押しつけ、関付近に鍔状の粘土を巻き付ける。	表面は撫で。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：刀部のみ
5	不明	器厚 1.4	板状の端部をカットして作り出されている。一端は折損痕が見られる。	一面は2cm＝8本の刷毛目が施され、端部は篦でカットした後、曲面部のみ指撫でする。	胎土：A＋B＋＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：鰭部のみ　表採
6	馬	器厚 0.8 ～1.35	馬の口部と考えられるが、先端は平坦部をつくり、木目痕が明瞭である。上部に小さな円孔が1つあるが鼻であろうか。	紐を巻き上げて先端までふさぎ、押しつけ平坦部をつくる。表は2cm＝9本の刷毛目が、内面は粘土紐痕の上に横位の指頭痕がある。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：2.5YR5/8明赤褐 残存：口部30%
7	不明	器厚 1.0 ～1.45	板状であり、下部が肥厚するとともに右部が短かく折れ曲る。 8・9と同一個体か。	平坦面の内側は斜めに荒い刷毛を、その上を上下に細かい刷毛を施す。平坦面外側は上下に荒い刷毛を施す。	胎土：A＋B＋D＋F＋G 焼成：5 色調：10R 4/8 赤 残存：板状片　表採
8	不明	器厚 1.2	横断では三方に延びる割れ口があるが、一面は一方で端部をつくる。楯あるいは靫という考えもある。	一面だけ斜に荒い刷毛が、その上には細かな刷毛が上下に走る。他は指頭痕のままである。	胎土：A＋B＋F＋G 焼成：5 色調：10R 4/8 赤 残存：三叉状片　表採
9	不明	器厚 1.1	8と同じく三叉状に延びるが、一面はやはり折れ曲り端部をつくる。	7・8と同様一面は横方向に荒い刷毛目を施した後、縦方向に細かな刷毛目を行なう。	胎土：A＋B＋C＋G 焼成：5 色調：10R 4/8 赤 残存：三叉状片　表採

黒田第20号墳（第33・34図）

8・9—ケ・コ区に位置し、第17号墳の西6mに近接し、周溝を第97号住居跡に切られる。調査開始時に不明であったが、第17号墳調査時に確認できた古墳である。

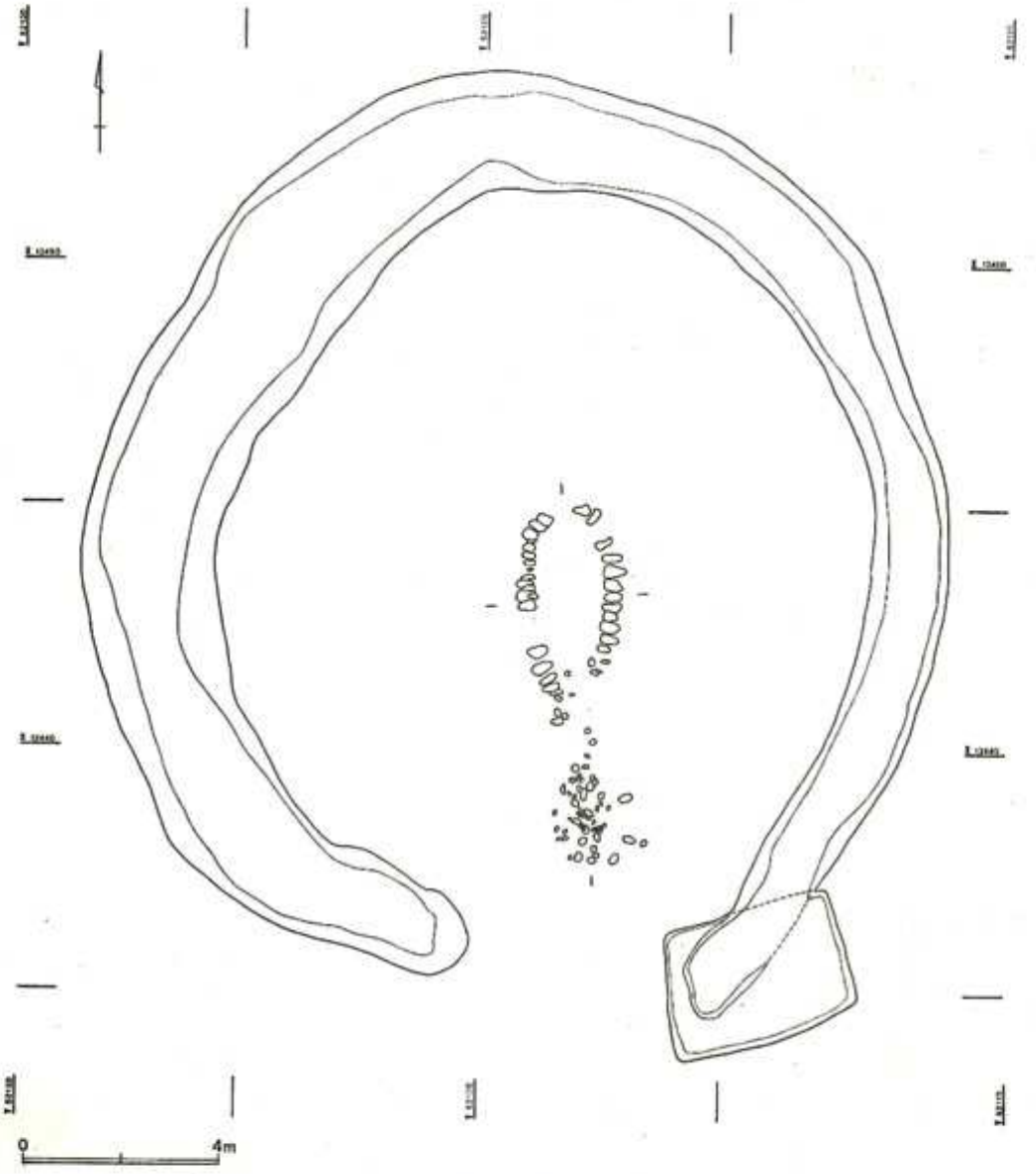
墳丘はすでになく、石室と周溝が検出できたが、いずれも残りの悪い円墳である。

周溝は石室が残存していることから、旧状を保っていると考えられ、南北にやや長く、石室前方で4.44m切断されている。南北方向で外径18.5mを、東西方向で外径17.5m、内径13.56mを測る。周溝の南東部は直線的に南西方向に延び、北西方向においても直線に走る部分がある。周溝幅は東

側が狭く、最も狭いところで1.54mである。西側は広く、最も広いところで3.17mを測る。

石室は根石の高さがかろうじて残る程の破壊を受けている。破壊により奥壁はすでになく、玄門付近から羨道部にかけては、全く旧状がつかめない。残存部で計測するため不正確であるが玄室の全長は3.5mで、玄室最大幅は1.42mを測る奥壁のやや広い胴張形石室である。石室の主軸はN—6°30′—Wを測る。

側壁の破壊は著しく、右側壁奥と左側壁中央付近の根石が抜き取られている。根石は黒田第17号墳が、大きな石を据えていたのに対して、最大48cm、平均35cmの細長い河原石を小口積みにしている。



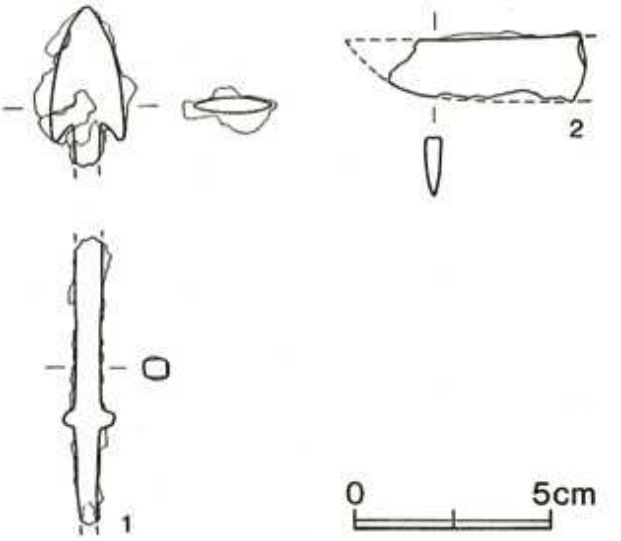
第33図　黒田第20号墳全体図

第34図　黒田第20号墳石室および断面図

床面の石は5～10cmの大きさで、玄室全面に敷れているようであるが、奥壁から2.5mの位置から羨道へは、床の掘り形が高いため石が散逸している。

奥壁から5mの位置には、0.1mの深さを持つ落ち込みが南へ2.5m続き、中には10～15cmの石と、砂質の黒色・暗褐色土が入っていた。この落ち込みは前庭部と考えられ、石室全長は5m以内と推測できる。

遺物はほとんどなく、埴輪も立てられていなかったと考えられる。石室内からは左側壁際の中程から鉄鏃（第34図1）と小刀（第34図2）が出土する。



第35図　黒田第20号墳出土遺物

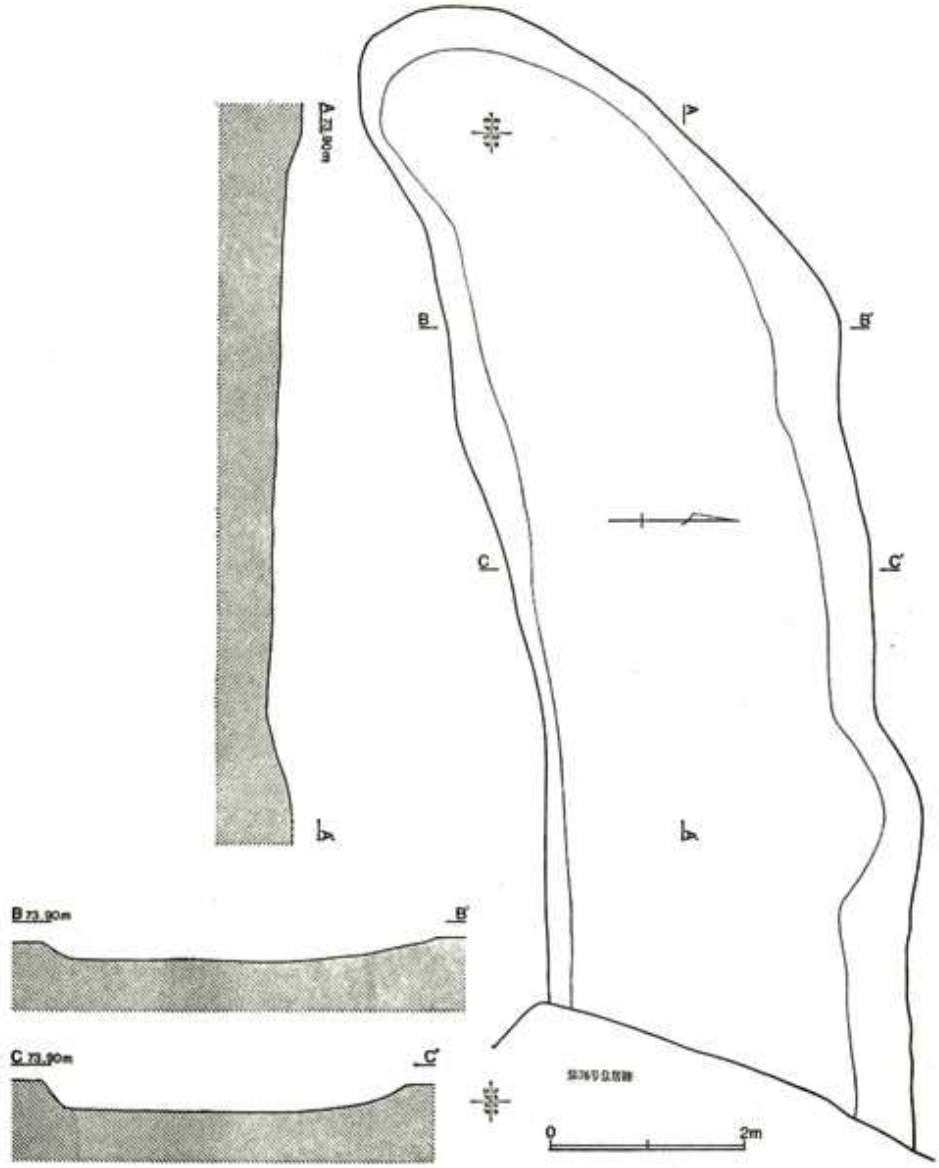
黒田第20号墳石室出土遺物（第35図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	鉄鏃	刃長 3.5 刃幅 1.5	長頸棘箆被腸抉平造長三角形式である。頸部の断面は0.5×0.6cmの長方形。	錆が著しい。	重量：刃部が8.32g、頸部が8.27g
2	小刀	現長 5.1 身幅 1.5 背幅 0.4	発掘時の長さは25cmを測る。切先と刃および基部が欠損する。	発掘時から錆が著くしく、残りが悪い。	重量：9.49g

黒田第21号墳（第36図）

5—チ区に位置するが、東を第76号住居跡に切断される。石室もなく古墳と明確に断定できないが、周溝の形態と、この地域からも埴輪が表採されていることから、古墳とした。

周溝の現長は13mを測り東西に走るが、西側では南西に曲り、消滅する。掘の最大幅は3.73mで、深さは0.28mを測る。掘の断面は底が平らで、立ち上がりは内側と考える南側がより急で、北側が緩やかに立ち上がる。



第36図　黒田第21号墳全体図

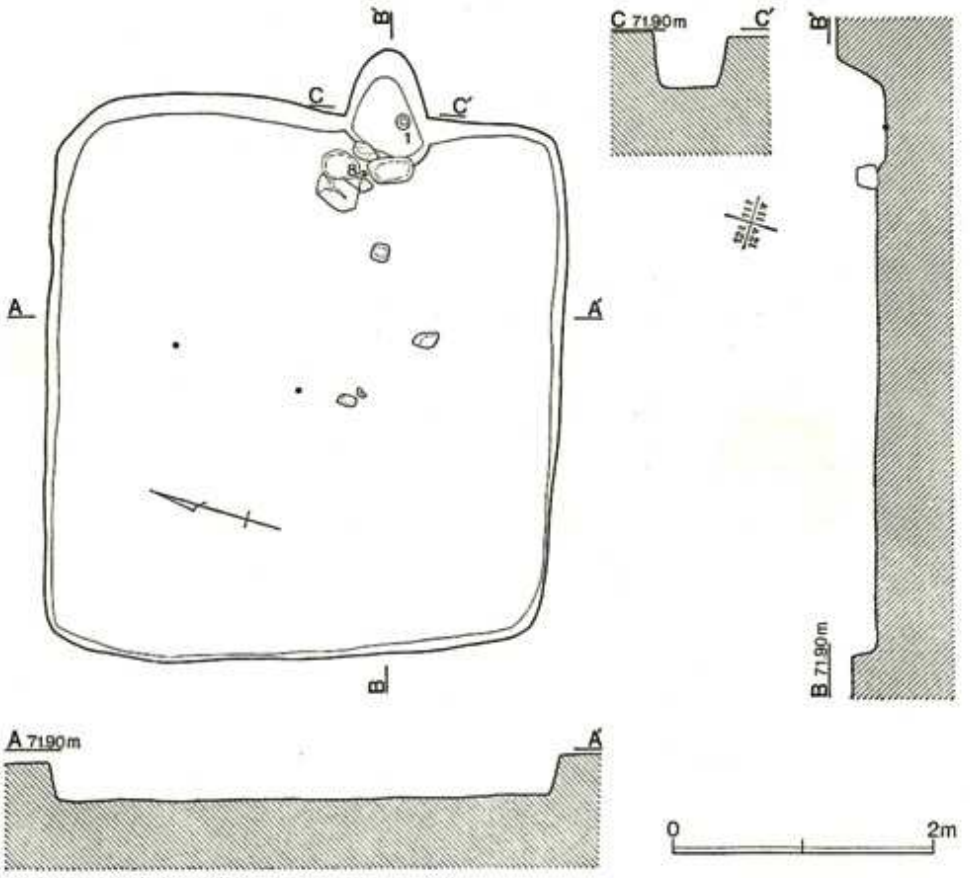
Ⅵ　平安時代以降の遺構と遺物

1　住居跡

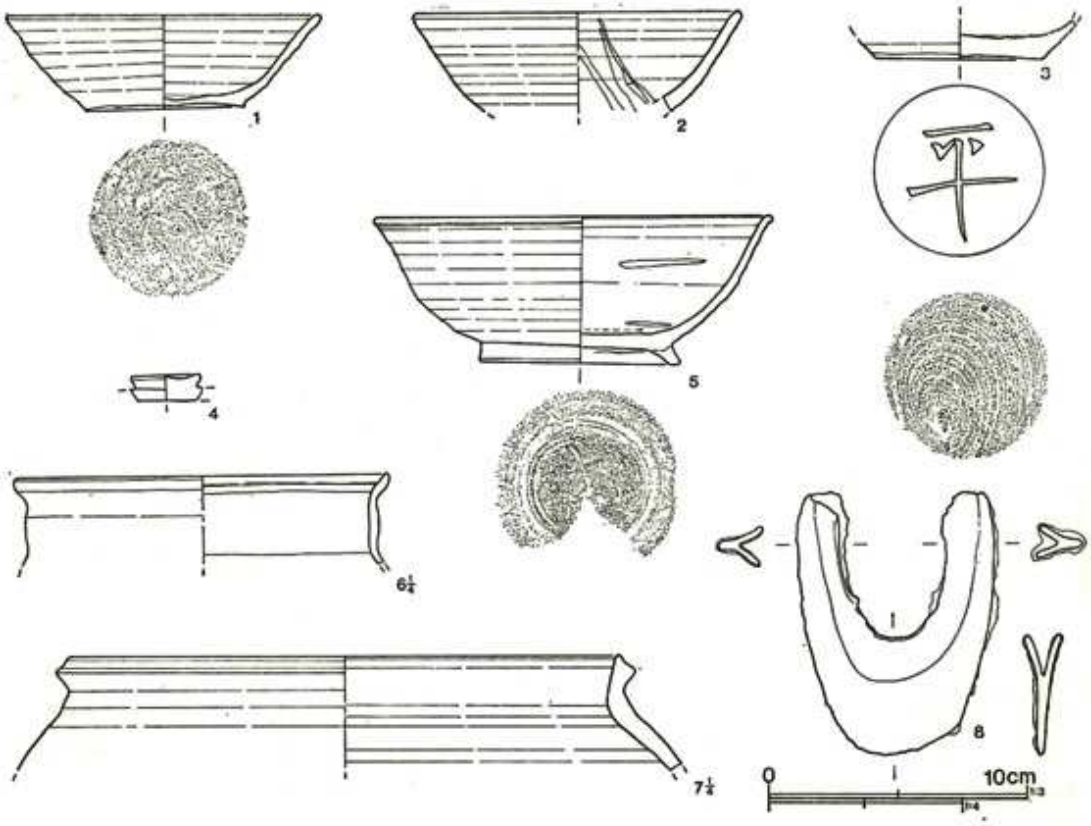
第3号住居跡（第37図）

12—ミ区に位置し、第10号住居跡に近接する。規模は4.3×3.97mで、深さは0.31mを測る残りのよい住居跡である。形態は僅かに長方形で、主軸はN—75°—E、床標高は71.49mである。竈は東壁やや右寄りに位置しており長さ0.85×幅0.6mで、焚口付近に石が数個見られた。柱穴は未確認である。

遺物は竈内から須恵器坏(1)、焚口付近の石の間から鋤先(8)が出土する。また中央床面上にも坏（2・3）、高台付埦(5)、蓋(4)、甕(7)が出土する。(3)は墨書土器である。他に製鉄炉壁が出土する。



第37図　第3号住居跡



第38図　第３号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物（第38図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.2 底径 6.2 器高 3.6	平底から外反気味に立ち上がり、すぐ直線上に開く。	右回転撫で７周。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：微A＋B＋D 焼成：5　色調：N 4/0 灰 残存：100%　竈
2	坏 須恵器	口径(12.8)	体部下位で屈曲し、直線的に上方へ開く。	右回転撫で９周。 火襷あり。　末野産	胎土：微A＋B＋E　焼成：5　色調：5PB 4/1 暗青灰　残存：17%　床面
3	坏 須恵器	底径(6.3)	底部は僅かに上げ底になる。	右回転撫で。底部右回転まわし切り。「平」の墨書がある。　末野産	胎土：微A＋B＋E　焼成：2　色調：5Y 7/2 灰白 残存：底部100%　床面
4	蓋 須恵器	つまみ径 2.7	つまみは扁平はで、中央部は周辺と同じ高さである。	右回転撫で。　末野産	胎土：微A＋B＋G　焼成：2　色調：2.5YR7/2明赤灰　残存：つまみ80% 床面

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	高台付椀 須恵器	口径 15.5 高台径 7.8 器高 5.7	高台はハの字状に開くが短かい。体部中位に屈曲部を持つ体部を経て、短かく反る口唇部に至る。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。内面底部付近に重ね焼き痕がある。末野産	胎土：微A＋B 焼成：2 色調：2.5Y6/1黄灰　残存：底部80%口縁30%　床面
6	甕 土師器	口径(19.1)	コの字口縁であるが、口唇部は僅かに内彎気味に立ち上がる。	摩滅顕著で整形不明。	胎土：微A多＋B＋E＋F＋G　焼成：1　二次加熱 色調：5YR6/8オリーブ 残存：口縁20%
7	甕 須恵器	口径(29.5)	口唇は断面三角形をつくり、頸部で括れて胴部へ広がる。	右回転撫で。　末野産？	胎土：微A＋B　焼成：3 色調：5Y6/1灰 残存：口縁8%　床
8	鋤	長さ 11.0 幅 7.6	U字形で右先が片減りする。袋部は反り返りしっかりする。		重量：111.8g 竈焚口前

第4号住居跡（第39図）

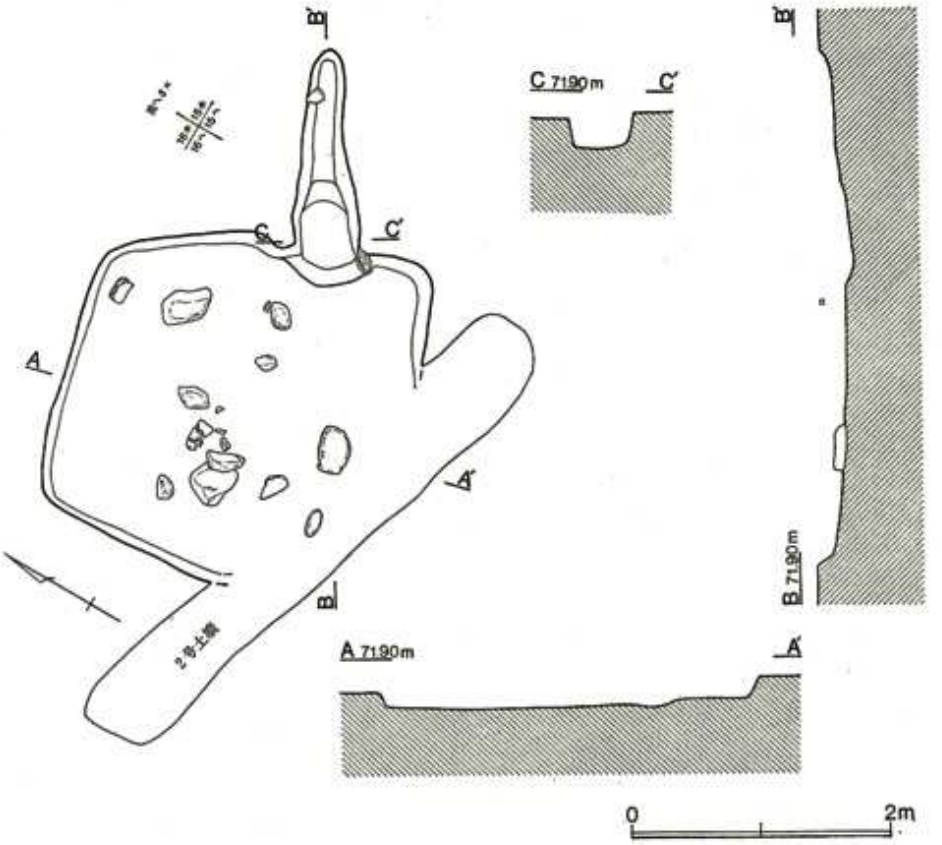
16—ヘ区に位置するが第2号土坑に南隅を切られる。規模は3.48×2.78m、深さは0.21mを測る小形の住居である。形態は不整方形で北壁が短くなる。主軸はN—62°—Eで、床標高は71.52mを測る。床面には17～43cmの石が約10個散乱しており、床中央がやや低くなる。柱穴はない。竈は東壁やや右寄りにあり長さ1.83×幅0.5mで、幅0.3mの細長く緩やかな傾斜の煙道を持つ。竈右袖には炉壁が使われている。

遺物は竈内から坏（1・2）、瓶（4・5）、が出土している。製鉄遺物としては鉄滓410g、羽口片と竈使用の炉壁がある。

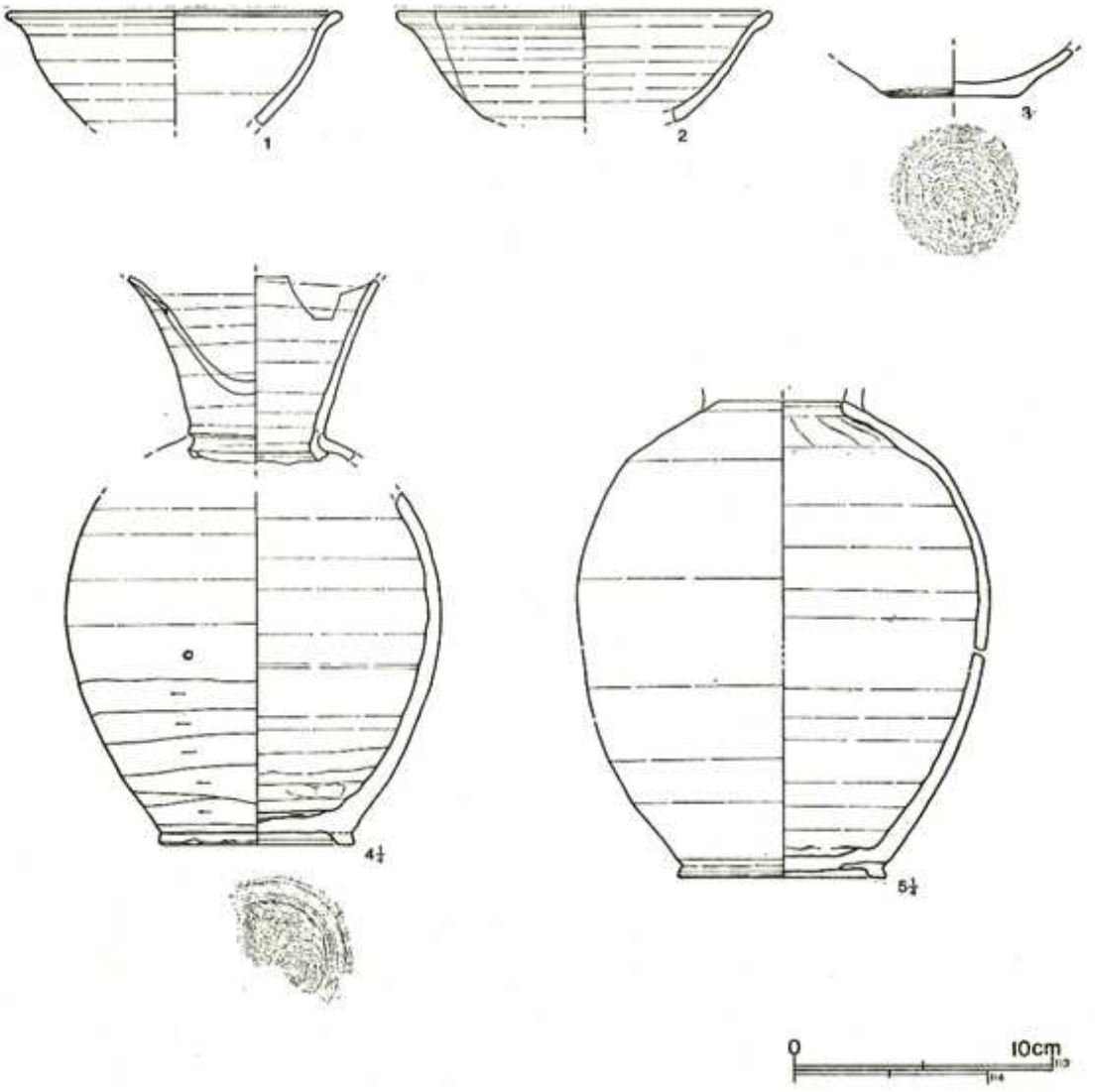
第4号住居跡出土遺物（第40図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(13.0)	内彎して立ち上がる体部を経て強く外反する口縁に至る。口唇はやや肥厚する。口縁は焼き歪む。	右回転撫で。　末野産	胎土：細A＋B多＋C多＋E　焼成：5 色調：N5/0灰 残存：40%　竈・床・覆土
2	坏 須恵器	口径(14.6)	整形から高台坏の可能性がある。内彎する体部から外反して肥厚する口縁に至る。	右回転撫で8周＋α。　末野産	胎土：0.5以下A多＋B＋C＋D＋E　焼成：5 色調：7.5Y4/1灰 残存：20%　竈
3	坏	底径 5.1	底部から外反して立ち上がる。この形態から1が接合	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：A＋B＋C＋E 焼成：5　色調：2.5Y5/2

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器		する可能性がある。		灰黄　残存：底部100% 覆土
4	広口瓶 須恵器	胴径　19.1 高台径10.0	高台は幅広く短い。胴部は最大径を中位やや上に持ち、頸部にて屈曲して外反気味に広がる口縁に至る。	紐つくり。右回転撫で。高台接合後内外回転撫で。体部下位は右回転削り5周。口縁は製作後胴部に乗せ、粘土を内側に巻き込んで接合する。　末野産？	胎土：A＋B＋C＋E 焼成：4 色調：7.5Y5/1灰 残存：体部50%、口縁60% 竈・床・覆土
5	瓶 須恵器	胴径　21.1 高台径10.7 胴高(24.2)	短かく開く高台から、最大径を上位に持つやや長い胴を経て、窄まる頸部に至る。	紐つくり。右回転撫で。内面底部指頭不整方向の撫で。胴最上位は絞り目が見られる。頸部は体部に乗せて接合。　末野産？	胎土：0.2以下A＋B＋C＋E　焼成：1 色調：2.5Y6/2灰黄 残存：30%　口縁欠 胎土分析№1 竈・床・覆土



第39図　第4号住居跡

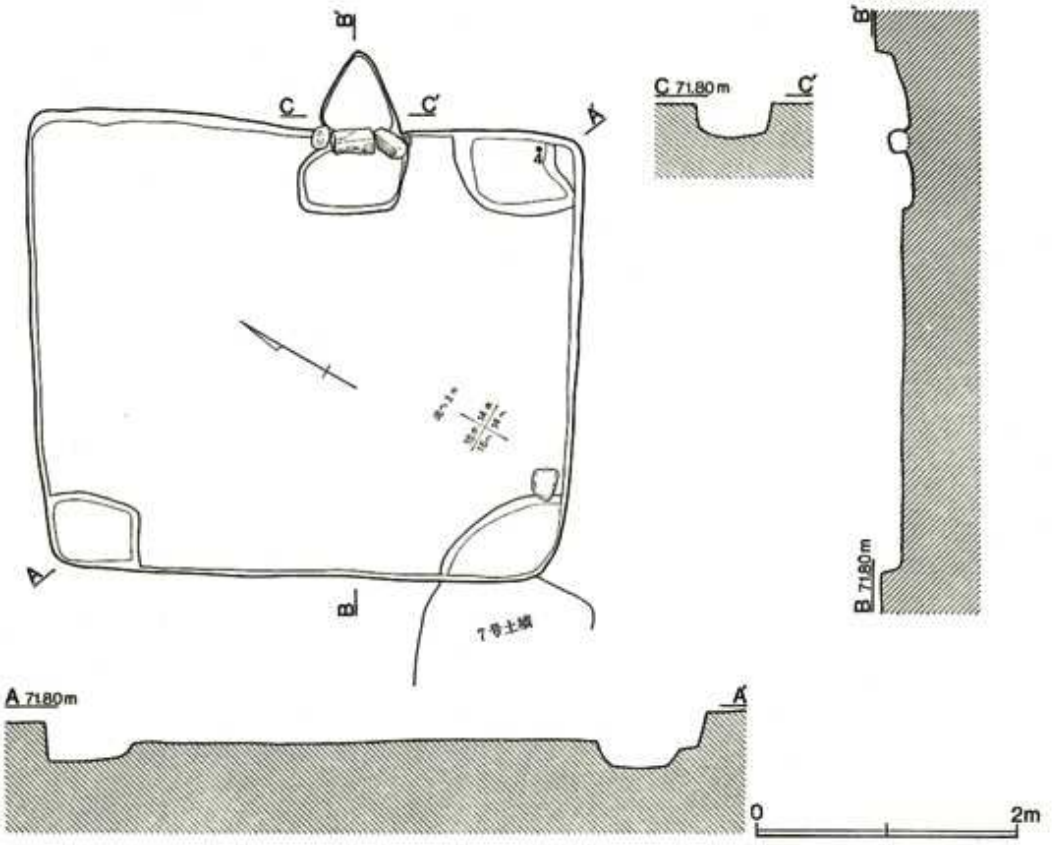


第40図　第４号住居跡出土遺物

第６号住居跡（第41図）

14・15—ホ区に位置するが、第７号土坑（縄文時代）を切る。規模は3.52×4.25ｍで、深さは0.12ｍを測る。形態は北東隅が突き出る長方形で、主軸はN—64°—E、床標高は71.42ｍである。竈は東壁僅か右寄りにあり、長さ1.25×幅0.65ｍで、天井部に使われたと考えられる石が３点落ち込んでいる。石材は片岩を含む砂岩である。床の北東・南東・南西隅に落ち込みが見られるが、いずれも浅い。位置から南東隅のピットは貯蔵穴の可能性もある。

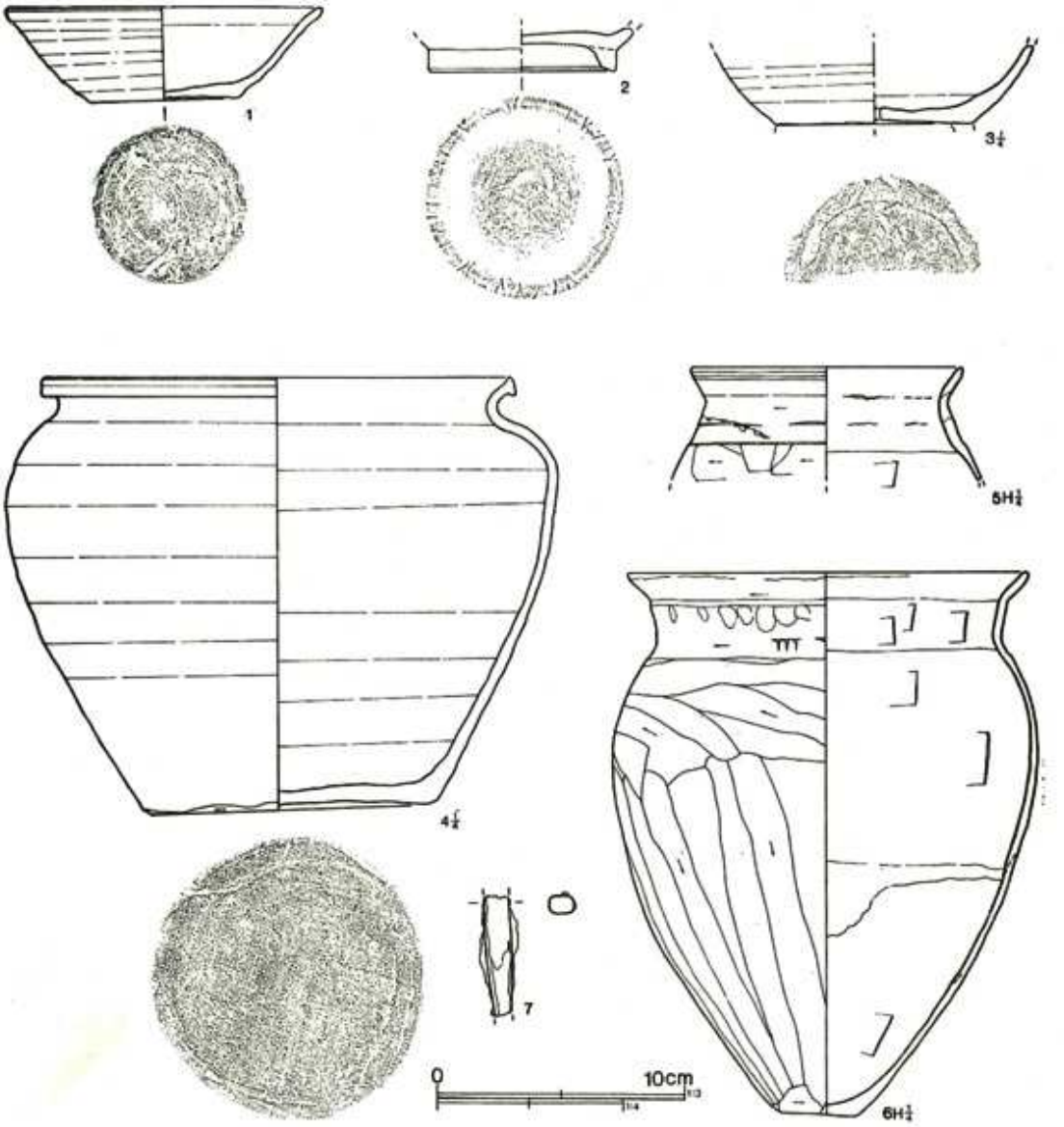
出土遺物は竈内からほぼ完形の土師器甕(5)と(6)が、東隅落ち込みから坏(1)と鉢（４）が、覆土中からは坏(1)、鉢(3)、鉄器(7)が出土する。竈右ピット出土の坏片が、第２号住居跡床面出土坏(2)と接合する。



第41図　第6号住居跡

第6号住居跡出土遺物（第42図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.7 底径 6.0 器高 3.8	底部から指差し込み部で僅かに外反し、直線的に立ち上がり、口縁で僅かに開く。	右回転撫で7周。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：0.5以下A＋C多＋D多　焼成：5　色調：N3/0灰　残存：40% 竈右ピット・覆土
2	高台付椀 須恵器	高台径 7.6	高台外面は垂直に立ち、端部は内側に段を持って傾斜する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。　末野産？	胎土：0.4以下A多＋C多＋G　焼成：2　色調：5Y7/1灰白　残存：高台100%
3	高台付鉢 須恵器	底径(10.5)	高台は欠損するが、平底から大きく膨らむ胴へ移る。	右回転撫で。底部は右回転糸切り後、周辺を右回転箆削りする。　末野産？	胎土：0.6以下A＋B＋D＋E多　焼成：3　色調：2.5Y7/2黄灰　残存：体部下位40%　高台欠　覆土



第42図　第6号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	鉢 須恵器	口径 25.0 胴径 29.2 底径 14.7 器高 22.8	僅かな上げ底から直線的に開き、最大径を肩部に持つ胴部を経て、頸部で大きく屈曲する。外反した口縁は短かく口唇に沈線が巡る。	右回転撫で。頸部は強い撫でにより外反する口縁をつくる。底部は十字方向に篦削りし周辺部を狭く削る。内面底部は指押え。末野産	胎土：0.8以下C＋D 焼成：5 色調：2.5Y6/1黄灰 残存：底部100% 口縁～胴部60%　竈右ピット
5	甕 土師器	口径 14.4	口縁部下半は内傾し、屈曲して外傾するくの字状の口縁となる。	口縁部外面に粘土接合痕が見られる。口縁は右回りの横撫で2段を内外に施した	胎土：微A多＋B＋F 焼成：3 色調：5Y5/6明赤褐

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				後、胴部は右→左へ篦削りする。内面は胴部に右→左へ篦撫でをする。	残存：口縁25％　竈
6	甕 土師器	口径　21.2 胴部　22.4 器高　28.5	小さな底部から急に立ち上がり、最大径を上位に置く胴部を経て、コの字口縁に移る。口縁はやや開き気味である。	体部は3段、口縁1段のつくりである。外面は口縁を右回りに2段の横撫でを行なった後、胴部下位を上→下へ篦削りした後、上位を右→左へ、また最下位を左→右へ篦削りする。底部は一方向の削りである。内面は2段目の接合部に粘土補強痕がある。内面全体を右→左への篦撫でする。	胎土：微A多＋B＋F 焼成：3　二次加熱 色調：2.5YR6/6橙 残存：口縁一部欠　竈
7	棒状鉄器	幅　1.0 厚さ　0.7	断面は隅の丸い長方形を呈し、下方でやや細くなる。		重量：10.97g

第8号住居跡（第43図）

13—ホ・マ区に位置するが、第9号住居跡に近接する。規模は3.68×3.8m、深さ0.22mある。形態はやや隅丸の正方形で、主軸はN—76°—E、床面標高は71.59mを測る。竈は東壁中央から僅か右寄りにあり、長さ0.87×幅0.5mを測る。右袖部には石が使われている。南・西壁と北壁の一部には壁溝が巡るが不連続であったり不明瞭である。柱穴は土坑の回りに3本確認された。

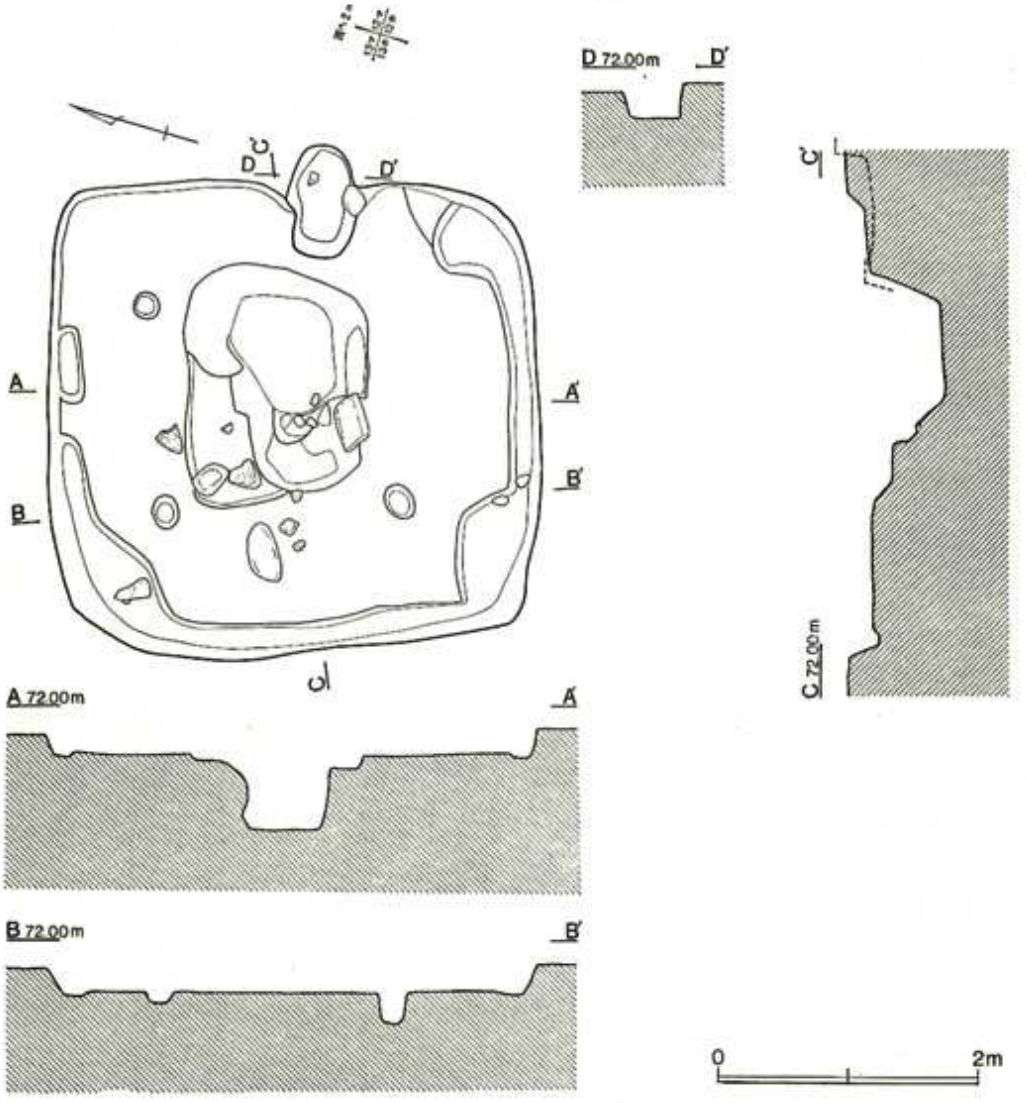
製鉄関連の遺構として中央に1.85×1.39mの、北壁の長い平面形態台形の土坑があり、深さは0.75mを測る。土坑の落ち込み西辺には浅いテラスが設けられ、鉄滓の付着した0.9×0.6mの浅い皿状の炉が作られる。炉と土坑を結ぶ高まりには、あたかも使用時を思わせるように、羽口が据えられていた。土坑の中には多量の焼けた石や焼土・炭化物とともに1～2cmの不整球状の鉄滓、羽口が出土した。土層は砂質土が主体である。

出土遺物は炉に接して出土した羽口⑽の他、土坑内から⑾～⒁が出土する。また砥石(8)も出土するが、鉄滓が付着する。住居跡床面からは甕(6)、覆土からは皿(1)、土師器甕(7)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が12.03kgと炉壁、鉄滓付着土器が出土する。

第8号住居跡出土遺物（第45・46図）

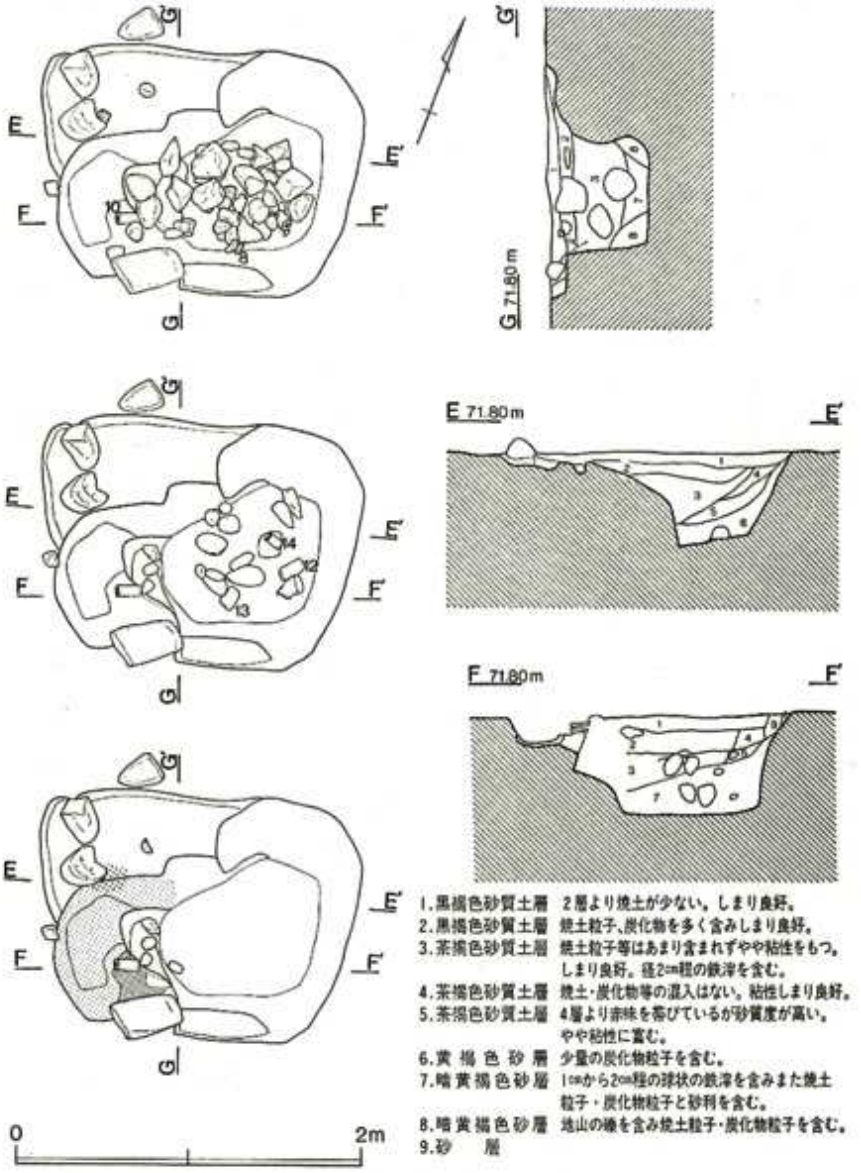
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	皿 須恵器	口径　15.0 底径　5.6 器高　2.3	平底から大きく外傾して立上がり、口縁にて大きく外反し、口唇は丸く肥厚する。	右回転撫で5周。底部右回転まわし切り。底部は導入から切り離し終了まで2周。　末野産	胎土：A＋B＋D＋G 焼成：2　色調：10YR6/2 灰黄褐　残存：40％　覆土

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	皿 須恵器	口径(15.0) 底径(7.0) 器高(2.3)	平底から凹凸して口縁に至り、口唇にて玉縁になる。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：A＋B＋E＋G 焼成：3 色調：2.5Y6/2灰黄 残存：20% 鉄付着
3	皿 須恵器	口径(14.5)	大きく外反する体部から、丸縁の口唇に移る。	右回転撫で。 末野産	胎土：A＋B＋C 焼成：3 色調：2.5Y7/1灰白 残存：10% 柱穴
4	皿 須恵器	口径(19.3) 底径 8.0	僅かな上げ底から直線的に外傾する。口唇は玉縁状に大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし切り。 末野産	胎土：A＋B＋E多 焼成：5 色調：10YR6/2灰黄褐 残存：50%

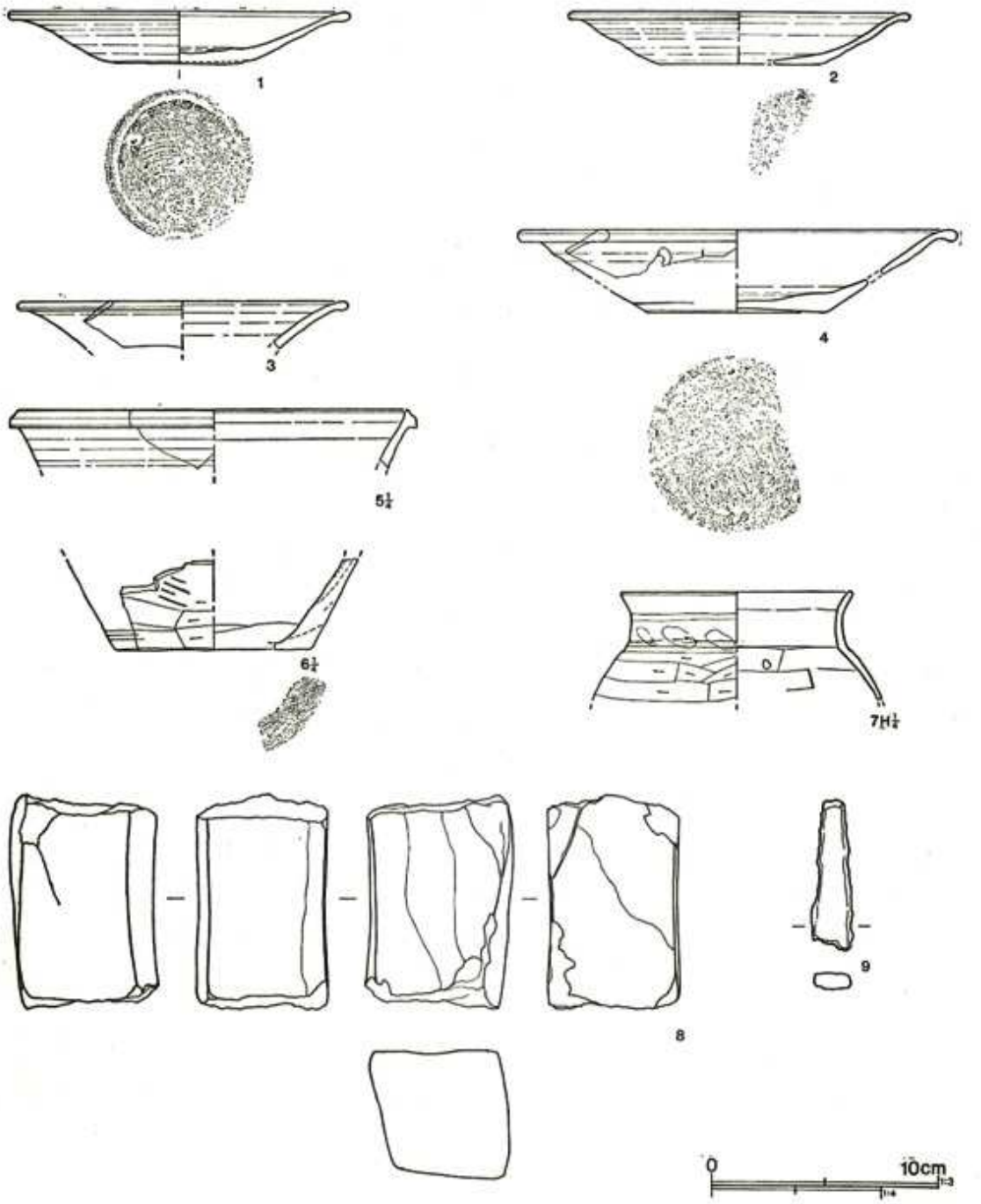


第43図 第8号住居跡

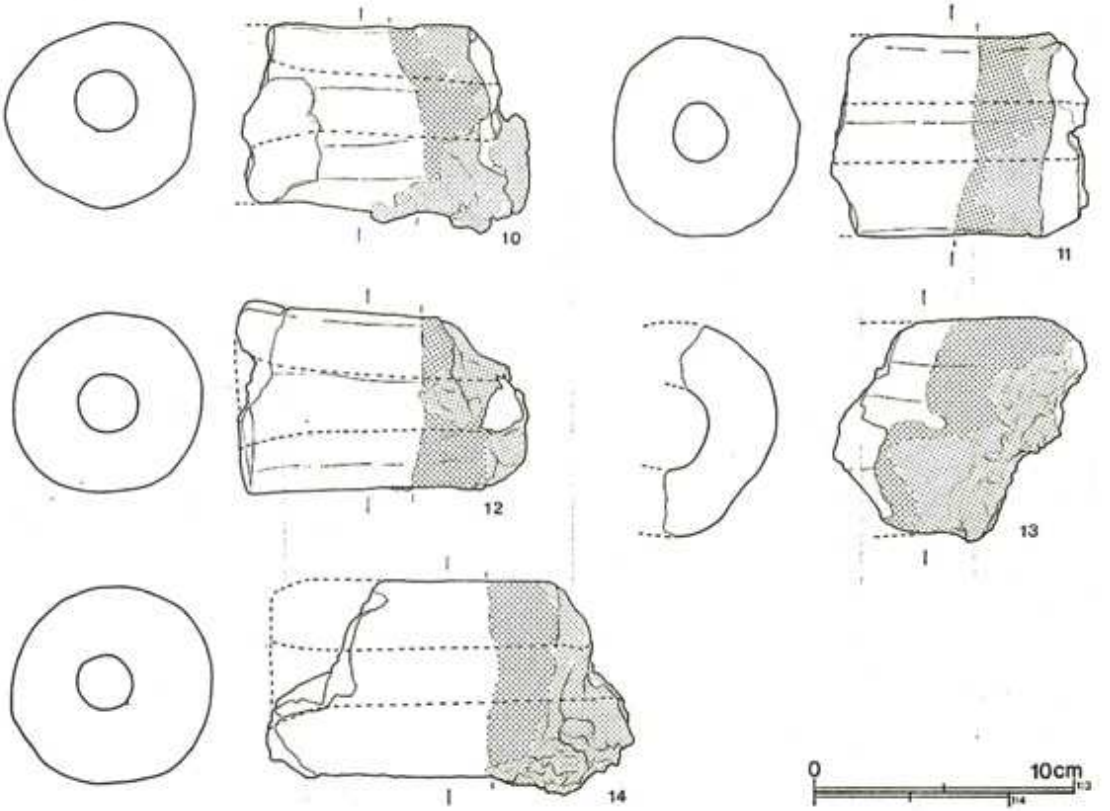
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	壺 灰釉	口径(22.5)	つくりは丁寧で、口縁は鋭い稜を持つ。内面に濃緑色の釉がかかる。	回転撫では細かく丁寧な引き上げ。 猿投産	胎土：夾雑物微量 焼成：5高温 色調：2.5Y5/1黄灰 残存：8％ 鉄付着
6	甕	底径(11.2)	直線的に平底から立ち上がる。	外面2cm＝7本の太い平行叩きが施され、底面および周縁を箆削りする。末野産	胎土：A＋B＋E＋G 焼成：5 色調：2.5Y4/1黄灰 残存：18％ 床



第44図　第8号住居跡精錬炉



第45図　第８号住居跡出土遺物(1)



第46図　第8号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕 土師器	口径(13.4)	口縁はコの字に近く、口唇は外傾する。	口縁2段の右回り横撫で後体部は右→左へ篦削りする。内面は右→左へ篦撫で。	胎土：微A多＋B＋F＋G 焼成：4　色調：5YR6/6橙　残存：38%　覆土
8	砥石	全長 9.3 幅 6.5 厚 5.8	長辺4面とも使用され、一面だけは中央をさらに浅く溝状に使う。火熱受ける。	使用のために各部とも浅く窪み、各面とも鉄分が付着する。	重量：608.47g　砂岩製 中央の土坑中より出土。
9	鉄器	現長 6.6 幅 1.6	刀子の柄の可能性もあるがやや太い。未加工品か。		重量：18.22g
10	羽口	現長 11.1 外径 7.0 孔径 2.0	基部欠損。基部孔径は擦り減る。口部隔解黒色ガラス化。	棒に巻いて板に押しつけ約9面つくる。口部周辺に鉄滓垂れ下がる。	胎土：0.5以下A＋スサ多量　炉

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	羽口	現長 9.7 外径 7.7 孔径 2.2	基部欠損。先端は隔解発泡する。	棒に巻いた後、平面に押しつけ11面をつくる。口部周辺に鉄分付着。	胎土：0.5以下A＋スサ多量　土坑内
12	羽口	全長 11.1 外径 6.5 ～7.4 孔径 2.0	ほぼ完存する。基部は太くなり、孔径も擦れて広がる。先端は隔解して黒色ガラス化。	棒に巻いた後、板に押しつけ多面をつくる。口部周辺に鉄分付着。	胎土：0.5以下A多＋スサ　土坑内
13	羽口	現長 9.8 外径 8.1 孔径 3.2	小片である。やや太い形態である。	棒に巻きつけ、表面は指撫で整形。口部周辺に鉄分付着。	胎土：0.3以下A＋スサ多量。0.5～1.3の小石混入　土坑内
14	羽口	全長 14.2 外径 7.6 孔径 1.9	孔部はやや細く、基部にて擦れて広がる。先端は隔解して発泡、黒色ガラス化。	棒に巻きつけ板の上で転がす。口部下方には溶けた鉄滓が垂れ下がる。	胎土：0.8以下のA多＋スサ　土坑内

第9第号住居跡（第47図）

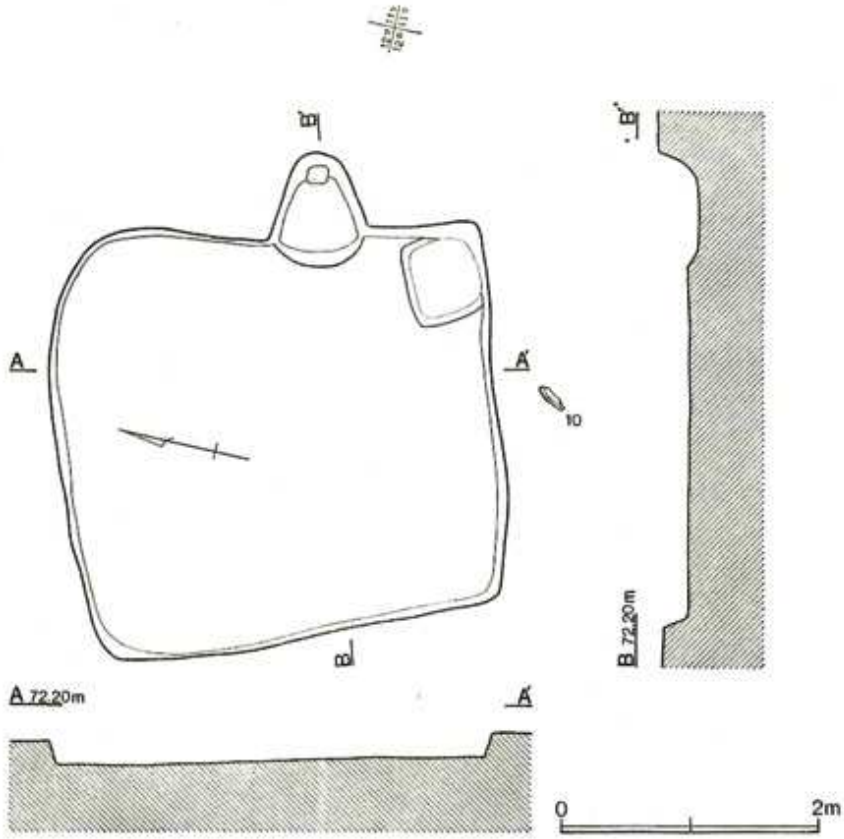
12―マ・ホ区に位置し、西に第17号住居跡が近接する。規模は3.35×3.45mで、深さ0.21mを測る。形態はほぼ正方形で、主軸はN―78°―E、床標高は71.74mである。

竈は東壁やや右寄りにあり、長さ0.88×幅0.75mで、焚口が低くなる。床は東南隅に深さ0.1mの窪みがあるが、貯蔵穴の可能性もある。柱穴は検出できなかった。

遺跡は覆土中より坏(1)～(3)、土錘（8・9）が、南壁外より甕(10)が出土する。竈中からも埦(5)、土師器甕(6)・(7)が出土したほか、鉄滓20gがある。(5)は底部に箆描きの「月」があり、第94号住居跡竈出土品と接合した。

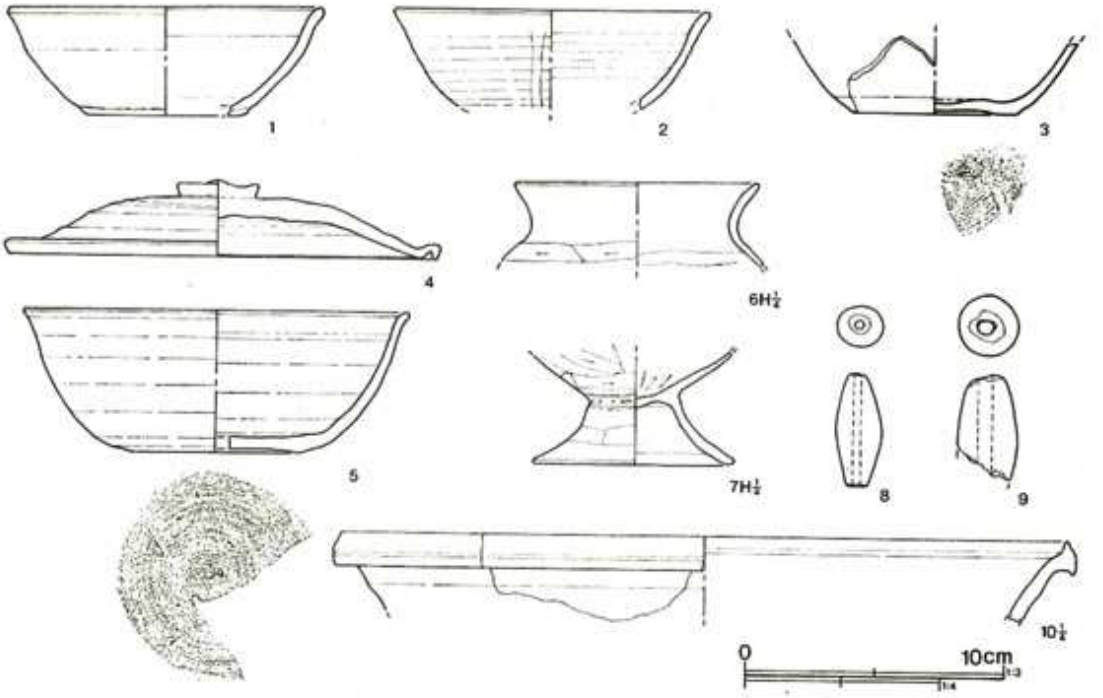
第9号住居跡出土遺物（第48図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(12.2) 底径(6.2) 器高 4.2	底部から立ち上がった後、糸切り失敗の段を経て、丸味を持つ体部から外反する。	体部に粘土帯接合痕あり。右回転撫で、底部右回転糸切り。　南比企産	胎土：B＋E＋I　焼成：5　色調：5Y 6/1灰　残存：20%　覆土
2	坏 須恵器	口径(12.2)	丸い体部からやや外反する口縁に至る。	右回転撫で9周。体部に火襷あり。　南比企産	胎土：B＋I　焼成：4　色調：2.5YR6/1黄灰　残存：体部上位25%　覆土
3	坏 須恵器	底径(6.3)	底部より、緩やかな丸味を持つ体部に移る。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：B＋C＋E　焼成：5　色調：5Y 4/1灰　残存：20%　覆土



第47図　第9号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	蓋 須恵器	口径 16.5 つまみ径 3.15 器高 2.9	口縁は一端屈曲した後、口唇にて垂直になるが端部は内傾する。天井部は中程で屈曲し、中央の突出するつまみに至る。	右回転撫で5周。天井部右回転糸切り後、右回転削り3周を行ないつまみをつける。　南比企産？	胎土：0.6以下B・D＋E 焼成：5Y5/1灰　残存：60%　覆土
5	椀 須恵器	口径(15.0) 底径(7.8) 器高 5.5	平底から深い体部を経て、緩やかに外反する。口唇内側には稜をつくる。底部には箆書きの「月」が見られる。	右回転撫で7周。底部全面右回転箆削り。　南比企産	胎土：B＋I　焼成：4 色調：10YR7/2にぶい黄橙　残存：50%　竈
6	甕 土師器	口径(12.4)	口縁は大きく外反する。	摩滅する。口縁内外とも横撫で後、外面体部右→左へ箆削り。内面横位木口撫で。	胎土：微A多＋C＋F＋G＋H　焼成：2　二次加熱 色調：7.5YR6/6橙　残存：口縁23%　竈
7	台付甕 土師器	脚径 10.2 基部径 4.6	大きくハの字状に開く脚から強く括れる基部を経て、僅かに丸味を持つ体部へ。	脚台部横撫で。底部左上→右下へ箆削り後、脚部と接合し、脚内面頂部を指撫で	胎土：微A多＋B＋F＋G＋H　焼成：3　二次加熱 色調：2.5YR橙　残存：



第48図　第9号住居跡出土遺物

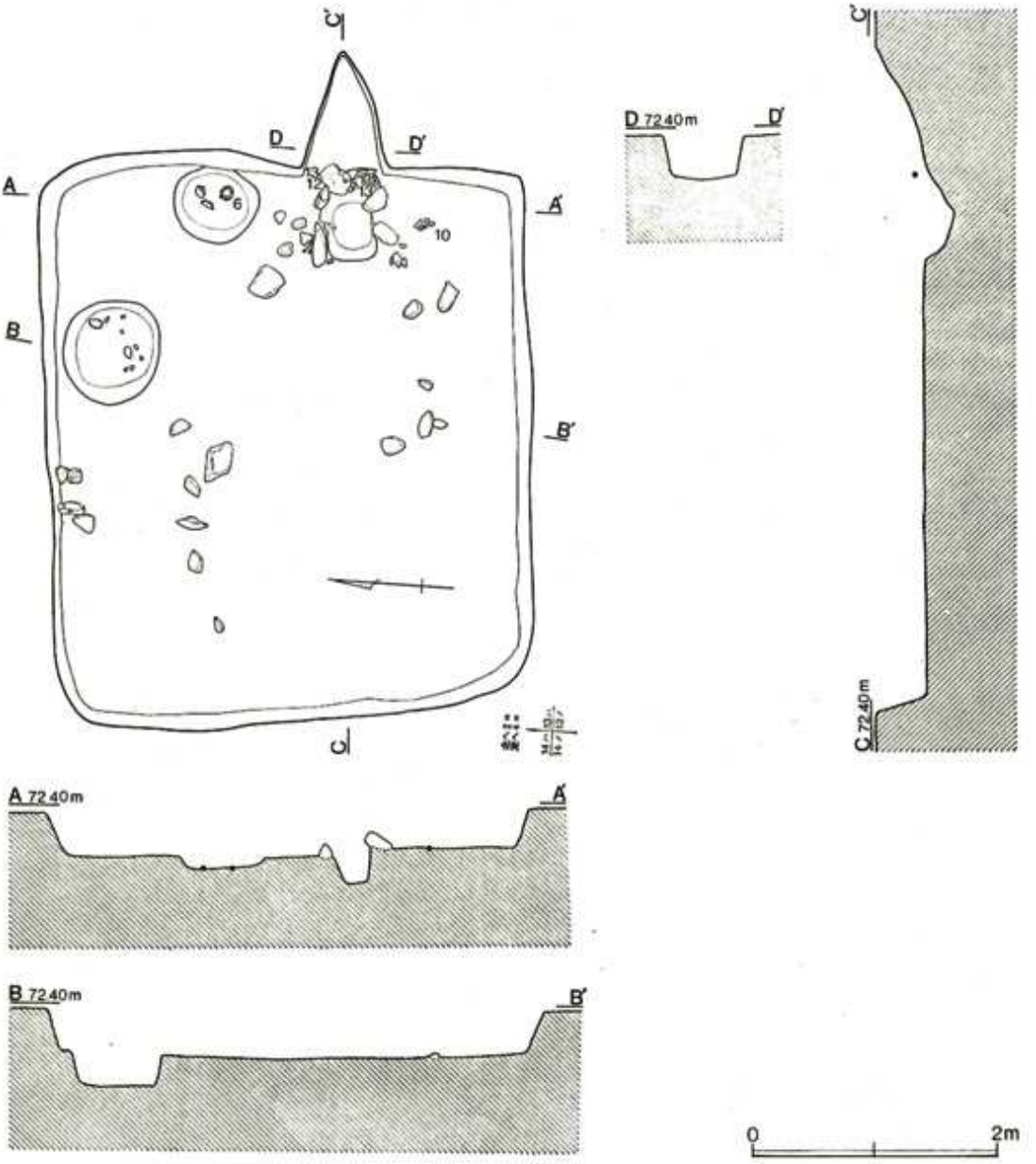
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				する。体部内面は右→左への篦撫で。	脚台部80%　竈
8	土錘	全長 4.35 径 1.7 孔径 0.3	中央の太い長細い形。端部は擦り減る。	棒を差し込み、引き抜く。表面は撫で。	重量：9.41g　胎土：微A 焼成：3　色調：7.5YR 7/6橙　残存：100%　覆土
9	土錘	現長 3.94 径 2.35 孔径 0.55	8と形態は同じであるが、やや太く大形。端部は擦り減る。	棒を差し込み、引き抜く。表面は撫で。胎土は末野産の須恵器と同じである。	重量：16.47g　胎土：0.5以下A＋B＋C　焼成：5 色調：5YR 6/4にぶい橙 残存：50%　覆土
10	甕 須恵器	口径(36.8)	口唇部は上下に細く延び、端面には一本の沈線が巡る。	右回転撫で。高温による吹き出し釉のため、肌が荒れる。	胎土：0.5以下A多＋C多 焼成：5　色調：5YR6/1 褐灰　残存：15%　南壁外

第13号住居跡（第49図）

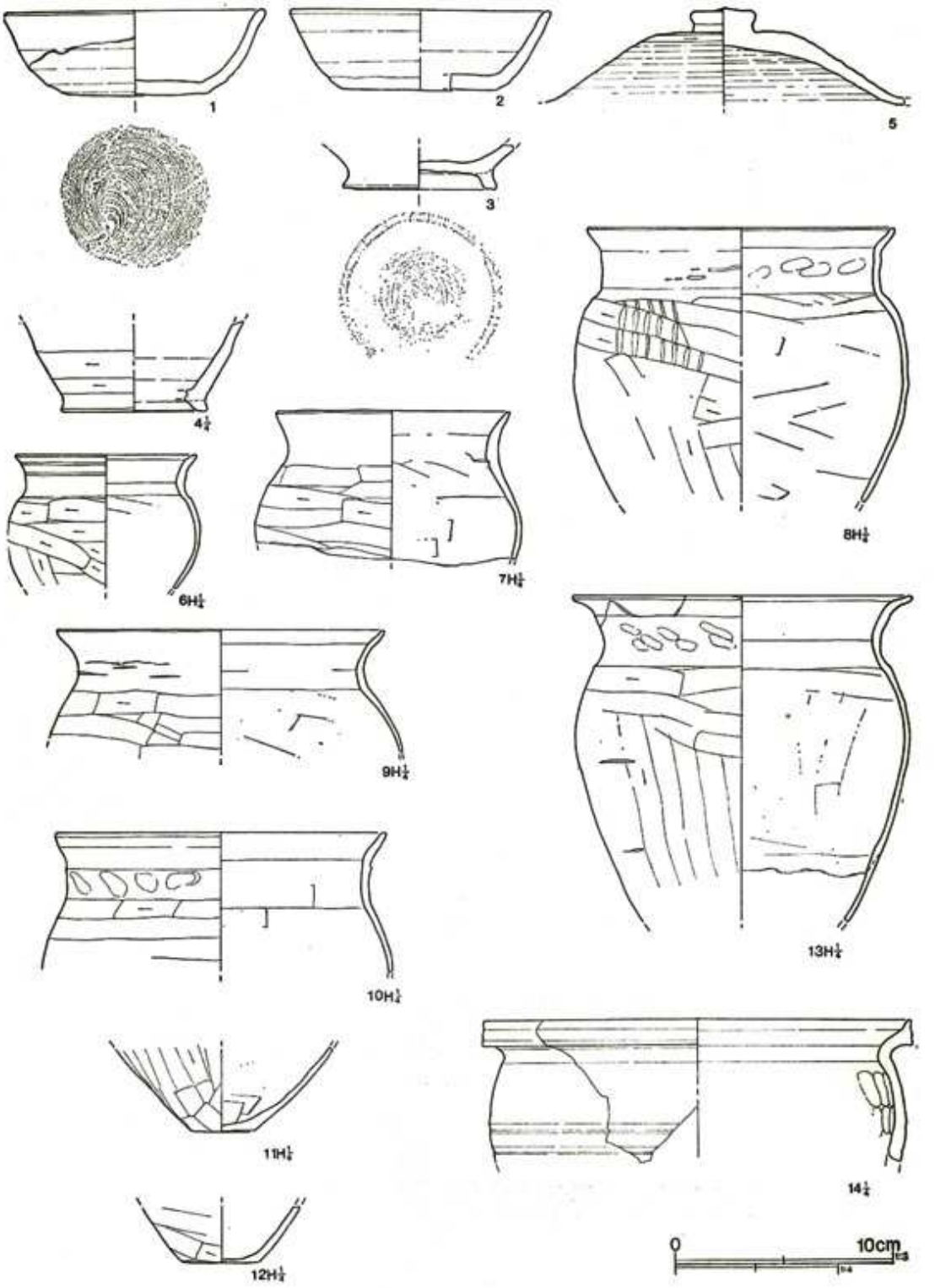
13—ハ区に位置するが、周辺には近接する住居はなく、空間がある。規模は4.18×4.0mで、深さは0.34mを測る。形態は長方形で、主軸はN—85°30′—E、床標高は71.96mである。

竈は東壁やや右寄りにつくられ、煙道に向って急傾斜で立ち上がる。焚口は深い土坑がつくられ周辺には石と遺物が見られる。竈は長さ1.7×幅0.7mを測る。床には多くの石が散乱し、竈左に径0.7mの浅い土坑があり土器が出土する。また北壁側にも径0.9m、深さ0.25mの土坑がある。柱穴はない。

出土遺物は竈内から土師器甕(8)、(12)、(13)が出土する。竈左土坑から土師器甕(6)、(7)が、覆土から(2)、(4)、(5)、(9)、(10)、(14)が出土する。製鉄関係では竈から羽口片と、他に鉄滓295gを。



第49図　第13号住居跡



第50図　第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物（第50図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.0 底径 6.8 器高 3.9	平底から指差し込み部で外反し、やや膨らむ体部を経て外反する口縁に至る。器厚0.45cmを測り厚手である。	粘土帯積み上げ成形。右回転撫で4周。底部まわし糸切り。 南比企産	胎土：B＋C＋E少＋I（1㎠＝12） 焼成：5 色調：5Y 6/1灰 残存：80％
2	坏 須恵器	口径(12.0) 底径(7.1) 器高 3.65	平底から僅かに丸味を持って立ち上がる。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土：A微＋E少＋I 焼成：5 色調：N4/0 灰 残存：15％ 覆土
3	高台付椀 須恵器	高台径 7.1	高台は外に開き、端部が僅かに窪む。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下C 焼成：4 色調：10YR 7/1 灰白 残存：底部80％ 覆土
4	高台付瓶 須恵器	高台径 (8.8)	高台は外に張り出すが、特に内側は外傾する。	右回転撫で。外面胴部下位右回転篦削り。つくり精緻。 南比企産	胎土：0.5以下白色A 焼成：5 色調：10YR 5/1 褐灰 残存：25％ 覆土
5	蓋 須恵器	つまみ径 3.0 現高 4.5	口縁は反り、体部は直線的に延びる。天井部は水平になり、つまみは中央が僅かに突出する。	右回転撫で10周。天井部は右回転篦削り。 末野産	胎土：0.8以下A・B・D＋E＋H 焼成：5 色調 7.5Y 4/1灰 残存：40％ 覆土
6	小形甕 土師器	口径(10.9) 現高 8.0	丸い胴部から緩やかに外反する口縁に至るが、コの字のくずれた形態である。	口縁3回の横撫での後、外面体部下位を右下→左上へ、上位を右→左へ篦削りする。内面は指撫でする。	胎土：微A多＋E＋G＋H 焼成：3 色調：2.5YR 5/6明赤褐 残存：口縁100％胴65％ 竈左土坑
7	甕 土師器	口径 14.2 胴径 16.2	球胴から外反する口縁へ緩やかに移行する。	口縁内外横撫で後、外面胴部は右→左へ篦削りする。内面は右→左へ篦撫でする。	胎土：微A多＋E＋F＋G＋H 焼成：4 色調：5YR 6/4にぶい橙 残存：上半部100％ 竈左土坑
8	甕 土師器	口径(18.6) 胴径(20.2) 現高 16.4	胴部からコの字口縁に移るが、口唇部は斜上方に立ち上がり端部が僅かに内彎。	口縁2回の横撫での後、外面胴部は下位が左上→右下へ、上位が右→左へ篦削りする。内面は右→左へ篦撫でを行なう。	胎土：微A＋E＋F＋G＋H 焼成：4 色調：5YR 6/3にぶい橙 残存：18％ 竈
9	甕 土師器	口径 19.8	丸い胴部から大きく外反する口縁に移行する。口縁は薄いつくりである。	口縁横撫での後、外面胴部は右→左へ篦削りする。内面は右→左への篦撫で。	胎土：微A多＋C＋E＋F＋G 焼成：4 色調：5YR 7/6橙 残存：胴中位以下欠 覆土
10	甕 土師器	口径 20.0	胴部から緩やかに直立する口縁に至り、口唇にて外傾	口縁は3回の横撫での後、外面胴部は右→左の篦削り	胎土：微A多＋E＋F＋G 焼成：2 二次加熱 色調

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			する。薄手。	を行なう。内面は右→左への篦撫でする。	：5YR6/3にぶい橙　残存：口縁70%　焚口右脇
11	甕 土師器	底径　3.9	小さな底部から僅かに丸味を持ち外傾する胴部に至る。	底部篦削り。胴部左上→右下へ篦削り。内面右→左への篦撫で。	胎土：微A多＋E＋F＋G　焼成：4　色調：5YR5/3にぶい赤褐　残存：20%
12	甕 土師器	底径　4.6	平底から外傾する胴部に移行。	内外面摩滅。底部篦削り。外面胴部右下→左上へ篦削り。内面木口撫で。	胎土：微A多＋E＋F微＋G　焼成：3　二次加熱　色調：5YR6/3にぶい橙　残存：底部40%　竈
13	甕 土師器	口径　20.5 胴径　20.2 現高　19.5	最大径を胴上位に持つ胴部から、頸部の屈曲部を経て緩やかに外反し、口唇部でさらに反る。	内外面摩滅。胴部下位に肥厚し、接合痕の残る部分あり。胴部中位以下は上→下へ篦削り、上位は右→左へ篦削り。内面は篦撫で。	胎土：微A多＋C＋D＋E＋F＋G　焼成：3　二次加熱　色調：2.5YR5/6明赤褐　残存：30%　竈
14	鉢 須恵器	口径(15.8)	胴部から強く外反する短い口縁に至る。口唇は上方へ立ち上がり、端面には2本の沈線が巡る。胴部にも沈線が2本走る。	叩き成形の後、右回転木口撫で。胴部内面には無文の当て目が残る。　末野産	胎土：白色A＋E多　焼成：5　色調：N4/0灰　残存：口縁20%　覆土

第21号住居跡（第51図）

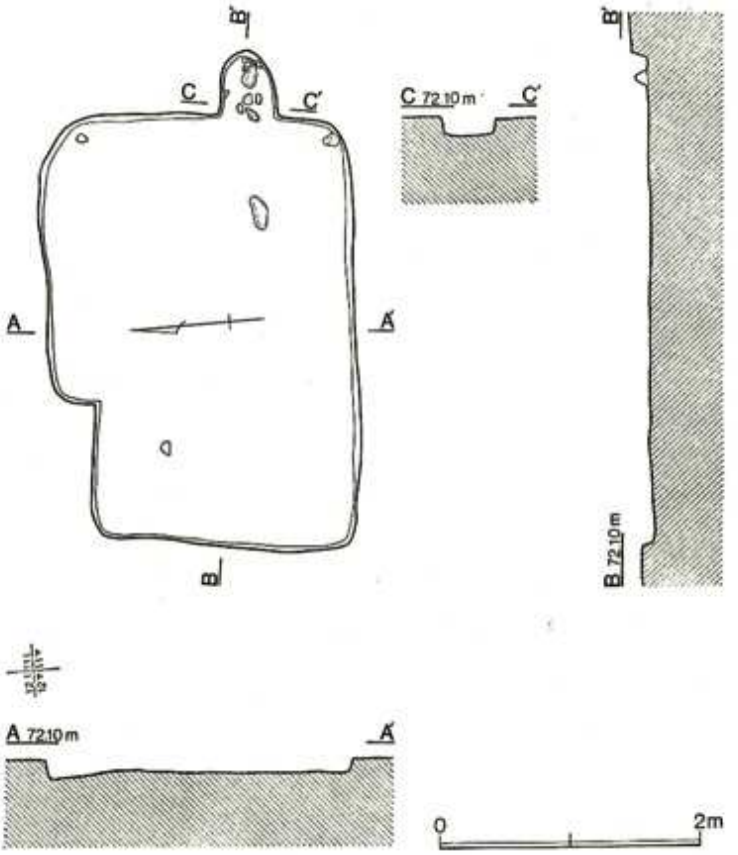
11—マ区に位置するが、北西に第3号住居跡がある。規模は3.35×2.34mであり、深さは0.15mを測る。形態は北西側に段をつくる、あたかも二軒重復する長方形を呈する。主軸はN—95°30′—Eで、床標高は71.80mを測る。

竈は短辺である東壁右寄りにつくられ、数個の石が置かれていた。形態は逆U字形を呈し、長さ0.5×幅0.45mを測る。床には柱穴および他の施設は見られない。

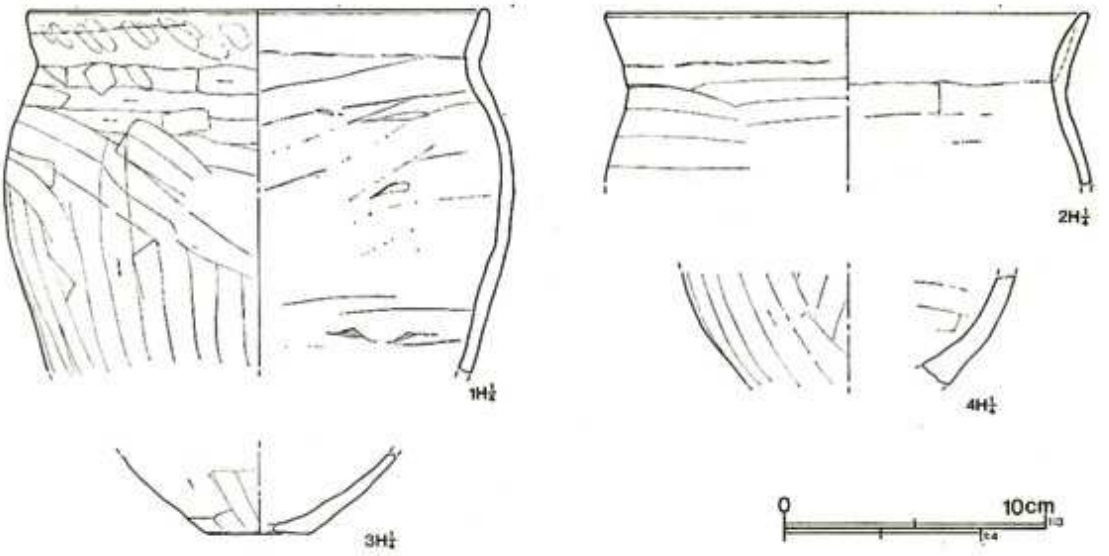
出土遺物は、竈内から土師器甕(1)～(4)が出土する。

第21号住居跡出土遺物（第52図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 土師器	口径(23.2) 胴径(25.7) 現高　18.2	最大径を胴上位に持つ甕で胴から口縁へは緩やかに移行する。口縁は肥厚し外傾して立ち上がる。厚手。	内面には接合痕が明瞭。口縁外面にも接合痕が横走する。口縁内外を横撫でした後、同下位を上→下、胴上	胎土：微A＋E＋F＋G粘性ある粘土　焼成：3　色調：5YR7/2明褐灰　残存：同類の破片があり接



第51図　第21号住居跡



第52図　第21号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				位を右下→左上・右→左へ篦削りする。内面は左下→右上への木口撫でをする。	合しない。32%と25%。竈
2	甕 土師器	口径(24.3)	やや厚目の胴部から外傾する口縁に移る。口縁中位は肥厚する。	口縁内外を横撫でした後、外面胴部を右→左へ篦削りする。内面は右→左への篦撫でする。	胎土：微A多＋E＋F＋G 焼成：2　色調：10YR8/3 残存：口縁20%　竈
3	甕 土師器	底径(5.1)	平底から外傾した後、内彎する。2と同一個体の可能性もある。	内面肌荒れ。外面上下の篦削り。	胎土：微A＋E＋F＋G 焼成：2　二次加熱　色調：7.5YR7/6橙　残存：底部25%　竈
4	甕 土師器	器厚　0.9 ～1.6	底部付近では厚い。	外面は下→上への篦削り。内面横位の篦撫で。胎土が均一となり中世の胎土に似ている。	胎土：微A＋F＋G＋H 焼成：2　二次加熱　色調：7.5YR6/6橙　残存：底部付近25%　竈

第23号住居跡（第53図）

8—7ク区に位置する。規模は3.26×3.68m、深さ0.28mを測る。形態は長方形であるが、北壁が長い。主軸はN—96°—Eで、床は72.30mである。

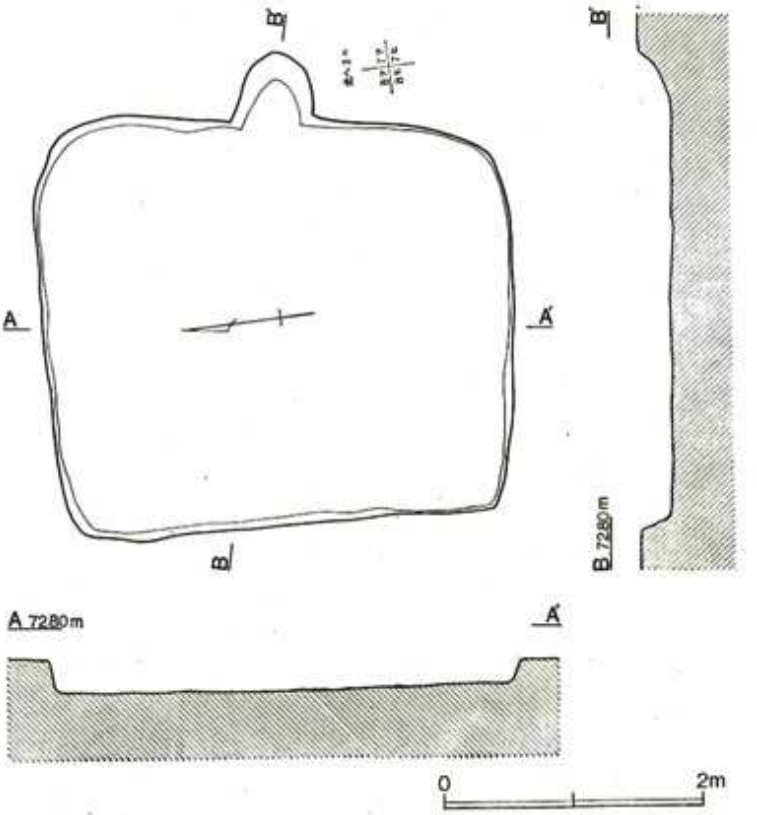
竈は長辺である東壁中央にあり、長さは0.6×幅0.6mを測る。柱穴および他の施設はない。

層位は壁際に炭化物を含むザクザクした黒褐色砂質土が堆積し、その上には同様な黒褐色が、最上層には砂利を含む茶褐色土が堆積する。

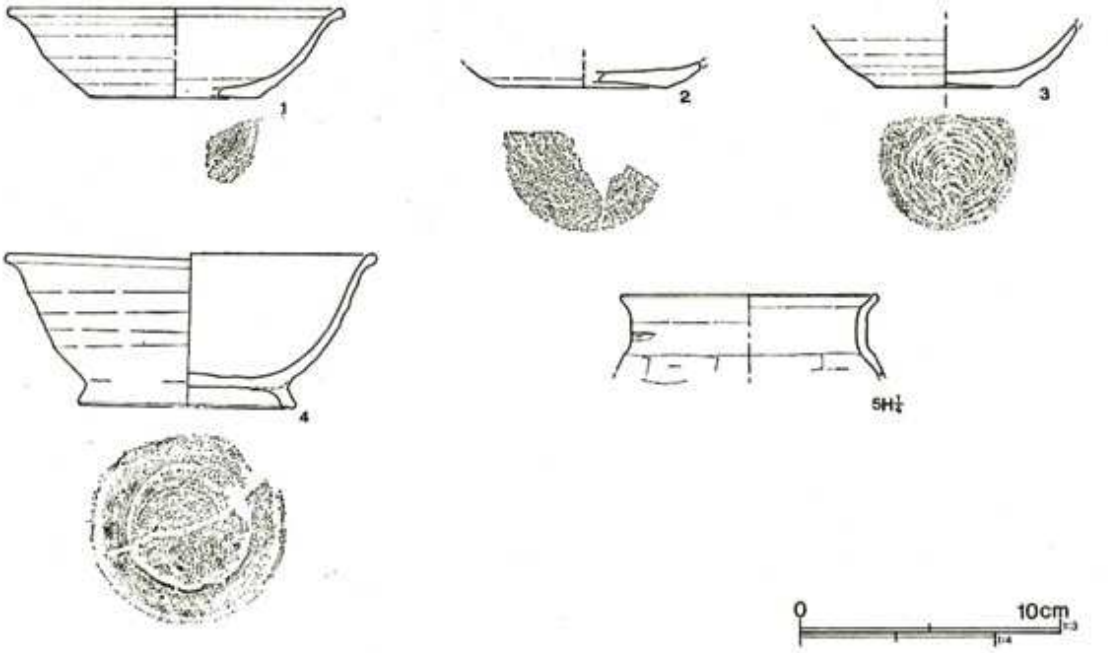
出土遺物は覆土から坏(1)・(2)・(3)、高台付椀(4)、台付甕(5)が出土する。

第23号住居跡出土遺物（第54図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(13.0) 底径(6.0) 器高　3.5	平底から外傾して立ち上がり、体部中位で屈曲してから外反する口縁に至る。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。　末野産	胎土：A＋B＋E：G　焼成：5　色調：10YR4/1褐灰　残存：12%　覆土
2	坏 須恵器	底径(6.5)	底部はやや上げ底気味。	右回転撫で。底部右回転糸切り。　末野産	胎土：A多＋B＋E多　焼成：3　色調：7.5YR5/3にぶい褐　残存：底部45%　覆土



第53図　第23号住居跡

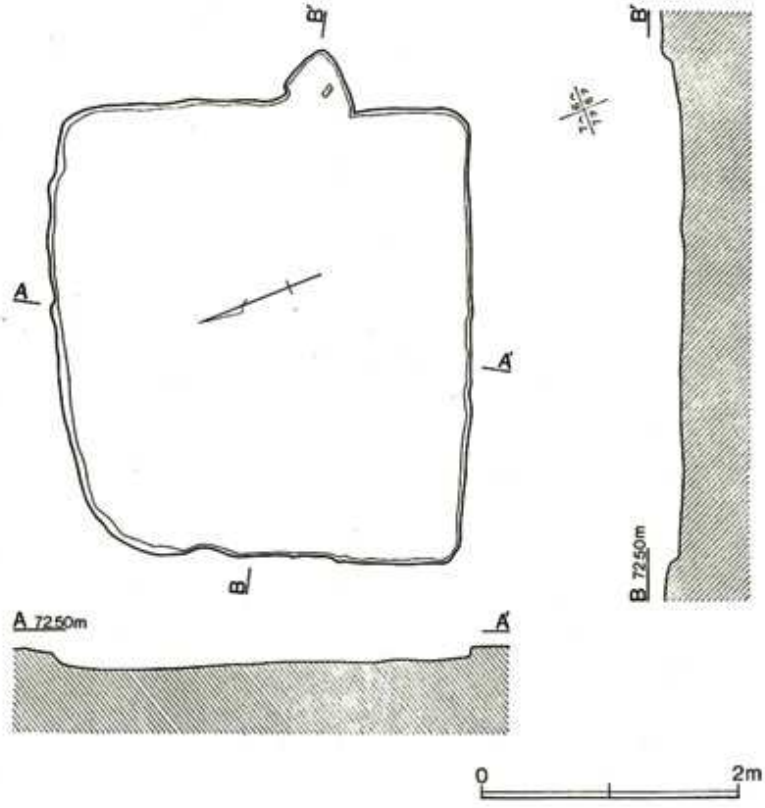


第54図　第23号住居跡出土遺物

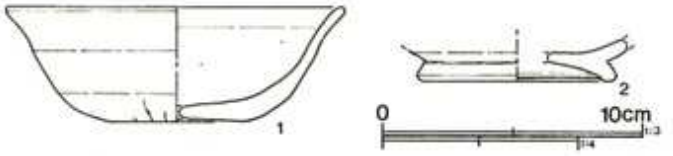
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	坏 須恵器	底径 5.5	やや上げ底の底部から指差し込み部にて外反し、丸い体部に移行。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。内面中央に鉄滓が付着する。 末野産	胎土：A微 多孔質 焼成：2 色調：10YR 6/2 灰黄褐 残存：底部70%覆土
4	高台付塊 須恵器	口径 14.3 高台径 8.4 器高 6.0	高台はハの字状に外に張り、高台端部は窪む。体部は回転撫でにより凹凸がみられる。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B・C・D＋金色H 焼成：1 色調：5YR 6/4 にぶい橙 残存：50% 胎土分析№2
5	台付甕 土師器	口径 13.0	コの字口縁で、口唇部は外傾する。	口縁2度の横撫での後、外面胴部右→左の箆削り。内面は右→左への箆撫で。	胎土：微A＋F＋G＋H 焼成：3 色調：2.5YR 5/6 明赤褐 残存：23%

第24号住居跡（第55図）

6・7—ヘ区に位置する。規模は3.5×3.32mで、深さは0.17mを測る。形態は正方形に近いが、北壁が彎曲する。主軸はN—113°—Eで、床標高は72.20mである。



第55図 第24号住居跡



第56図　第24号住居跡出土遺物

竈は東壁右寄りにあり、長さ0.5×幅0.5mを測る。床面には柱穴、その他の施設は未確認。遺物は床から坏(1)、高台付坏(2)が出土する。

第24号住居跡出土遺物（第56図）

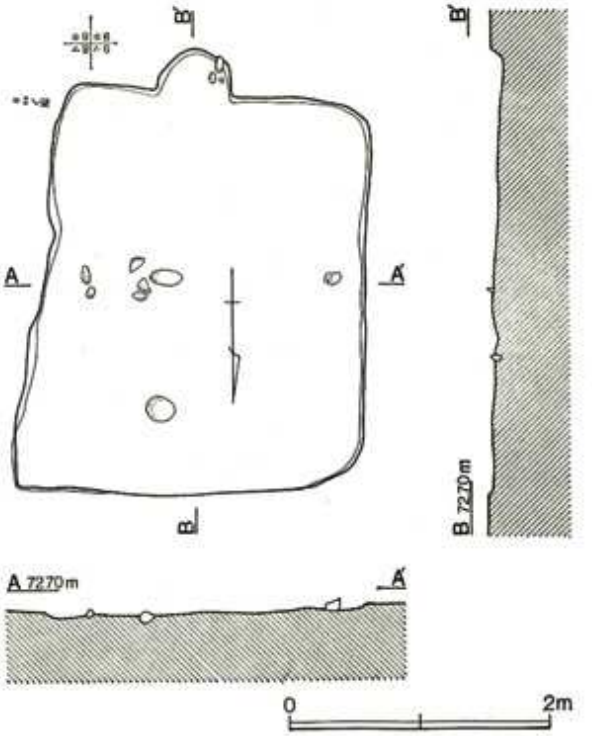
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(13.0) 器高　4.4	底部から体部にかけては緩やかに内彎して移行し、口縁にて外反する。台耕地では1点だけである。	摩滅する。轆轤成形か不明である。底部は粘土が荒れ切り離し不明。　末野産	胎土：0.7以下A＋E＋G 焼成：3　色調：N5/0 灰 残存：30%　床
2	高台付坏 須恵器	高台径 （7.7）	高台は外へ開く。	摩滅著しく整形不明。 末野産	胎土：B＋E　焼成：1 色調：10YR 6/3にぶい黄橙　残存：高台25%　床

第25号住居跡（第57図）

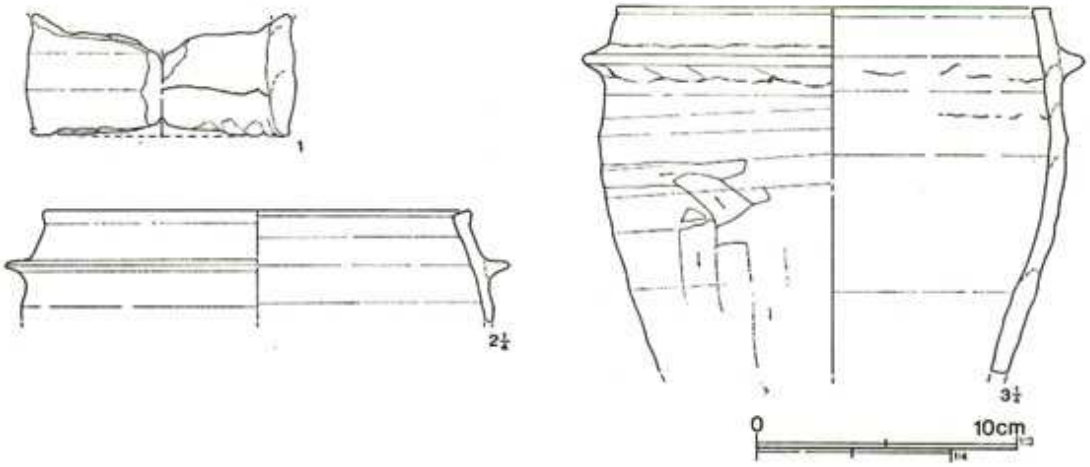
9—マ区に位置するが、北東に近接して第42号住居跡が存在する。規模は3.6×2.62mで、深さは0.05mと壁はほとんど残存しない。形態は長方形であるが、東壁は崩れて、南壁が最も狭い。主軸はN—175°30′—Wで、床標高は72.48mを測る。

竈は南壁左寄りにあり、長さ0.4m×幅0.55mの半円形を呈する。床には東壁寄りに数個の石を数えるが、柱穴をはじめ他遺構はない。

遺物は覆土より羽釜(2)・(3)が出土する。



第57図　第25号住居跡



第58図　第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土遺物（第58図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	筒状不明品 須恵器	径（10.4） 現高　4.7	中位の膨らむ筒状であるが、下端部は薄く指頭痕が付く。底があるのかどうか不明確である。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。　末野産	胎土：B＋C＋E多＋F 焼成：4　色調：10YR7/2にぶい黄橙　残存：25% 覆土
2	羽釜 須恵器	口径(21.8) 鍔径(25.6)	鍔部は水平に延び、口縁は内傾する。口唇部は外方に肥厚し、端部は内傾する平坦をつくる。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。一部還元。　末野産	胎土：B＋C＋D＋E多＋H　焼成：3　二次加熱 色調：5YR6/6橙　残存：口縁30%　覆土
3	羽釜 須恵器	口径(22.0) 鍔径(25.4) 現高　18.4	胴は外傾して開いた後、緩やかに最大径を経て内傾し、水平に張り出す鍔部から口縁に至る。口唇部は僅かに肥厚し、水平になる。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。鍔部を接合してから体部中位を回転篦削りする。その後に体部下位を上→下へ篦削りする。末野産	胎土：0.3以下B・C＋E多　焼成：3　二次加熱で変形。色調：10YR7/2にぶい黄橙　残存：25%　覆土

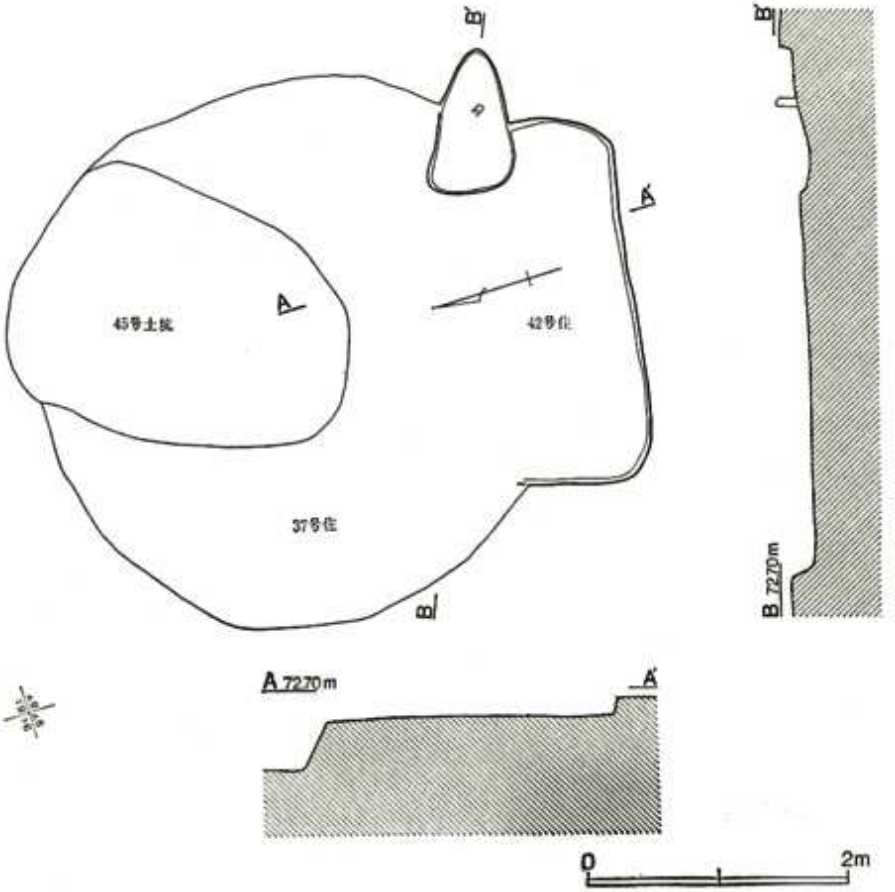
第42号住居跡（第59図）

8—マ区に位置し、縄文時代の第37号住居跡と第45号土坑を切るため、北壁が不明瞭である。規模は2.82×2.25＋αmで、深さは0.14mを測る。形態は長方形と考えるが不明確である。主軸はN—104°—Eで床標高は、72.50mである。

竈は東壁にあり、長さ1.1m、幅0.65mで、中央に石の支脚が立つ。床には柱穴や他の施設はない。出土遺物は小片の土器だけである。

第43号住居跡（第60図）

4—メ区に位置し、第48号住居跡に近接する。規模は4.52×3.8m、深さは0.19mを測る。形態は長方形であり、主軸はN—6°30′—Eで、床標高は71.38mである。



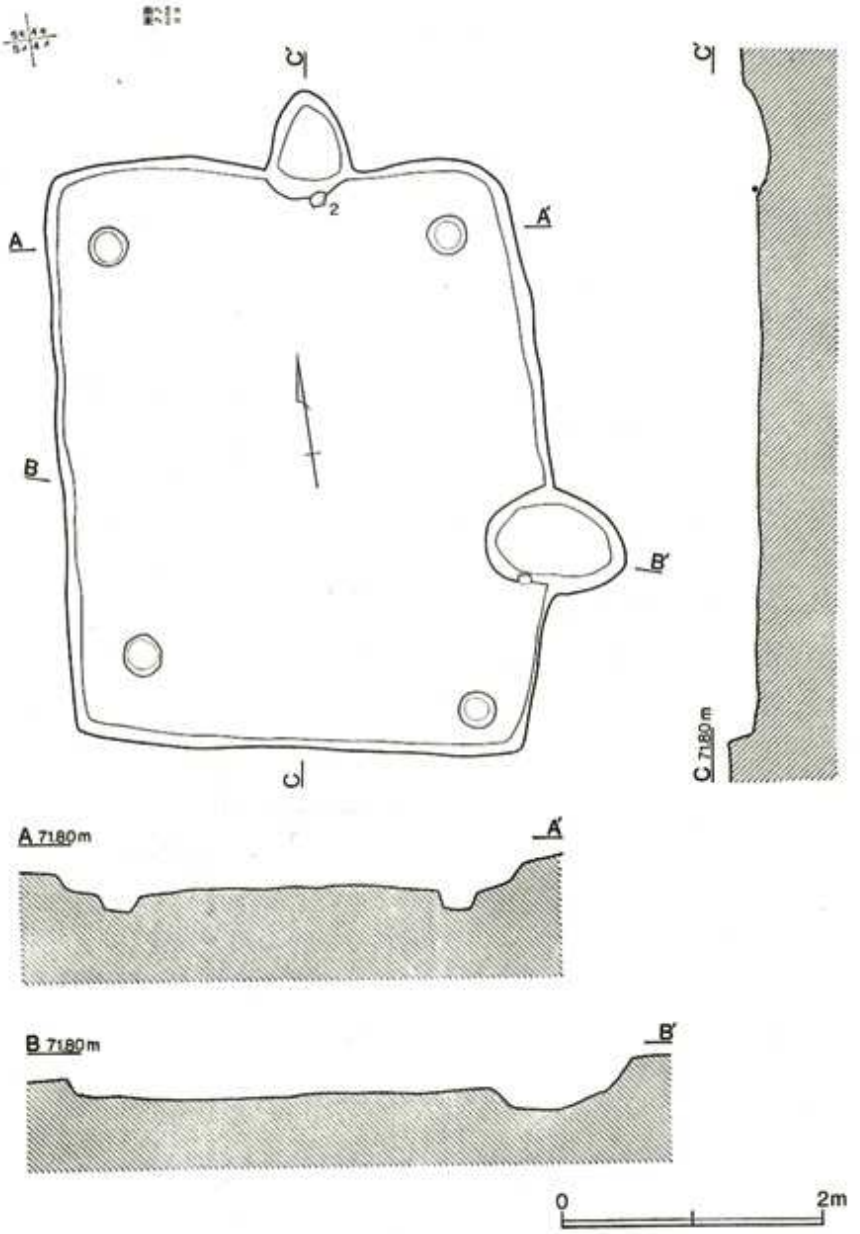
第59図　第42号住居跡

竈は北壁ほぼ中央と東壁右寄りの２ヶ所あるが、同時使用か前後関係があるものかは不明である。北竈は長さ0.82m×幅0.7mの脹らむ三角状になる。東竈は長さ1.1m×幅0.8mの楕円形となり、両方とも擂鉢状に窪み、煙道は急傾斜で立ち上がる。柱は各隅に存在しており、壁から0.2～0.5m離れるだけで中央がより広く使われている。

遺物は北竈焚口から坏(2)と土師器甕(7)が、北か東か不明であるが竈内として坏(1)、土師器甕(6)が出土する。覆土からは坏(3)・(4)、坏蓋(5)、鉄鏃(9)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓170gと炉壁片・羽口片が出土する。

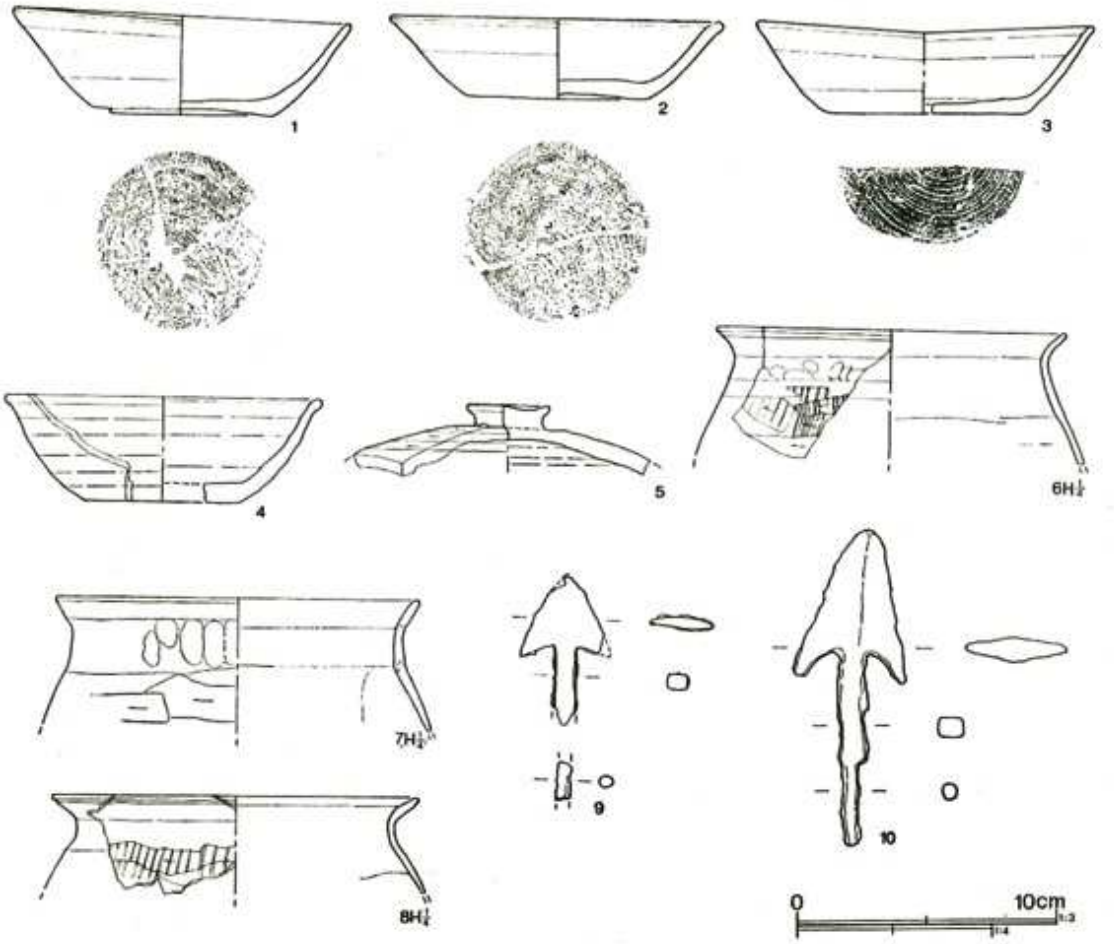
第43号住居跡出土遺物（第61図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 13.0 底径 6.9 器高 4.0	僅かな上げ底からほぼ直線的に外傾して立ち上がる。底は糸切り失敗の段差がある。	右回転撫で５周。底部右回転まわし切り。　末野産	胎土：C＋D＋E多　焼成：２　二次加熱　色調：2.5Y 7/2 明赤灰　残存：70%　竈



第60図　第43号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	坏 須恵器	口径 12.9 底径 6.9 器高 3.2	僅かな上げ底から直線的な体部に移るが、口唇にて内面が外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし切り。	末野産 胎土：0.8以下B・C＋D＋E＋H　焼成：3　色調：2.5Y7/2灰黄　残存：60％ 北竈
3	坏	口径(13.0)	平底から僅かに膨らむ体部	右回転撫で5周。底部右回	胎土：0.3以下A・C夾雑



第61図　第43号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器	底径(7.5) 器高 3.5	を経て口縁に至る。	転糸切り。　南比企産	物少ない。 焼成：5 色調：N4/0 灰 残存：45% 覆土
4	坏 須恵器	口径(12.2) 底径(6.0) 器高 4.0	平底から内彎して口縁に至り、口唇で外反する。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。　末野産	胎土：0.6以下C＋D＋E 焼成：3 色調：7.5Y6/1 灰 残存：20%　覆土
5	蓋 須恵器	つまみ径 (3.2)	緩やかな彎曲を描く天井部中央の僅かな平坦部に、つまみをつける。	右回転撫で後、天井部を3～4回転篦削り。つまみ付着後回転撫で。　末野産	胎土：0.5以下C＋D＋E 多 焼成：5/1 色調：5PB5/1青灰 残存：20%覆土
6	甕 土師器	口径(17.8)	内傾する胴部から、丸く外反して外面に窪みを持つ口唇に移行する。薄手。	口縁2段の横撫で後、胴部外面右→左へ篦削り。飛び鉋となる。内面篦撫で。	胎土：微A少＋E＋H 焼成：4 色調：7.5YR6/4 にぶい橙 残存：15%　竈

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕 土師器	口径(18.3)	コの字口縁で、内傾する胴部から僅かに内傾する口縁を経て、外傾する口唇へ。	口縁横撫での後、外面胴部を右→左へ篦削り。内面は横位の篦撫で。	胎土：微A多＋G　焼成：2　色調：5YR5/8明赤褐　残存：30%　北竈
8	甕 土師器	口径(18.5)	6と類似するが、口縁は大きく外反し、口唇外面に沈線を巡らす。	口縁横撫で後、外面胴部を右→左へ篦削り。飛び鉋となる。内面篦撫で。	胎土：微A＋微F＋H　焼成：3　色調：7.5YR6/4にぶい橙　残存：15%　竈
9	鉄鏃	刃長　3.2 刃幅(3.5)	短頸腹抉両丸造正三角形式で頸部は断面長方形である。		重量：12.26g　覆土
10	鉄鏃	全長　12.0 鏃身　9.0 刃長　5.5 刃幅　4.3	短頸腹抉関篦被鏑造長三角形式の大形品である。篦被部の断面は長方形で、茎は断面円形である。		重量：40.18g

第44号住居跡（第62図）

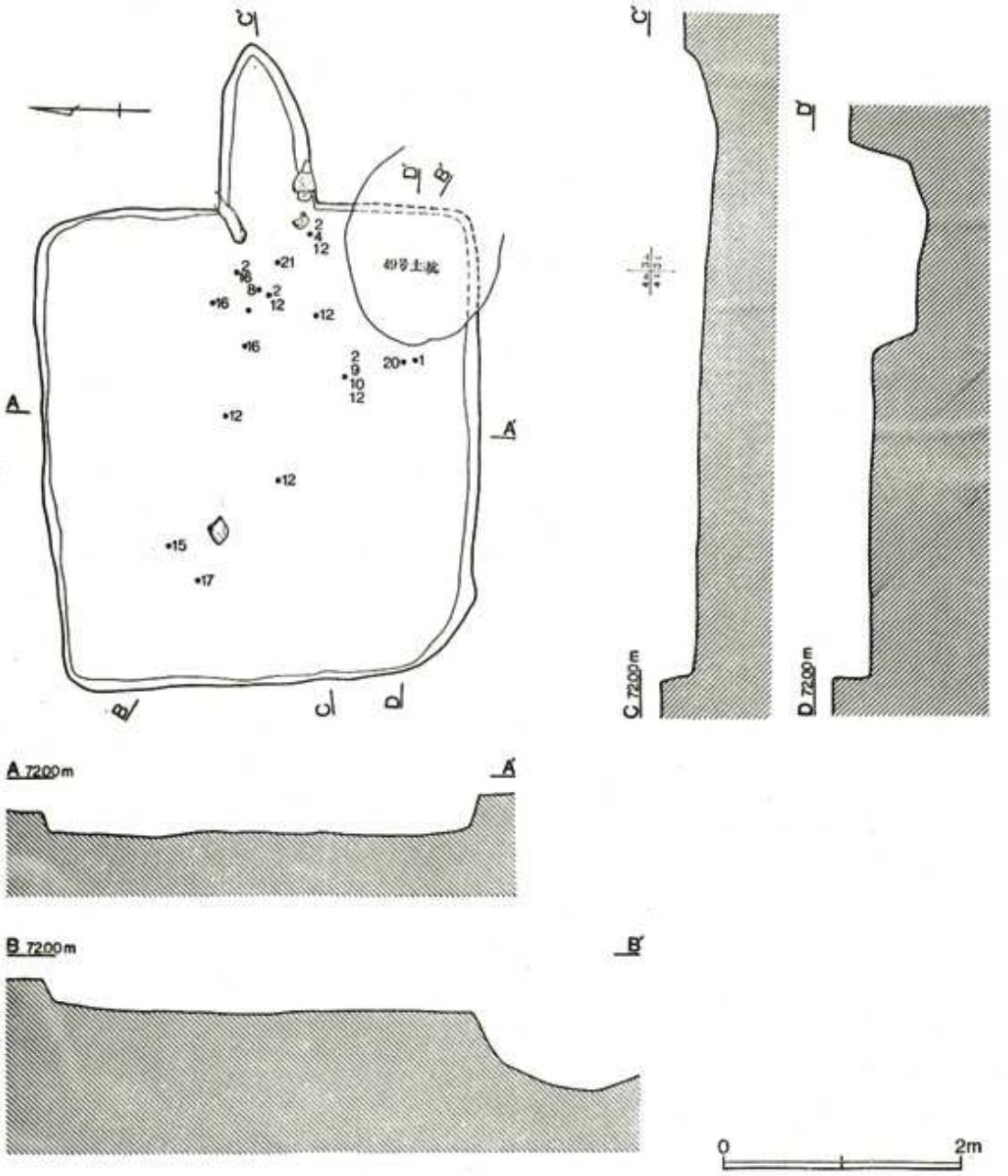
4—ム区に位置し、第49号土坑を切る。規模は4.0×3.72mで、深さは0.32mを測る。形態はやや長方形で、南西隅が丸い。主軸はN—87°30′—Eで、床標高は71.47mである。

竈は東壁中央にあり、長さ1.4m×幅0.8mの大形竈で外に張り出し、煙道は緩やかに立ち上がる。床は南東隅が第49号土坑と切り合うため不明瞭である。柱穴および他の施設はない。

遺物は竈から坏(3)が、前方の床から坏(2)・(4)、鉢(10)・(12)、壺(8)・(16)の他、広い範囲で大甕(21)が出土するが特に(12)は広く散乱する。東壁寄りから坏(1)、鉄鋏(20)が、北西寄りから甕(15)、灰釉浄瓶(17)が出土する。他に製鉄関連遺物として鉄滓が14.31kgと炉壁片、羽口片(5)が出土する。住居跡では当遺跡最大の鉄滓出土量があるが、床面には製鉄遺構はない。

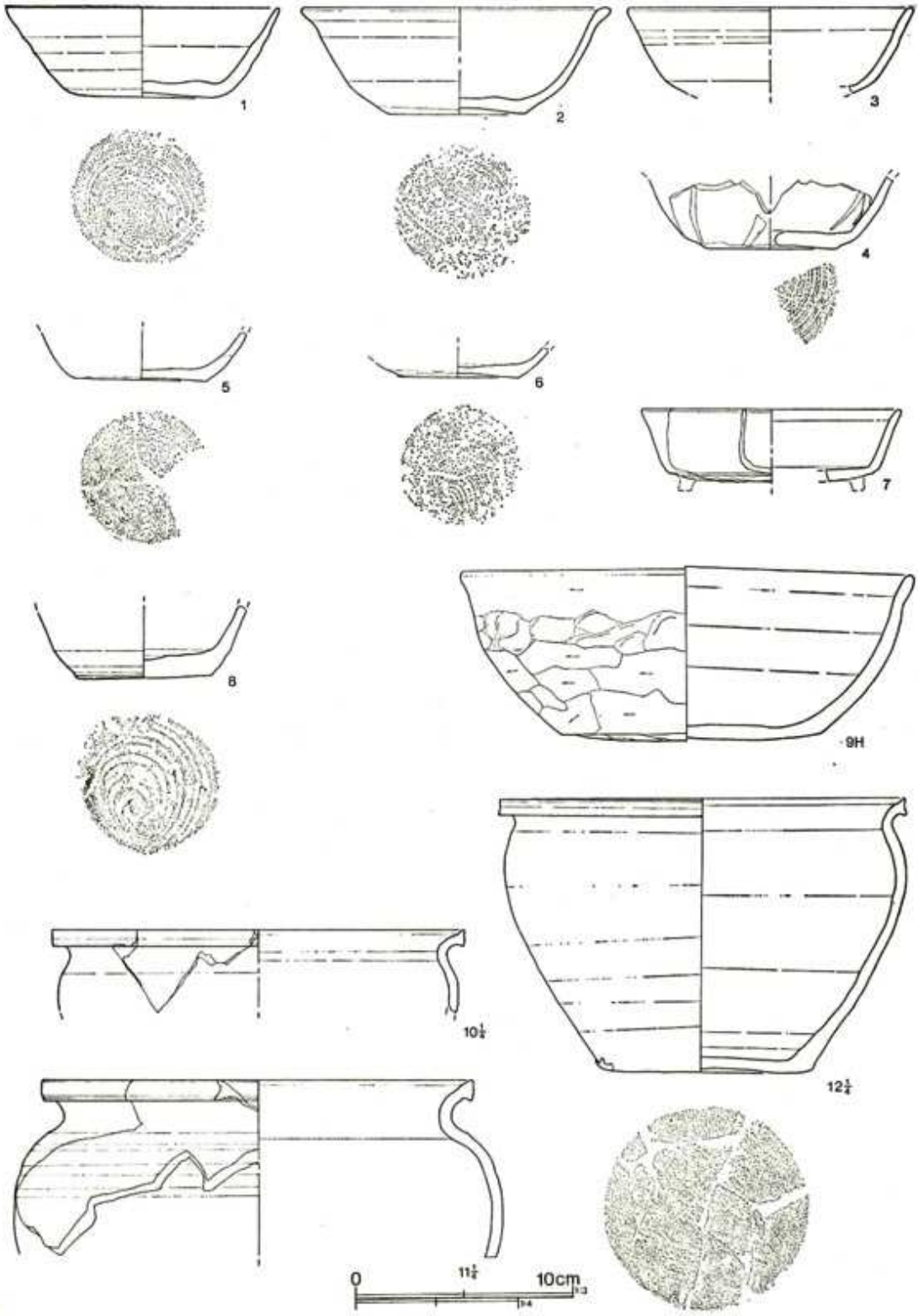
第44号住居跡出土遺物（第63～65図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径　12.6 底径　5.9 器高　4.1	僅かな上げ底から直線的に開く口縁に至る。	底部周辺には粘土接合痕らしきものあり。右回転撫で6周。底部右回転離し切り。　末野産	胎土：B＋C＋D＋E　焼成：3　色調：5Y7/1灰白　残存：70%　床
2	坏 須恵器	口径(14.2) 底径　6.1 器高　4.9	上げ底から指差し入れ部で外反し、体部下位で屈曲して直線的に開き、反る口縁に至る。口縁内側に稜。	右回転撫で。底部右回転離し切り。　末野産	胎土：0.5以下B＋C＋E　焼成：5　色調：N5/0灰　残存：50%　床
3	坏 須恵器	口径(13.2)	外傾する体部。	右回転撫で。体部表面に粘土紐接合痕あり。　南比企産	粘土：A＋I(1cm=3)　焼成：4　色調：10YR7/2にぶい黄橙　残存：30%　竈



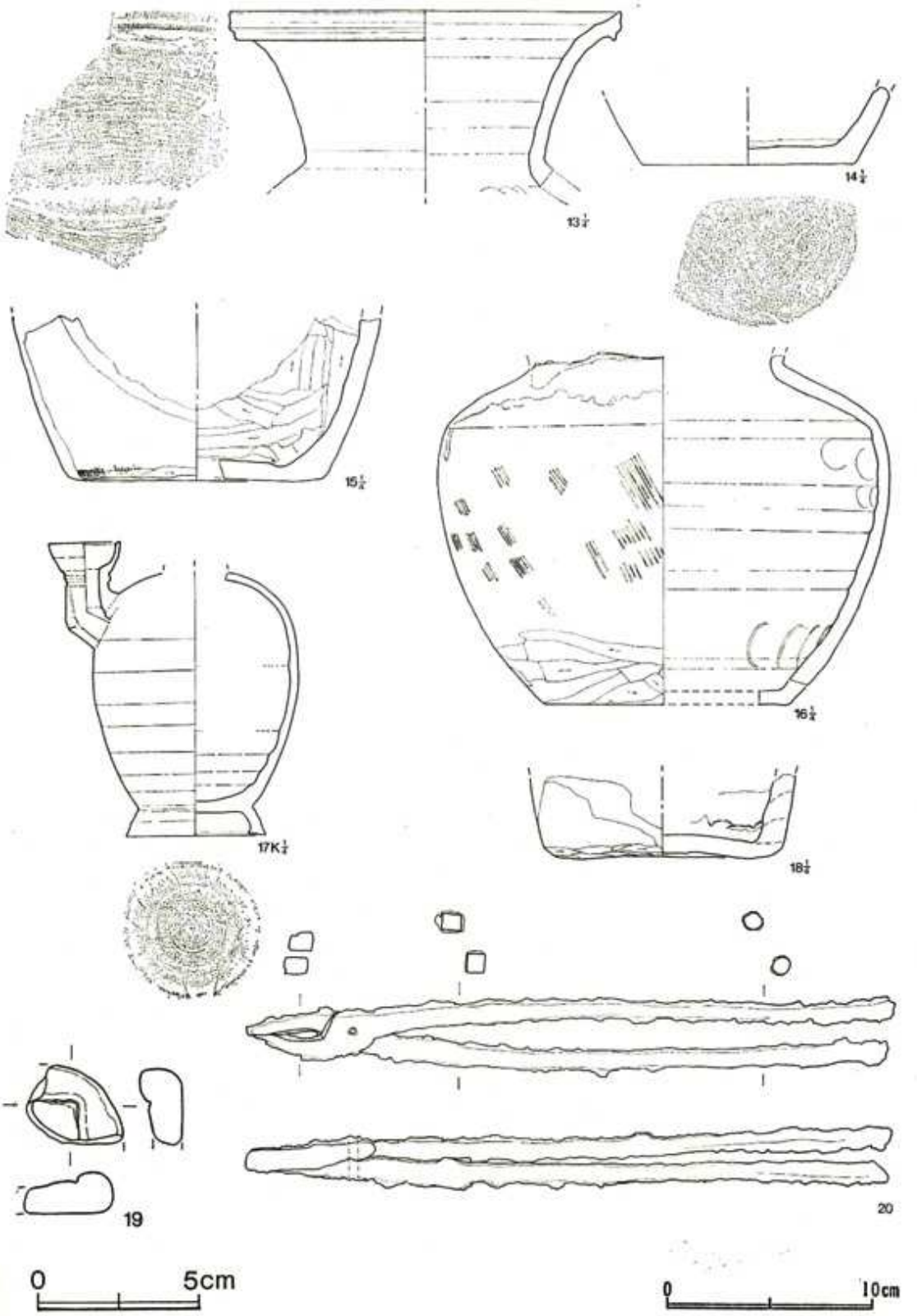
第62図　第44号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	坏 須恵器	底径（6.0）	上げ底から指差し込み部で外反し、丸い体部へ移行。	右回転撫で。右回転糸切り。内外面に2本ずつ火襷が見られるが連続する。 南比企産	胎土：0.2以下A＋I 焼成：5 色調：2.5Y5/1黄灰 残存：20%　床



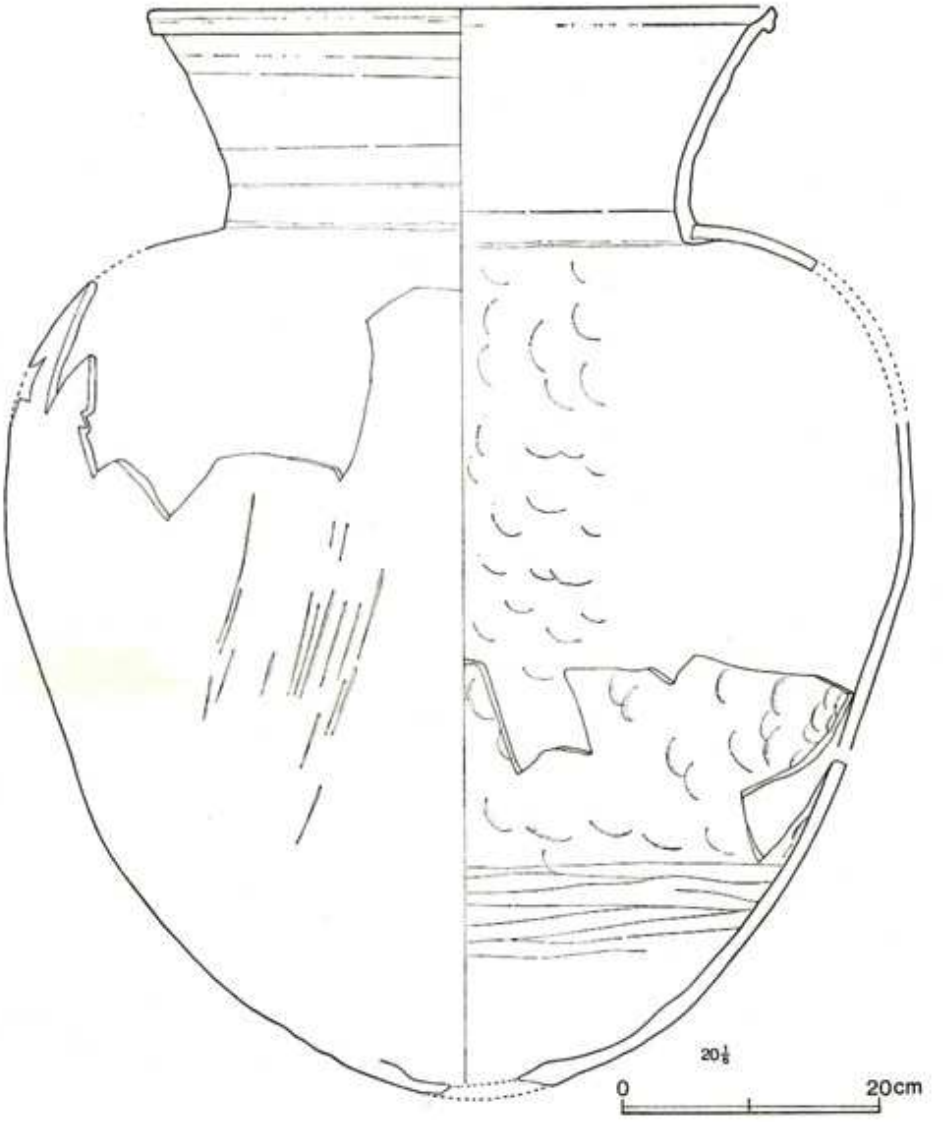
第63図　第44号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	坏 須恵器	底径(6.0)	平底から丸味を持つ体部へ移行。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。　末野産？	胎土：0.9以下A＋B＋C＋E＋G　焼成：2　色調：10YR 7/3にぶい黄橙　残存：底部80%　床
6	坏 須恵器	底径　5.5	やや上げ底から、指差し入れ部で外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。　末野産	胎土：0.1以下A＋E　焼成：3　色調：2.5Y7/2灰黄　残存：底部100%　床
7	高台付坏	現高　3.3	腰にて屈曲する。高台ははがれる。	右回転撫で。底部篦削り後高台接合し、右回転撫で。精緻なつくり。　南比企産	胎土：微A＋I（2㎝＝1）焼成：5　色調：10YR4/1褐灰　残存：15%　覆土
8	壺？ 須恵器	底径　6.2	平底から指差し入れ部を経て外傾する体部に至る。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。糸目は2㎝＝6と荒い。内面中央は指撫でされる。　末野産	胎土：0.5以下B・C・D多　焼成：5　色調：10Y5/1灰　器肉はセピア色　残存：底部100%　床
9	鉢 土師器	口径　20.9 底径　11.9 器高　8.0	僅かに張り出す底部から、内彎して立ち上がる体部を経て、緩く外反する。	口縁右回りの横撫で後、体部下位を右→左へ篦削りする。底部も同様篦削り。	胎土：微A少　夾雑物少ない。焼成：5　色調：2.5YR 5/8明赤褐　残存：75%　床27点覆土13点
10	鉢 須恵器	口径(24.9)	頸部で強く外反し、口唇端部に浅い沈線を2本持つ。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。　末野産	胎土：0.7以下B・C　焼成：5　色調：N4/0灰　残存：口縁10%　床・覆土
11	鉢 須恵器	口径(26.1) 胴径(29.5)	丸い胴部から強く外反して口縁に至る。口唇は下方に延び端部下位に沈線を入る。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。　末野産	胎土：0.4以下C・D＋E　焼成：5　色調：10YR5/1褐灰　残存：20%　覆土
12	鉢 須恵器	口径　24.6 底径　12.5 器高　16.5	上げ底から僅かに内彎しながら上位に至り、大きく内彎して頸部を経て、強く外反する口縁に至る。口唇端部は上下方に突き出す。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。内面も同様全面右回転撫で。底部外面と口縁内面に火襷あり。表面に鉄分付着。　末野産	胎土：0.8以下B・C・D＋E　焼成：5　色調：N3/0暗灰　残存：90%　床・覆土
13	甕 須恵器	口径(24.2) 口縁部高 9.2	胴部から頸部へ強く屈曲して、大きく外反する口縁に至る。口唇は上方と下方に延び、端面中央に一つの突帯を持つ。	粘土帯積み上げ平行叩き成形。その後右回転撫で。表面に細かな鉄分付着する。　末野産	胎土：0.5以下B・C多＋E少　焼成：5　色調：7.5Y 4/1灰　残存：口縁20%　床
14	甕 須恵器	底径(13.0)	平底から直線的に開く胴部へ移行。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。内面中央手のひらによる押圧。周辺を右回転撫で。底部外面一方向篦削	胎土：0.6以下B・C＋E　焼成：5　色調：10YR4/1褐灰　残存：底部25%　覆土



第64図　第44号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				り。　末野産	
15	甕 須恵器	底径(15.4)	平底から内彎気味の体部に移行。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。内面は不定方向の顕著な指撫で。外面底部周辺は、左→右への手持ち篦削り。その後底部周辺を平行叩き。　末野産	胎土：0.7以下B・C・E 多　焼成：5　色調：N4/0 灰　残存：底部25%　床
16	壺 須恵器	胴径　28.0 底径　15.0 現高　21.4	広い平底から丸い胴部を経て肩部に至り、緩やかに屈曲し内傾する。頸部で強く屈曲する。肩には自然釉が掛かる。肩の一部にくっつきがあるが、丁寧に擦られている。底部周辺摩滅。	粘土帯積み上げ後、下→上へ平行叩き。その後右回転撫で。胴下位は右→左を主体とする手持ち篦削り。内面は無文の当て目が残るが、特に下位に明瞭。 南比企産？	胎土：0.4以下B＋C＋E 焼成：5　色調：7.5Y6/1 灰　残存：胴75%口縁底部 欠　床・覆土
17	浄瓶 灰釉	胴径　12.7 高台径 8.6 現高　16.2	高台はハの字に広がり、端部は窪む。高台から強く屈曲し、倒卵形の胴部を経て窄まる。肩には受口が付くが、基部は面取りされる。受部の下には突帯が巡る。肩には淡黄緑色釉が掛かる。	右回転撫で。胴中位以下は右回転の篦削りが施される。その後高台を張りつけた後、丁寧な回転撫でを行なう。肩の受口部は、垂直部を回転成形した後、下端に粘土を斜めに付着し、肩に接合した後、体部に向って面取りする。　猿投産	胎土：微A微　夾雑物ほとんどない。 焼成：5 色調：2.5Y7/3浅黄～2.5YR5/8明赤褐 残存：胴部80%口縁欠 床
18	壺 須恵器	底径(14.8)	僅かな上げ底から外傾する体部に移る。	粘土帯積み上げ。外面は底部が不定方向削りを施した後、底部周辺を左→右への手持ち篦削りを行なう。内面は粘土接合痕が明瞭。胴部との屈曲部には、強い指頭撫でが巡る。　末野産	胎土：1.4以下B・C＋E 焼成：4 色調：2.5Y6/2灰黄 残存：底部25%　覆土
19	印章鋳型 土製品	印面厚 1.0 端部厚 1.3	摩滅が著しい。印面部は文字が落ち、周辺部に細い溝が巡る。印面部は還元する。平面形態は外形が不正円形の可能性がある。	板状にした砂質粘土型である。	胎土：微A　焼成：2　色調：10YR7/3にぶい黄橙 残存：25%　覆土
20	鉄鉄	全長　30.6	要部は幅1.8cmで、要部から先端は5cmを測る。口部は一方が直線的で長く、他方は彎曲し、断面横長となりつかみ易くなる。柄は断面方形から長方形となるが、端部では円形となる。		重量：184.94g　床



第65図　第44号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
21	大甕 須恵器	口径 46.6 頸部径38.2 胴径 71.0 器高 88.5	底部はやや突出する丸底で、胴部は最大径を肩部に持つ。肩部は水平近くになり屈折して頸部に至る。口縁部は外傾し口唇部で肥厚する。口唇部は上方と下方に延び、端面に窪みが巡	粘土帯積み上げ叩き成形であるが、叩き目は不明。胴下位に第1・2段目の接合部があり、内面は接合後横位に撫でつける。胴部外面は叩き目痕は残らないが、内面は無文当て目が見られ	胎土：0.5以下A＋B＋C＋D＋E 焼成：2 色調：5YR 5/6 明赤褐 残存：胴部中位以下80% 口縁80%　胴上位欠 床

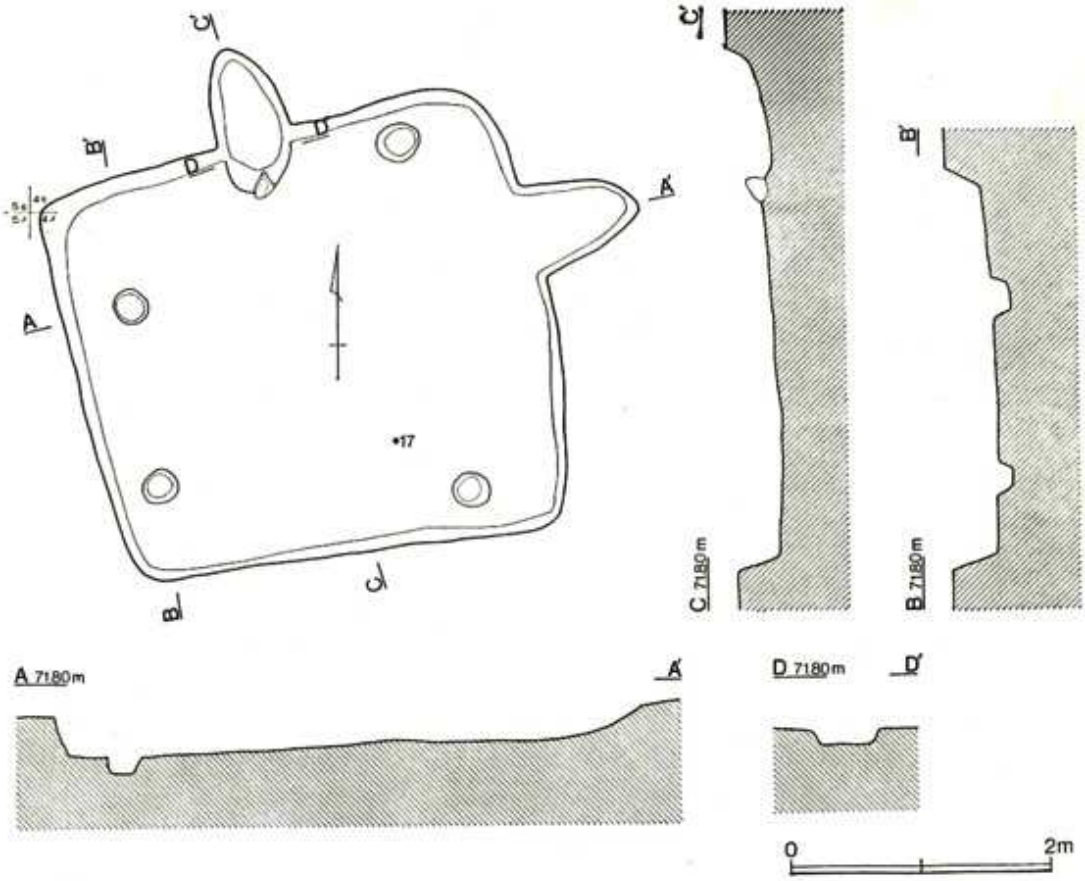
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			る。底部が内から穿孔されたように割れる。	る。口縁は体部に乗せ、粘土を体部に巻き込んでいる。 末野産	

第48号住居跡（第66図）

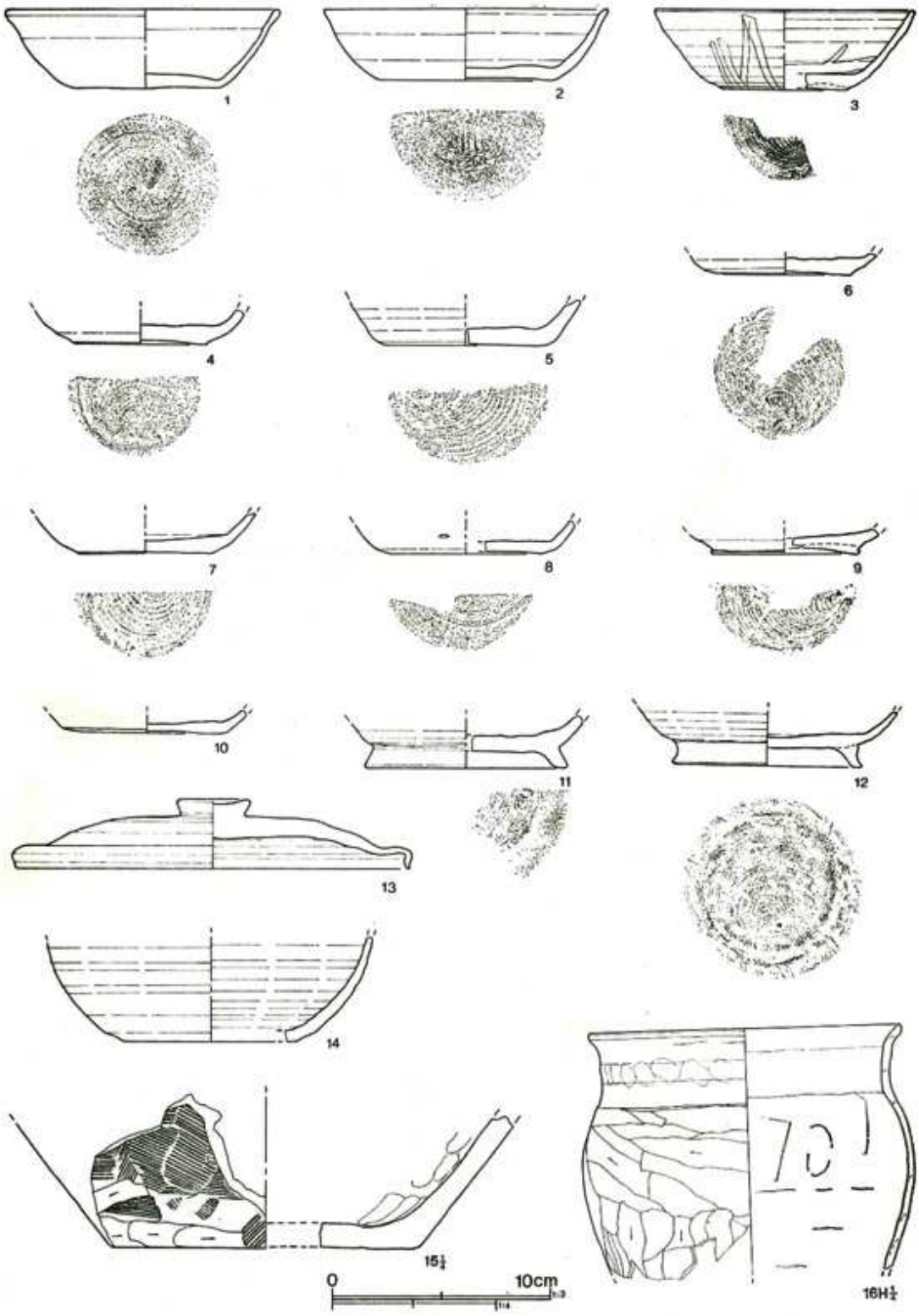
4—メ・モ区に位置するが、第49号住居跡に西壁を切られる。規模は3.73×3.34ｍで、深さ0.35ｍを測る。形態は東壁と南壁が、相対する壁よりも長いため不整四角形となる。主軸はN—76°—E床標高は71.23ｍを測る。

竈は東壁左寄りと北壁中央の２つがある。東竈は長さ0.9×幅0.7ｍ、北竈は長さ1.18×幅0.55ｍを測るが、北竈は焚口が窪む。柱穴は４本確認でき、深さは0.1ｍであるが西壁寄りが狭い。

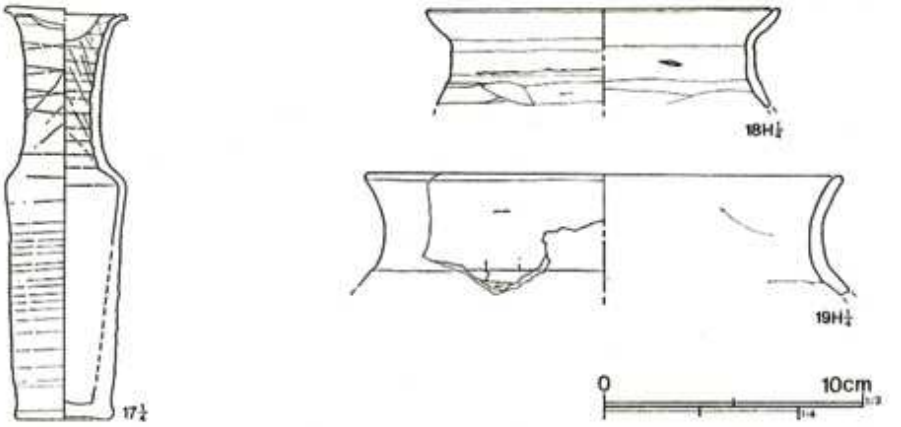
遺物は南東より長頸瓶⒄が、床面から坏⑴・⑵、高台付埦⒁、甕⒂、土師器甕⒃・⒆、床下から土師器甕⒅が出土する。製鉄関連遺物は鉄滓2.90kgと羽口片が４点出土する。



第66図　第48号住居跡



第67図　第48号住居跡出土遺物(1)



第68図　第48号住居跡出土遺物(2)

第48号住居跡出土遺物（第67・68図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(12.6) 底径 7.8 器高 3.6	平底からやや内彎する体部を経て、玉縁状の口唇に至る。	右回転撫で。底部全面右回転篦削り。 南比企産	胎土：B＋C＋I（1㎜＝3） 焼成：5　色調：5Y 5/1 灰　残存：30%　床
2	坏 須恵器	口径(13.1) 底径(8.1) 器高 3.3	平底から丸い体部を経て、僅かに外反する口縁に至る。	右回転撫で。底部回転糸切り後、全面右回転篦削り。外面に火襷。 南比企産	胎土：B＋C＋I（1㎜＝5） 焼成：5　色調：10GY5/1 緑灰　残存：40%　床
3	坏 須恵器	口径(12.0) 底径(5.8) 器高 3.7	平底から外傾する体部に至る。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土：B＋C＋I（1㎜＝8） 焼成：5　色調：5Y 5/1 灰　残存：25%　覆土
4	坏 須恵器	底径 6.2	上げ底から、指差し入れ部で外反して立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：A＋B＋C＋D＋E 焼成：2　色調：7.5Y7/1 灰白　残存：底60%　覆土
5	坏 須恵器	底径(7.6)	平底から直線的に外傾する体部へ移行。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：微A多＋B＋C＋D＋E　焼成：3　色調：2.5Y 6/2灰黄　残存：底40%　覆土
6	坏 須恵器	底部 6.2	平底から、指差し込み部にて外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。底部に火襷あり。 末野産	胎土：A＋B＋C＋D＋E 焼成：5　色調：7.5YR 5/1褐灰　残存：底部80%　覆土
7	坏	底径 6.3	平底から指差し込み部を経	右回転撫で。底部右回転糸	胎土：0.9以下B＋C少

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器		て内彎する体部に至る。	切り。 南比企産	焼成：5 色調：10YR4/2 灰黄褐 残存：50% 覆土
8	坏 須恵器	底径（7.0）	平底から腰の張る体部を経て立ち上がる。表に粒痕が見られる。	右回転撫で。底部右回転篦削り。 南比企産	胎土：微A＋B＋E＋I（1㎠＝5） 焼成：5 色調：10Y 5/1 灰 残存：40% 覆土
9	坏 須恵器	底径（6.8）	上げ底から指差し入れ部を経て立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。多孔質。 末野産	胎土：B＋C＋D＋E 焼成：3 色調：5Y 5/1 灰 残存：底部50% 覆土
10	坏 須恵器	底径 7.6	平底から外傾する体部に移行。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.5以下A＋B＋C＋D＋E 色調：5Y 7/2 灰白 残存：底80% 覆土
11	高台付 椀 須恵器	高台径 （9.4）	直線的に開く高台で、高台から強く屈曲して体部に至る。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台付着後、内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下A＋B＋H 焼成：5 色調：5Y 5/1 灰 残存：高台25% 覆土
12	高台付 椀 須恵器	高台径 8.8	高台は強く外反して張り出す。体部は薄いつくり。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。高台付着後、内外面右回転撫で。末野産	胎土：0.6以下B＋C＋D＋E 色調：10YR 7/3 にぶい黄橙 残存：100% 床
13	蓋 須恵器	口径 18.0 つまみ径 3.4 器高 3.2	大形の蓋である。口縁は垂直に垂れ先端が尖り、口唇端部は内傾する。天井部は広く、中窪みのつまみが付く。天井部は特に厚い。	右回転撫で7周。天井部右回転篦削り5周。つまみ付着後右回転撫で 。 末野産	胎土：A・B・C多＋D＋E 焼成：5 色調：N5/0 灰 残存：70% 覆土
14	椀 須恵器	底径（8.1）	平底から指差し込み部で外反した後、内彎する体部へ移行する。	右回転撫で。底部右回転篦削り。表の一部が焼成により黒色光沢化。 南比企産	胎土：微A少＋I（1㎠＝4） 焼成：5 色調：10Y 5/1 灰 残存：25% 覆土
15	甕 須恵器	底径（18.0）	平底から、直線的に外傾する胴部に至る。	粘土帯積み上げ平行叩き成形。底部周辺左→右への削り。底部も不定方向の削り。内面は下→上への指撫で。	胎土：0.3以下B＋C＋F 焼成：5 色調：7.5Y 4/1 灰 残存：底部20% 床
16	甕 土師器	口径 19.0 胴径 21.2 現高 24.6	最大径を上位に持つ胴部からコの字形口縁に至る。口唇部は外傾する。	粘土帯積み上げ。粘土幅2～2.5㎝。口縁は横撫でを2段に施した後、胴部上半を右→左へ篦削りし、次に下半を上→下へ篦削りする。内面は右→左へ篦撫で。	胎土：微A＋B＋C＋E＋G＋H 焼成：3 色調：5YR 6/4 にぶい橙 残存：胴下位欠 床

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	長頸瓶 須恵器	口径(6.3) 胴径 6.1 底径 5.0 器高 20.5	底部から僅かに外傾する胴部に移り、肩部にて内傾し、さらに外反する頸部を経て、大きく反り返る薄い口唇部に至る。口唇は成形の際に変形する。	頸部にて接合する。体部右回転撫で14周。口縁接合後右回転撫で13周。その後口縁を右回転で絞り込み、さらに左回転で撫でる。口縁内外には絞り目が見られる。 東海産?	胎土：0.9以下A多 焼成：5 色調：7.5Y5/1灰 残存：口縁一部欠 床
18	甕 土師器	口径(18.0)	コの字口縁。口唇はやや肥厚する。	口縁部に粘土接合痕あり。口縁横撫で後、胴部を右→左へ篦削り。内面は右→左への篦撫で。	胎土：微A＋B＋E＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR6/6橙 残存：口縁20% 床下
19	甕 土師器	口径(24.4)	口縁は大きく外反する。厚手。	粘土帯積上げ後、口縁左回りの横撫で。続いて胴部を右→左へ篦削り。	胎土：微A＋B＋F＋G 焼成：3 色調：5YR6/4にぶい橙 残存：15% 床

第49号住居跡（第69図）

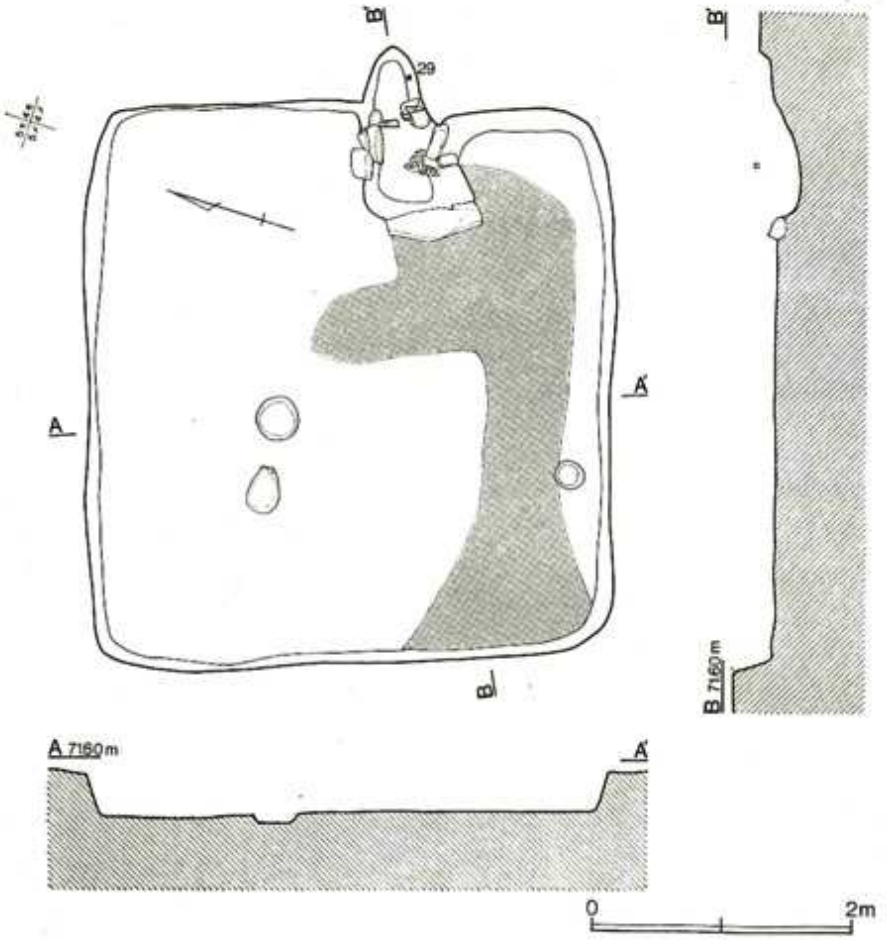
4・5—メ区に位置するが、第50号住居跡を西壁で、第48号住居跡を東壁で切る。規模は4.32×4.12m、深さは0.35mを測る。形態は僅かに長方形となり、主軸はN—70°30′—Eで、床標高は70.12mを測る。

竈は東壁右寄りにあり、長さ1.32×幅0.75mの壁外への張り出しの短い竈である。袖と天井部に使われた石が見られ、右袖付近に鉄滓が検出された。南側床下に、鉄滓、土器片、焼土ブロック、炭化物を多量に含む落ち込みが見られ、製鉄関連の施設と考えられるが、具体的には不明確である。柱穴は中央西と南壁沿いに見られるが、深さ0.1mと浅い。

遺物は竈から高台付埦⑩・⑫が、竈内から鋤先㉙、床下の覆土中から坏②・皿⑮が出土する。住居跡覆土から土錘㉗・㉘が、その他印章鋳型㉞・㉟、小銅塊㊱、鉄器㊵～㊸、灰釉瓶転用硯㊼、羽口㊹、紡錘車㊼が出土する。この他製鉄関連遺物として砂鉄容器と考えられる、内面砂鉄付着甕片㉕、鉄滓2.17kg、炉壁片、羽口片が出土する。

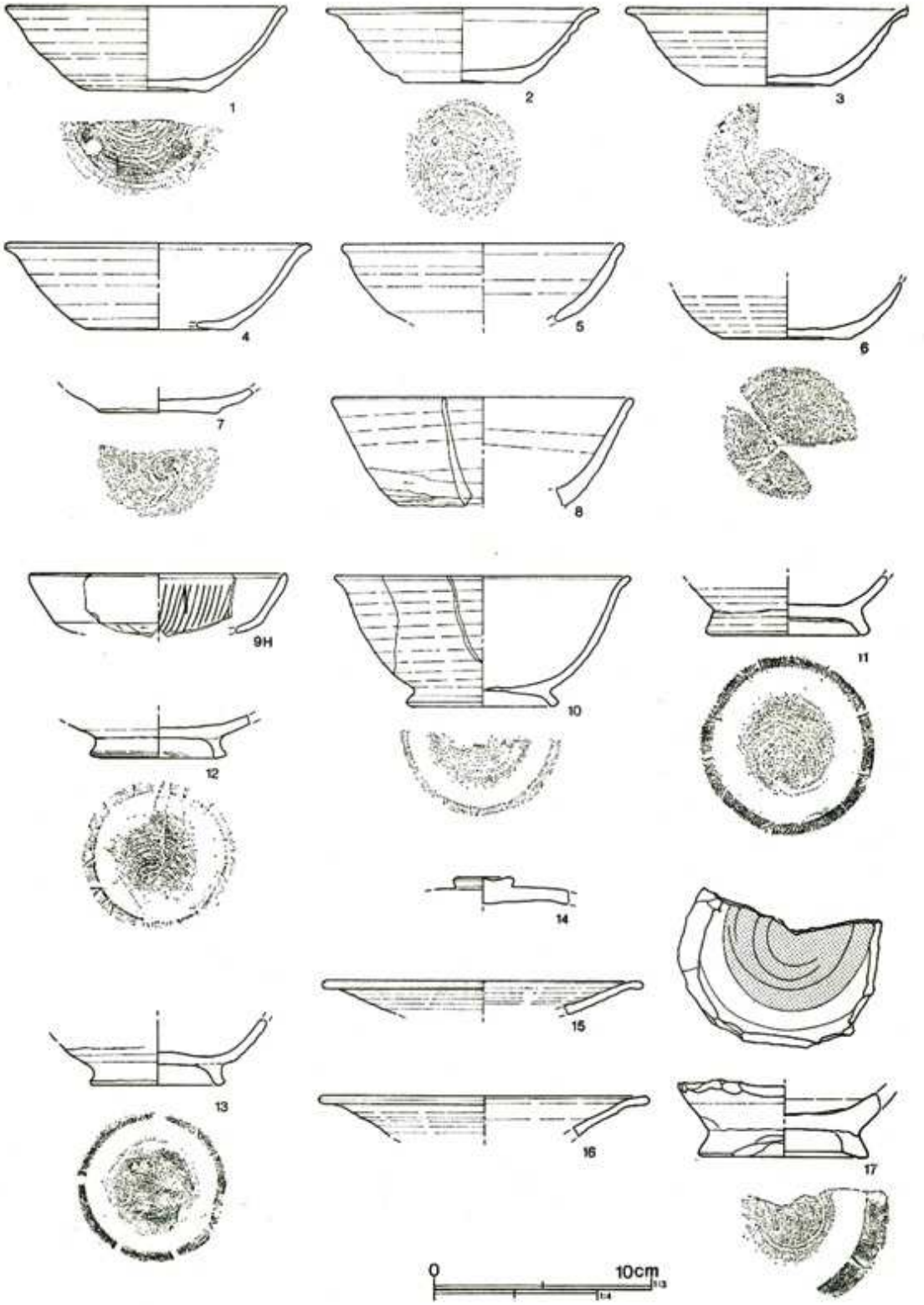
第49号住居跡出土遺物（第70～73図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(13.0) 底径(5.3) 器高 3.9	やや上げ底から僅かに張る体部を経て口唇に至る。	右回転撫で8周。底部右回転糸切り。多孔質。末野産	胎土：A少＋B少＋E 焼成：4 色調：2.5Y6/1黄灰 残存：20% 上層
2	坏 須恵器	口径(12.6) 底径 5.4 器高 3.4	平底から指差し入れ部で外反し、轆轤目の凹凸のある体部を経て大きく外反する。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：A少＋B少 焼成：5 色調：7.5Y6/1灰 残存：45% 上層・床下



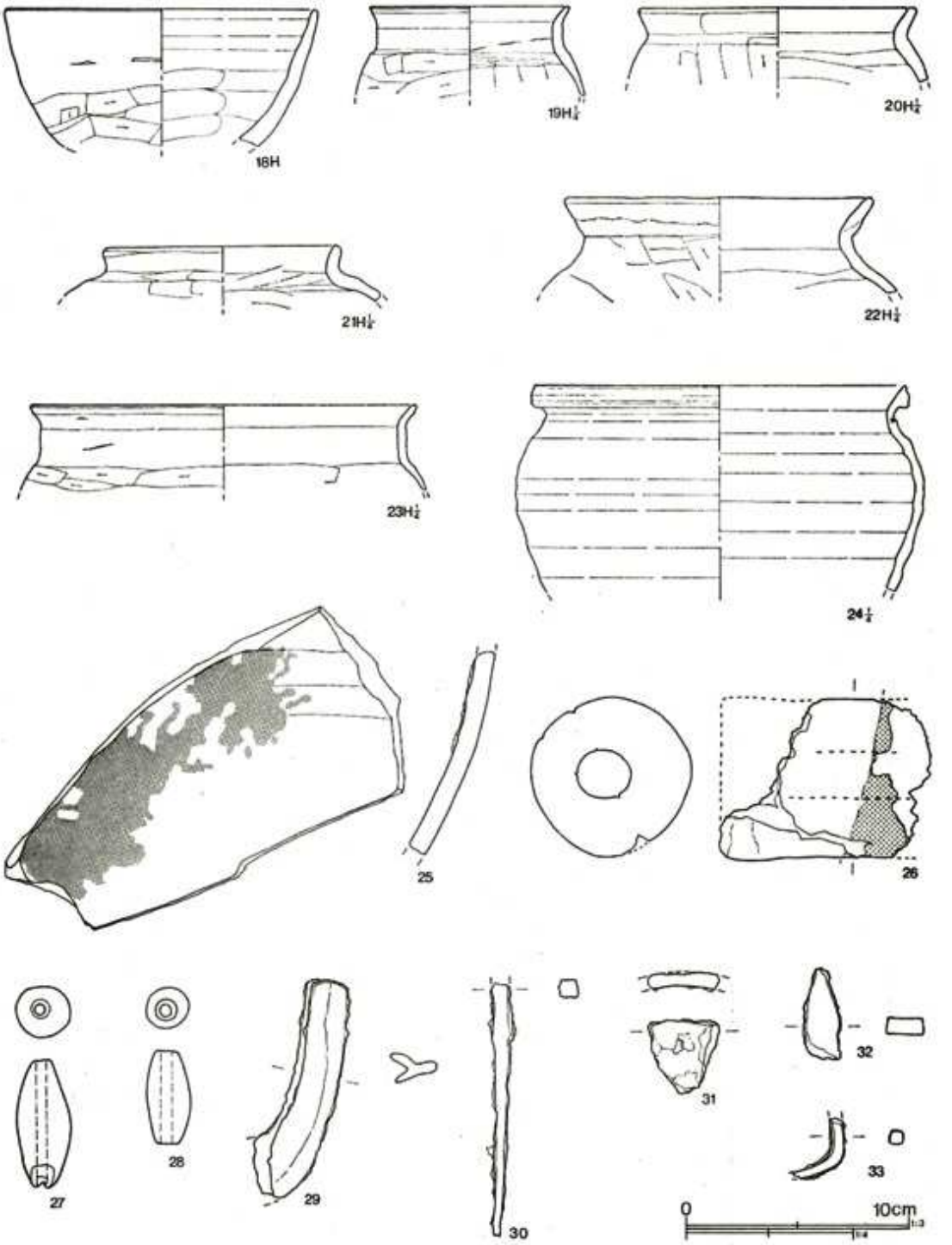
第69図　第49号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	坏 須恵器	口径 13.0 底径 5.9 器高 3.5	平底から外傾し、体部下位で屈曲し、口縁にて大きく外反する。	右回転撫で8周。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：A多＋B多＋C　焼成：5　色調：N5/0 灰　残存：45%　覆土
4	坏 須恵器	口径(14.2) 底径(6.7) 器高 4.0	平底から丸味を持つ体部を経て、大きく外反する口縁に至る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。重ね焼きのため底部生焼け。　末野産	胎土：A＋B＋D　焼成：2　色調：上部2.5YR4/1赤灰、下部7.5YR6/6橙　残存：15%
5	坏 須恵器	口径(13.1)	内彎する体部で、口縁下には窪みを巡らす。	右回転撫で。　末野産	胎土：0.3以下A＋B＋D　焼成：5　色調：5PB3/1暗青灰　残存：20%　覆土
6	坏 須恵器	底径 6.1	平底から内彎して立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り2周。　末野産	胎土：0.9以下A少＋B少＋D　焼成：3　色調：10



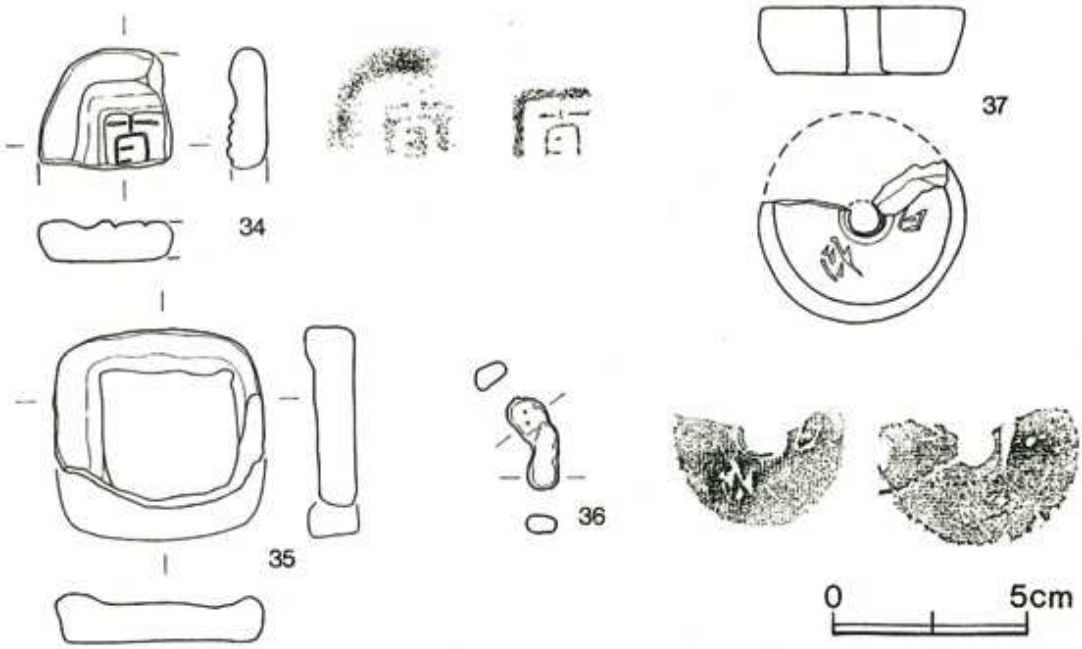
第70図　第49号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
					YR 6/3にぶい黄橙　残存：底部85%　上層
7	坏 須恵器	底径　5.6	平底から指差し込み部にて外反する。	右回転撫で。右回転離し糸切り。　末野産	胎土：0.3以下A＋C＋H　焼成：4　色調：7.5Y5/1灰　残存：底部60%　上層
8	高台付坏 須恵器	口径(14.0)	外傾する口縁で、下位から上位にかけて薄くなる。底部の整形から高台付着する。	右回転撫での後、体部下位を右回転篦削りを施す。その後高台付着する。丁寧なつくり。　東海産？	胎土：微A微　夾雑物なし。焼成：5　色調：N6/0灰　残存：体部20%
9	坏 土師器	口径(12.0)	丸底から稜を経て外傾する口縁に至る。	口縁横撫での後、外面体部右→左へ篦削り。内面放射状暗文。	胎土：A＋E＋H　焼成：5　色調：2.5YR5/6明赤褐　残存：10%
10	高台付椀 須恵器	口径(13.7) 高台径 7.1 器高　6.0	高台は外へ張り、丸い胴から外反する口縁に至る。底部中央が1㎜の厚さとなる。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り後、高台を張りつけて内外右回転撫で。　末野産	胎土：A少＋B少＋D　焼成：5　色調：7.5Y4/1灰　残存：15%　竈
11	高台付椀 須恵器	高台径 7.6	高台が外に張り出し、端部が摩滅し丸くなる。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り後、高台付着し内外右回転撫で。　末野産	胎土：A微＋D＋E多　焼成：3　色調：10YR 6/2灰黄褐　残存：底部　上層
12	高台付椀 須恵器	高台径 6.3	高台は外に張り出し、端面が外傾する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。高台張りつけ後内外右回転撫で。末野産	胎土：A＋B＋D　焼成：5　色調：5PB 4/1暗青灰　残存：高台100%　竈
13	高台付椀 須恵器	高台径 6.2	高台は外に張り出し、底部中央が盛り上がる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外右回転撫で。　末野産	胎土：0.5以下A＋B＋D　焼成：3　色調：2.5Y6/1黄灰　残存：100%　覆土
14	蓋 須恵器	つまみ径 2.9	平坦な天井部に扁平なつまみが付く。	右回転撫で。天井部右回転糸切り離し後、つまみ付着する。　末野産	胎土：0.3以下A少＋B＋E　焼成：2　色調：5Y 7/2灰白　残存：つまみ
15	皿 須恵器	口径(14.9)	直線的に開く体部から、大きく外反する口縁に至る。	右回転撫で6周＋α。多孔質。　末野産	胎土：A少＋B少＋D　焼成：3　色調：2.5Y6/1黄灰　残存：30%　床下
16	皿 須恵器	口径(15.4)	直線的に開く体部から、大きく外反する口縁に至る。	右回転撫で8周＋α。　末野産	胎土：微A微＋D微　焼成：4　色調：2.5Y4/1黄灰　残存：25%
17	瓶 灰釉	底径(7.9)	高台は外に張り出し、端部は内傾する。内面は轆轤目が著しい。硯に転用したよ	右回転撫で。胴部下位右回転篦削り後、高台付着して右回転撫で。　猿投産	胎土：微A少　夾雑物少ない。焼成：5　色調：2.5Y 4/2暗灰黄　残存：底部



第71図　第49号住居出跡土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			うで、周辺を打ち欠いて、釉の上も摩滅して滑らか。		60%
18	埦 土師器	口径(14.2)	緩やかに立ち上がり、外傾する口縁に至る。	口縁横撫で後、外面体部左→右へ篦削り。内面横位の指撫で。外面粘土接合痕。	胎土：微A多＋B＋C＋F 焼成：1 色調：5YR7/4 にぶい橙 残存：20%
19	甕 土師器	口径 11.9	コの字口縁で、口唇部は外傾する。	口縁は2段の横撫での後、胴部外面を左→右へ篦削りする。内面右→左篦撫で。	胎土：微A少＋B＋E＋F 夾雑物少ない。 焼成：5 色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：60% 上層
20	甕 土師器	口径(16.4)	くの字の口縁で、器肉は肥厚する。	口縁横撫で後、外面上→下へ篦削り。内面篦撫で。	胎土：0.4以下A＋B＋C＋E＋F 焼成：2 色調：5YR7/4にぶい橙 残存：15%
21	甕 土師器	口径(14.2)	頸部は緩やかに外反する。	口縁横撫で後、胴部外面篦削り。内面篦撫で。	胎土：0.9以下A＋B＋C＋F 焼成：2 色調：5YR7/4にぶい橙 残存：12%
22	甕 土師器	口径(18.3)	口縁はくの字状になり、口唇は肥厚する。	口縁横撫で後、胴部外面下→上への篦削り。内面は篦撫で。口縁外面粘土接合痕。	胎土：0.5以下A＋B＋C＋E＋F 焼成：2 色調：5YR7/4にぶい橙 残存：15%
23	甕 土師器	口径(22.8)	コの字状口縁で、口唇は外傾して立ち上がる。	口縁に2段の横撫でを施した後、胴部右→左への篦削り。内面は右→左への篦撫で。	胎土：微A＋B＋C＋E＋F＋H 焼成：4 色調：2.5YR6/6橙 残存：15% 上層
24	甕 須恵器	口径(22.1) 胴径(24.2) 現高 12.3	丸い胴から強く屈曲して外反する口縁に至る。口唇は上方に延び、端面に2本の沈線をつくる。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。 末野窯	胎土：微A少＋B少＋D 焼成：5 色調：5Y6/1 灰 残存：20% 上層
25	甕 須恵器	器厚 0.85	甕の破片であり、内面には多量の砂鉄がこびり付く、砂鉄容器。	体部下位の破片と考えられ、内面に接合部の撫で痕が見られる。砂鉄分析資料	胎土：微A多＋B＋C＋E 焼成：2 色調：5Y6/2 灰オリーブ 残存：胴部片
26	羽口	現長 9.45 外径 7.2 孔径 2.15	基部は僅かに太くなる。先端が破損する。	棒に巻きつけ板に押しつける。表面に指頭痕が残る。	胎土：0.5以下A＋スサ多 残存：40%
27	土錘 土製品	全長 5.7 外径 2.5 孔径 0.45	中央の脹らむ、紡形でやや大きい土錘。端部が摩耗。	棒に巻いて引き抜く。	胎土：微A微＋F＋H 焼成：5 色調：7.5YR6/6 橙 残存：95% 覆土



第72図　第49号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
28	土錘 土製品	全長 4.2 外径 2.5 孔径 0.5	中央に最大径はあるが、端部へ緩やかに彎曲する。両端は平面をつくる。	棒に巻いて引き抜く。	胎土：微A＋F＋H　焼成：5　色調：7.5YR6/4にぶい橙　残存：完　覆土
29	鋤 鉄製品	現長 9.7 幅 2.0	半欠であり、断面Y字形の袋をつくる。	鍛造。	重量：39.15g　竈内
30	鉄鏃 鉄製品	現長 11.3	箆被と茎の残欠。箆被は一辺0.8cmの方形を呈する。	鍛造。	重量：10g　覆土 分析資料
31	容器状鉄片 鉄製品	器厚 0.8	やや彎曲を持つ、獣脚のつく容器であろうか。	鋳鉄。	重量：22.38g
32	板状鉄片 鉄製品	器厚 0.7	二等辺三角形を呈するが、容器の残欠と考えられる。	鋳鉄。	重量：15.69g
33	棒状鉄器 鉄製品	太さ 0.7	鉤状に曲がり、一端が細くなる。	鍛造。	重量：34.53g
34	印章 鋳型	厚さ 1.0	残欠であるが印面部に「直」か「真」の文字が見られる。全面に摩耗する	印面部は還元する。	胎土：0.05以下A＋B＋C多　焼成：2　色調：5YR6/8橙、還元部5Y6/1灰

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			が、文字は細い棒で彫られている。文字の外側には窪みがつくられる。外周は不整方形になるようである。		残存：30%
35	印章鋳型	全長 5.4 厚さ 1.0 ～1.3	一端が欠けるが、不整方形となる。印面部は窪み、周縁が高くなる。側面部は斜につくられ、印面部の文字は剥離する。	印面部は還元して灰色となり、その周辺が赤橙色となる。還元部は一辺3.35cmを測る。印面端部の2隅は銅が付着して茶褐色となる。	胎土：0.05以下A多　焼成：2　色調：7.5YR6/6橙、還元部2.5Y6/2灰黄
36	小銅塊	全長 2.5 幅 0.9 厚 0.5	くの字状に曲るが、溶けた銅が平坦部に落ちて固まったものである。そのため下面が平坦となる。	表面が全面緑青を吹く。	重量：4.7g　分析資料
37	紡錘車石製品	上径 5.3 下径 4.4 器高 1.7	上下とも平滑な面をつくり、側面は砥面が面取り状に見られる。短径部に刻線文字が二文字見られるが「日」とも読める。長径部にも一文字あるが不明。	石質は緑泥岩のようである。	重量：43.5g

第50号住居跡（第73図）

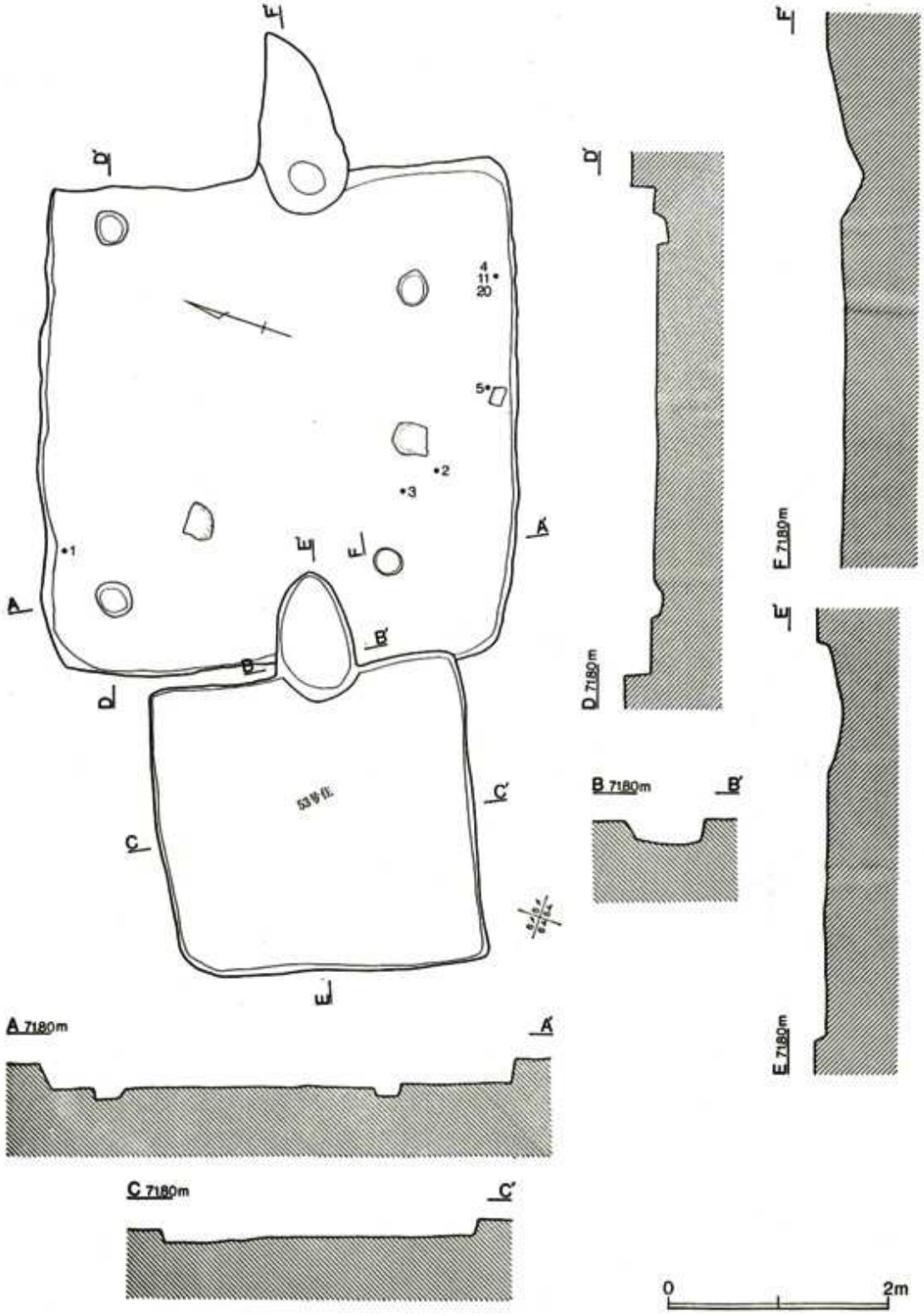
5—メ区に位置するが、東壁を第49号住居跡に、西壁を第53号住居跡に切られる。規模は4.5×4.35mで、深さが0.25mである。形態は長方形で、主軸はN—72°—E、床標高は71.32mを測る。

竈は東壁中央にあり、長さ1.58m×幅0.82mで、壁から外へ長く延びる大形竈である。煙道は焚口の深い掘り込みから直線的に傾斜を持って立ち上がる。床は大きな石が数個散乱する。柱穴は4本存在するが、北壁側はそれぞれ東西壁に近寄る。

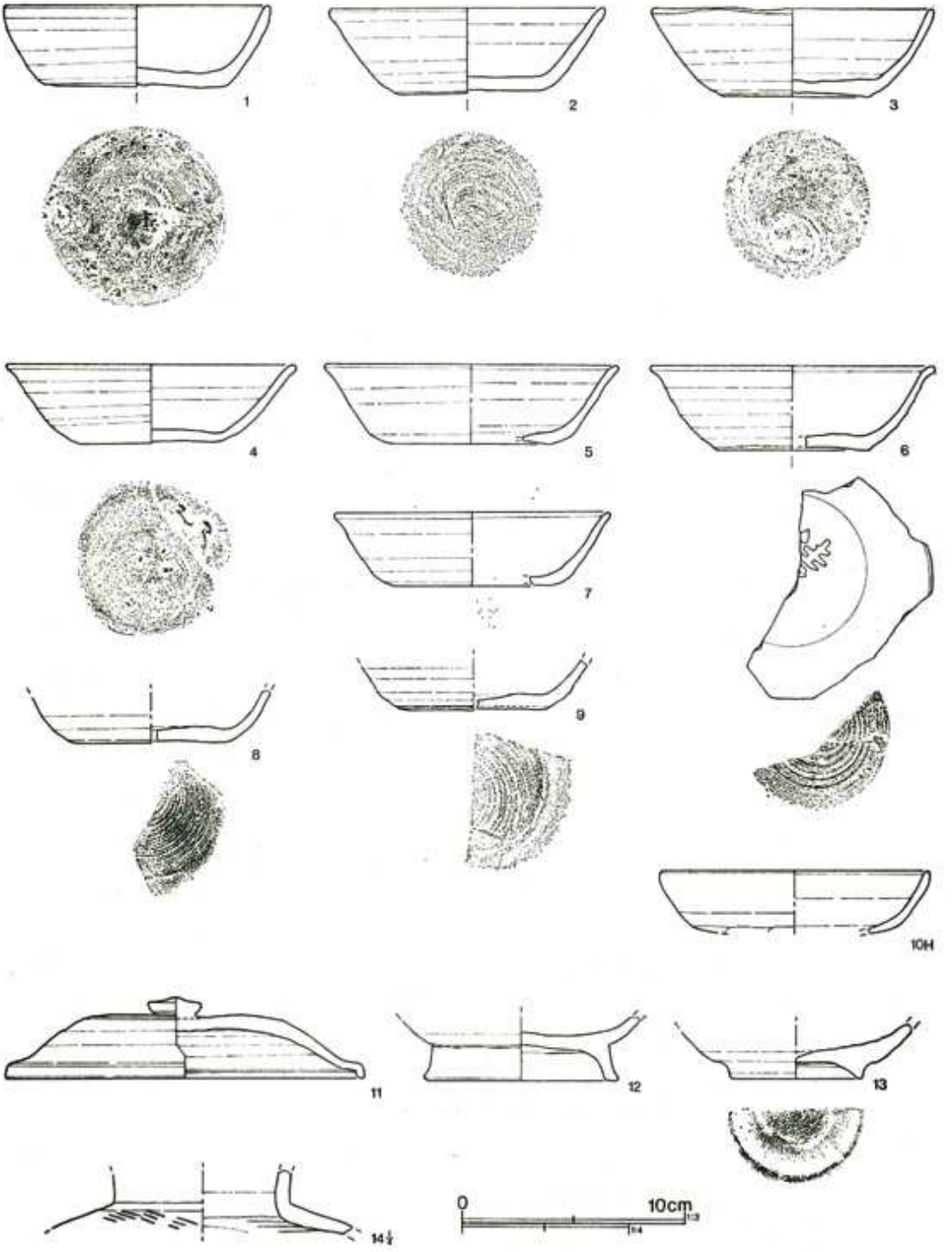
遺物は竈から土師器甕(17)・(18)、容器状鉄片(22)が、床から(1)・(2)・(3)・(4)・(5)、蓋(11)、甕(20)、覆土中から鉄鏃(21)、墨書坏(6)が出土する。製鉄関連遺物は鉄滓が1.3kg出土した。

第50号住居跡出土遺物（第74・75図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.1 底径 8.1 器高 3.7	平底から内彎して立ち上がる、底径の広い形態である。やや厚手。外面に淡黄緑色の自然釉が吹き出す。	右回転撫で5周。底部右回転篦切り離し。篦を抜いた跡あり。内外面中央に一本の指撫で痕あり。	胎土：微A微　夾雑物なし　焼成：5　色調：10YR7/1灰白　残存：100%　床　南比企産？

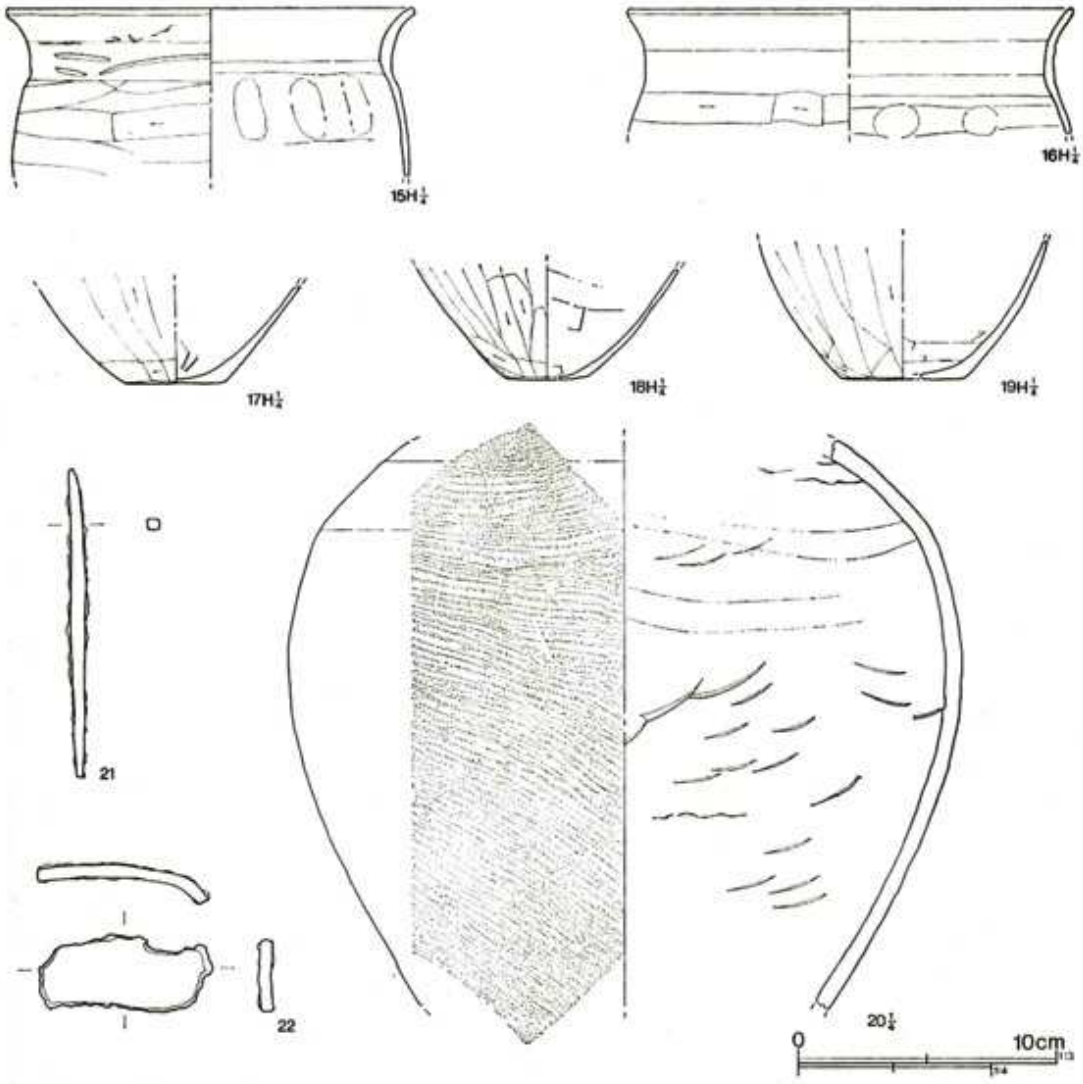


第73図　第50・53号住居跡



第74図　第50号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	坏 須恵器	口径 12.5 底径 6.5 器高 3.7	平底から直線的に外傾する体部に移行する。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。糸は1cm＝9本の細かな撚りである。 末野産	胎土：0.6以下B・C・D多＋E 焼成：5 色調：N3/0 暗灰 残存：100% 床
3	坏 須恵器	口径 12.7 底径 6.6 器高 3.9	底部から指差し込み部を経て内彎気味に立ち上がる。口縁は焼け歪む。	右回転撫で5周。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B・C・D多＋E 焼成：5 色調：N3/0 暗灰 残存：90% 床
4	坏 須恵器	口径 13.2 底径 6.2 器高 3.4	平底から指差し込み部を経て、外傾する体部に至る。生焼け。	右回転撫で9周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.4以下B・C・D＋E 焼成：1 色調：5YR 5/6 明赤褐 残存：80% 床
5	坏 須恵器	口径(13.2) 底径(7.1) 器高 3.6	平底から外傾する体部に至る。口縁は僅かに外反する。	右回転撫で。底部糸切り。摩滅する。 末野産	胎土：0.5以下B・C・D・E多 焼成：1 色調：2.5Y7/2灰黄 残存：35% 床
6	坏 須恵器	口径(12.8) 底径(6.9) 器高 3.8	底部から指差し込み部で外反し、内彎する体部を経て外反する口唇に至る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。底部中央に「清」？の墨書あり。 末野産	胎土：A・D少 焼成：3 色調：10YR 7/3 にぶい黄橙 残存：20% 覆土
7	坏 須恵器	口径(12.4) 底径(7.0) 器高(3.3)	平底から外傾する体部に至る。生焼け。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：微A＋B＋D 焼成：2 色調：5YR 6/4 にぶい橙 残存：20% 覆土
8	坏 須恵器	底径(6.8)	平底から内彎する体部に移る。底部周辺が使用により摩耗する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土：A＋B＋C＋I（1cm²＝6） 焼成：5 色調：5Y 5/1 灰 残存：20%
9	坏 須恵器	底径(6.6)	平底から指差し込み部で外反し立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：A＋B＋C＋D 焼成：2 色調：2.5Y6/1黄灰 残存：底部40%
10	坏 土師器	口径(12.0)	丸底から内彎して立ち上がる。口縁はやや肥厚する。	口縁内外横撫で。底部外面篦削り。	胎土：微A多＋F＋H 焼成：3 色調：5YR 5/6 明赤褐 残存：20%
11	蓋 須恵器	口径 16.2 つまみ径 2.45 器高 3.7	天井部は平坦で、ハの字状に直線的に開き、外反して垂直に垂れる口唇に至る。口唇内側には沈線が入る。つまみは宝珠形である。	右回転撫で8周。天井部右回転糸切り後、周辺部を篦削りする。つまみを付着後周辺を撫でる。表に黒色光沢の部分あり。 南比企産	胎土：0.5以下A・B少 夾雑物ほとんどなし。 焼成：5 色調：10GY 5/1 緑灰 残存：100% 床



第75図　第50号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	高台付椀 須恵器	高台径 （8.9）	高台は高く、外傾した後外へ張り出す。	右回転撫で。底部整形不明。胎土は末野産に類似するが精良である。末野産？	胎土：微A微＋B微＋E微 焼成：4　色調：2.5Y7/3浅黄　残存：底部40%
13	高台付椀	高台径 （6.0）	摩滅著しい。高台は低く内側は傾斜して延びる。	回転撫で。底部糸切り。末野産？	胎土：微A＋E＋F　焼成：1　色調：7.5YR7/4にぶい橙　残存：50%　覆土
14	甕 須恵器	頸部径 （10.4）	肩部から屈折して頸部に至る。	粘土帯積み上げ平行叩き成形。その後右回転撫で。	胎土：微A・B・C少　焼成：5　色調：2.5Y5/2暗

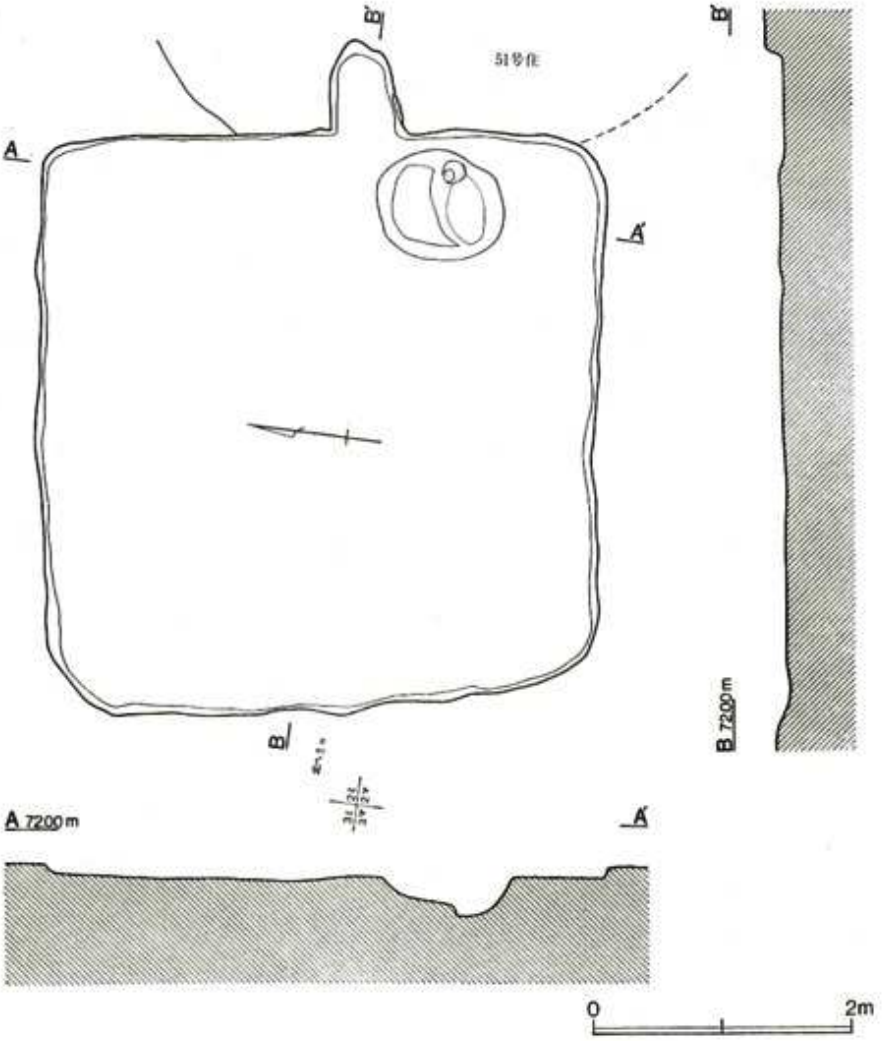
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				末野産	灰黄　残存：30%　覆土
15	甕 土師器	口径(21.0) 現高　8.7	緩やかに膨らむ体部から、外反する体部へ移行する。	粘土帯積み上げ。口縁横撫で後、胴部右→左へ篦削り。内面は篦撫で。口縁外面と体部内面粘土接合痕。	胎土：微A多＋B＋C＋F＋H　焼成：4　色調：2.5YR 6/6橙　残存：25%　覆土
16	甕 土師器	口径(22.8)	コの字状口縁の崩れた形態で、口縁は外反する。	粘土帯積み上げ。口縁横撫で後、体部を右→左へ篦削りする。胴部内面篦撫で。	胎土：微A多＋F　焼成：4　色調：7.5YR6/4にぶい橙　残存：20%　覆土
17	甕 土師器	底径(5.2)	平底から内彎する胴部に移行する。	粘土帯積み上げ。胴部外面下→上への篦削り。内面右→左への篦撫で。	胎土：微A多＋E＋F　焼成：4　色調：5YR 6/6橙　残存：50%　竈
18	甕 土師器	底径　4.2	僅かな丸底から内彎する胴部に至る。	粘土帯積み上げ。外面上→下へ篦削り。内面右→左へ篦撫で。	胎土：微A＋B＋E＋F＋H　焼成：4　色調：5YR 6/6橙　残存：80%　竈
19	甕 土師器	底径(6.3)	やや大き目の平底から、内彎する胴部に移行する。	粘土帯積み上げ。外面上→下へ篦削り。内面篦撫で。	胎土：微A＋B＋E＋F＋H　焼成：4　色調：5YR 6/8橙　残存：25%　覆土
20	甕 須恵器	胴径(34.6) 現高　28.9	最大径を胴上位に持つ。	粘土帯積み上げ平行叩き成形。平行叩きは下部が右下り、上部が平行となる。内面の当て目が三ヶ月状につく。その上を撫で整形。	胎土：1.2以下A＋B＋C＋G　焼成：5　色調：5Y 4/1灰　残存：30%　床
21	鉄　鎌	全長　12.0	断面長方形の0.5×0.4で細い棒である。茎と考えられる部分はさらに細い。	鍛造。	重量：8.26g　覆土 あるいは鉄製紡錘車の軸か。
22	容器状鉄片	厚さ　0.45	板状であるが彎曲する容器状になると考えられる。	割れ方が塊状になり鋳造であろう。	重量：29.07g　竈脇

第52号住居跡（第76図）

2—ミ区に位置し、第51号住居跡（縄文時代）を切る。規模は4.37×4.49m、深さは0.12mを測る。形態は各隅が丸いが正方形で、主軸はN—82°—E、床標高は71.57mである。

竈は東壁右寄りにあり、長さ0.75m×幅0.5mの逆U字形となる。竈は右側に貯蔵穴と考えられる1.0×0.85mで、深さ0.3mの土坑があるが、やや竈に寄りすぎとも考えられる。柱穴はない。

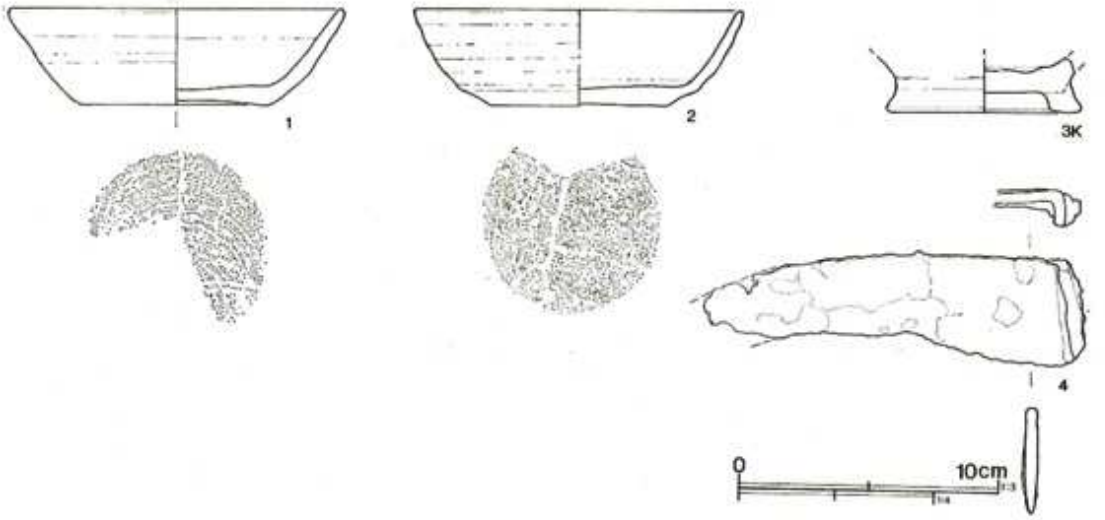
遺物は竈から坏(1)・(2)が、竈脇から鎌(4)が、覆土から灰釉瓶(3)が出土する。



第76図　第52号住居跡

第52号住居跡出土遺物（第77図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 13.1 底径 7.4 器高 3.8	僅かな上げ底からやや丸味を持つ体部に至る。	右回転撫で6周。底部右回転糸引き切り。　末野産	胎土：0.6以下B・C・E＋G　焼成：1　色調：10YR7/4にぶい黄橙　残存：50%　竈
2	坏 須恵器	口径(12.8) 底径 7.0 器高 3.7	平底から指差し込み部で外反し、内彎する体部へ移る。	右回転撫で4周。底部右回転糸引き切り。　末野産	胎土：A＋B＋E　焼成：1　色調：7.5Y7/1灰白　残存：体部25%　竈



第77図　第52号住居跡遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	瓶 灰釉	高台径 7.6	太く高い高台が、ハの字状に開く。内面中央に自然釉が掛かる。	右回転撫で。堅緻。猿投産	胎土：A少＋黒色粒　焼成：5　色調：2.5Y6/2灰黄 残存：50%　覆土
4	鎌	現長 14.8 身幅 4.0	錆が著しく切先が腐蝕する。刃は使用のためか中央から先が細くなる。基部は柄を装着するため折れ曲る。	鍛造。	重量：71g　竈脇

第53号住居跡（第73図）

5—メ区に位置し、東壁で第50号住居跡を切るため、竈は第50号住居跡覆土中に作られている。規模は2.92×2.78mで、深さは0.13mを測る。形態はほぼ正方形で、主軸はN—66°—Eで、床標高は71.4mである。

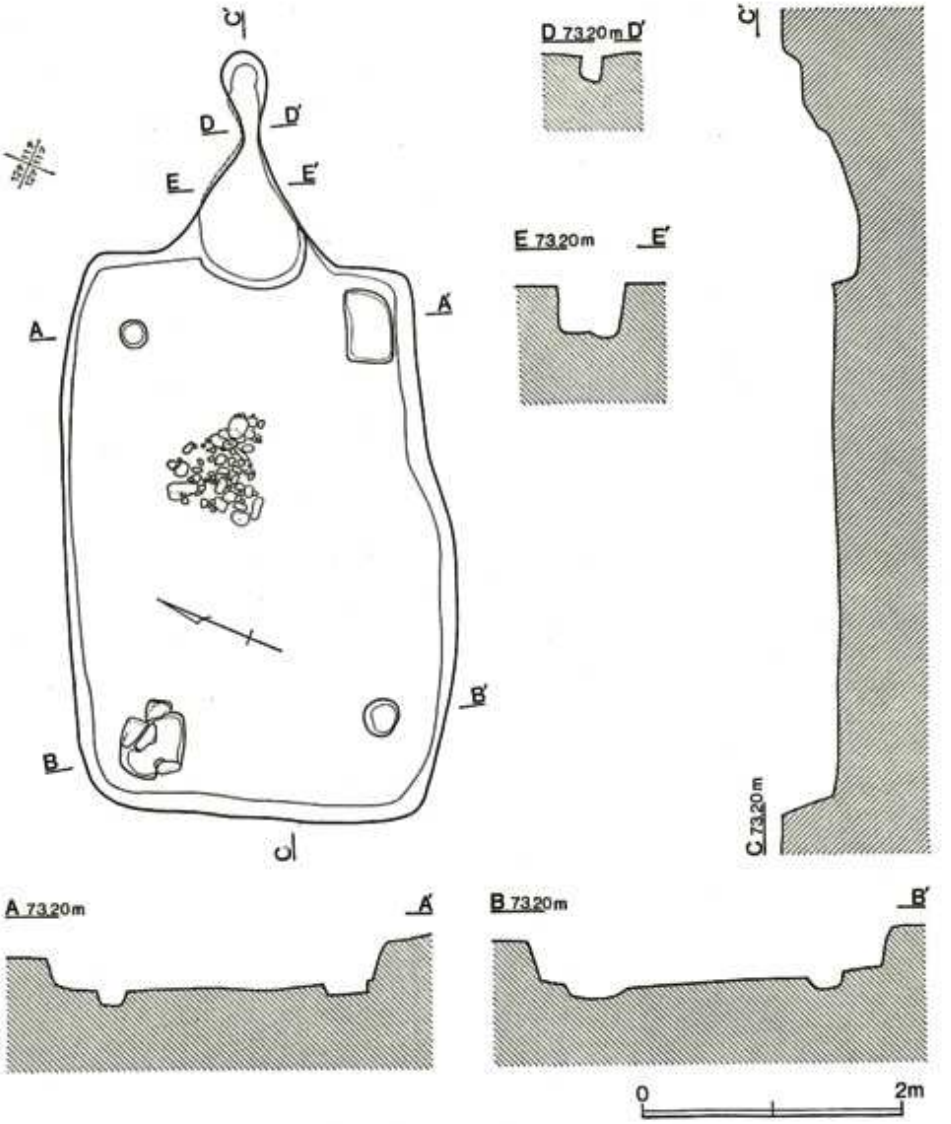
竈は東壁中央にあり、長さ1.18m×幅0.74mの、住居規模からすれば大形で、竈の主体は住居外へ出ている。床には柱穴などの施設はない。

出土遺物は小片で、実測できるものはない。

第57号住居跡（第78図）

12—ツ区に位置する。規模は4.4×3.0mで、深さは0.34mを測る。形態は南壁がやや膨らむがほぼ長方形である。主軸はN—66°30′—Eで、床標高は72.61mである。

竈は短辺である東壁中央にあり、長さ1.83m×幅0.75mの大形竈である。竈の主体は住居外にあり、煙道は幅0.17mで細長く、焚口から煙道へは急に立ち上がる。床中央付近には小さな石が多く検出され、竈右の南東隅には浅い方形の掘り込みがある。北西隅にも浅い掘り込みがあり、大きな



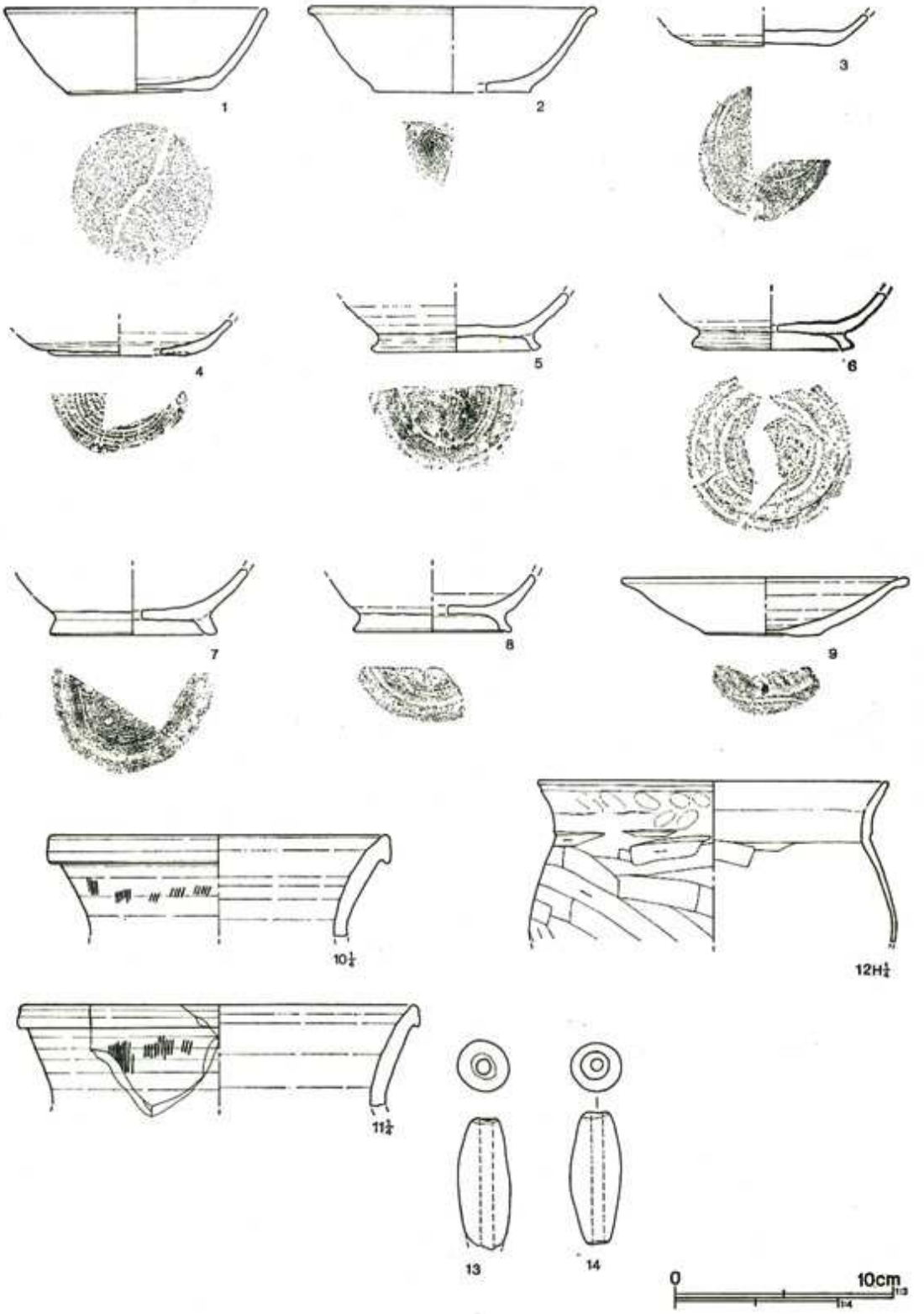
第78図　第57号住居跡

石が検出されたが、北東と南西に柱穴が見られることから、柱穴の可能性がある。

出土遺物は坏、皿、土錘などがある。また製鉄関連遺物として、鉄滓が1.06kg出土する。

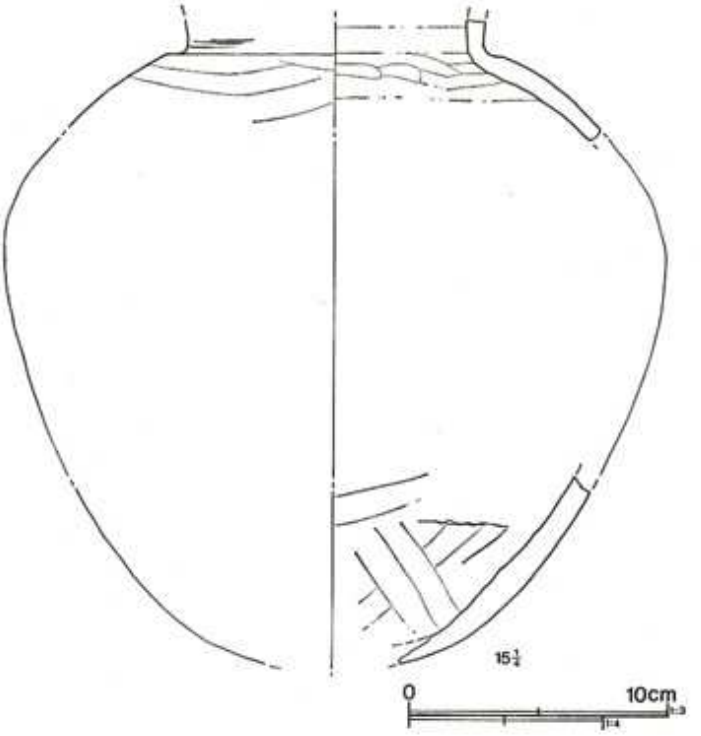
第57号住居跡出土遺物（第79・80図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.1 底径 6.8 器高 4.0	平底から内彎気味の体部に移る。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。　末野産	胎土：A＋B＋C＋E　焼成：2　色調：10Y 7/2 灰白　残存：60%
2	坏	口径(13.3)	平底から指差し込み部で外	右回転撫で。底部右回転糸	胎土：0.3以下A＋C　焼



第79図　第57号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器	底径(7.3) 器高 3.9	反し体部に移行。口唇で大きく外反。	切り。 末野産	成：5 色調：10Y 5/1 灰 残存：20%
3	坏 須恵器	底径 6.2	平底から緩やかに立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：A＋B＋C＋F＋G 焼成：2 色調：7.5Y7/2 灰白 残存：70%
4	坏 須恵器	底径(6.5)	平底から指差し込み部を経て体部へ移る。	右回転撫で。底部右回転糸切り2周。 末野産	胎土：0.3以下A＋C＋G 焼成：5 色調：7.5Y4/1 灰 残存：45%
5	高台付椀	高台径 7.8	高台は外へ張り出す。端面は外へ傾斜する。	右回転撫で。底部右回転まわし切り後、高台張りつけ。内外回転撫で。末野産	胎土：0.4以下A＋B＋C＋E＋G 焼成：4 色調：2.5Y5/2暗灰黄 残存：50%
6	高台付椀	高台径 7.4	高台はハの字状に開き、端面は外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外回転撫で。 末野産	胎土：0.8以下A＋B＋C 焼成：4 色調：2.5Y7/3 浅黄 残存：底部90%
7	高台付椀	高台径 7.7	高台はハの字状に開き、端面はやや内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ、内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.4以下A＋B＋C＋E 焼成：2 色調：7.5Y 6/2 灰オリーブ 残存：底部70%
8	高台付椀	高台径 (7.3)	高台は大きく開き、端面に沈線が入り、やや内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下A＋B＋C 焼成：4 色調：7.5Y7/2 灰白 残存：底部25%
9	皿 須恵器	口径(13.2) 底径(5.5) 器高 2.7	平底から大きく外傾する体部に移り、外反する口唇に至る。底部中央は薄い。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.5以下A＋B＋C＋E 色調：10YR 7/3 にぶい黄橙 残存：28%
10	甕 須恵器	口径(20.2)	口縁は外反し、口唇部は下方に張り出し、口唇端面はやや窪む。	粘土帯積み上げ、平行叩き成形。その後右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下A＋B＋C 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：28%
11	甕 須恵器	口径(23.5)	口縁は外反し、口唇部は下方に張り出す。	粘土帯積み上げ、平行叩き成形。その後右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下A＋B＋C 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：11%
12	甕 土師器	口径(21.2)	体部から緩やかに外反する口縁に至る。口唇外面に僅かな段をつくる。	口縁外面に粘土紐貼。口縁横撫で後、外面胴部右下→左上へ篦削り。内面篦撫で。	胎土：微A多＋F＋G 焼成：4 色調：2.5YR9/8 橙 残存：45%
13	土錘	現長 6.0 外径 2.4	一端は少し欠けるが中央に最大径を持つ、長い土錘で	棒に巻きつけ抜く。整形摩耗のため不明瞭。	胎土：白A 焼成：5 色調：7.5YR6/3にぶい褐色



第80図　第57号住居跡出土遺物(2)

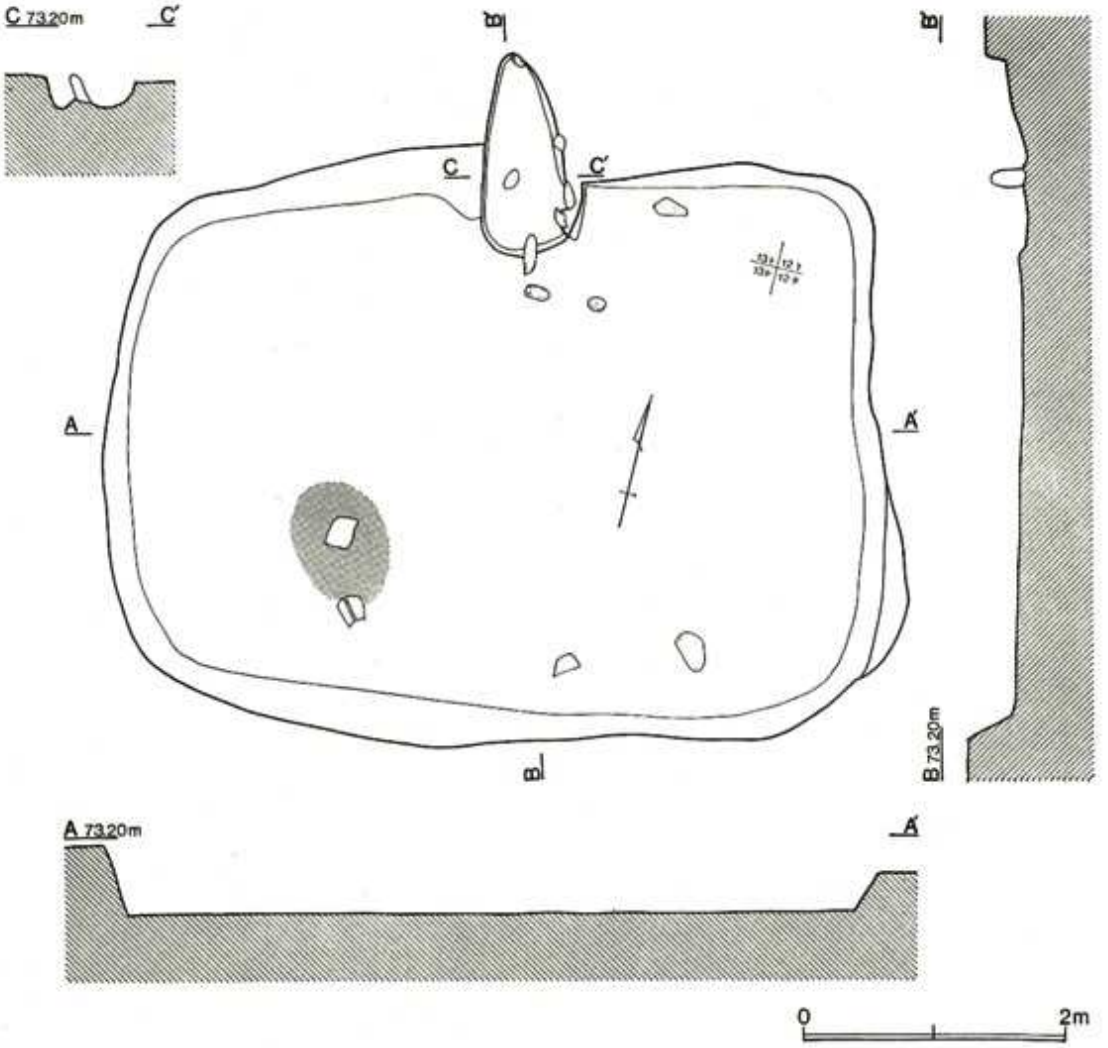
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		孔径　0.6	ある。		重量：31.65g
14	土錘	全長　6.05 外径　2.2 孔径　0.55	中央が太くなる細長い形で13に同じ。	棒に巻きつけ抜く。整形不明瞭。	胎土：微A　焼成：3　色調：5YR 6/3にぶい橙 重量：29.23g　残存：完
15	甕 須恵器	現高(33.0) 胴径(33.9)	丸底から緩やかに立ち上がるが、最大径は胴上位にある。頸部にて強く屈曲する。	粘土帯積み上げの後、内外面とも箆撫で整形。	胎土：0.6以下A＋B＋C 焼成：5　色調：10YR6/2 灰黄褐　残存：20%

第58号住居跡（第81図）

13—テ区に位置する。規模は4.6×6.0m、深さは0.53mと深い住居跡である。形態は隅の丸い不整長方形であり、主軸はN—14°—Wで、床標高は72.6mである。

竈は長辺である北壁中央にあり、長さ1.56m×幅0.7mの二等辺三角形の大形竈である。竈の中には支脚と考えられる石が立つ。床の南西付近には、1.0×0.7mの範囲で、鉄滓・焼土・炭化物が堆積する。柱穴はなく、他の施設も全くない。

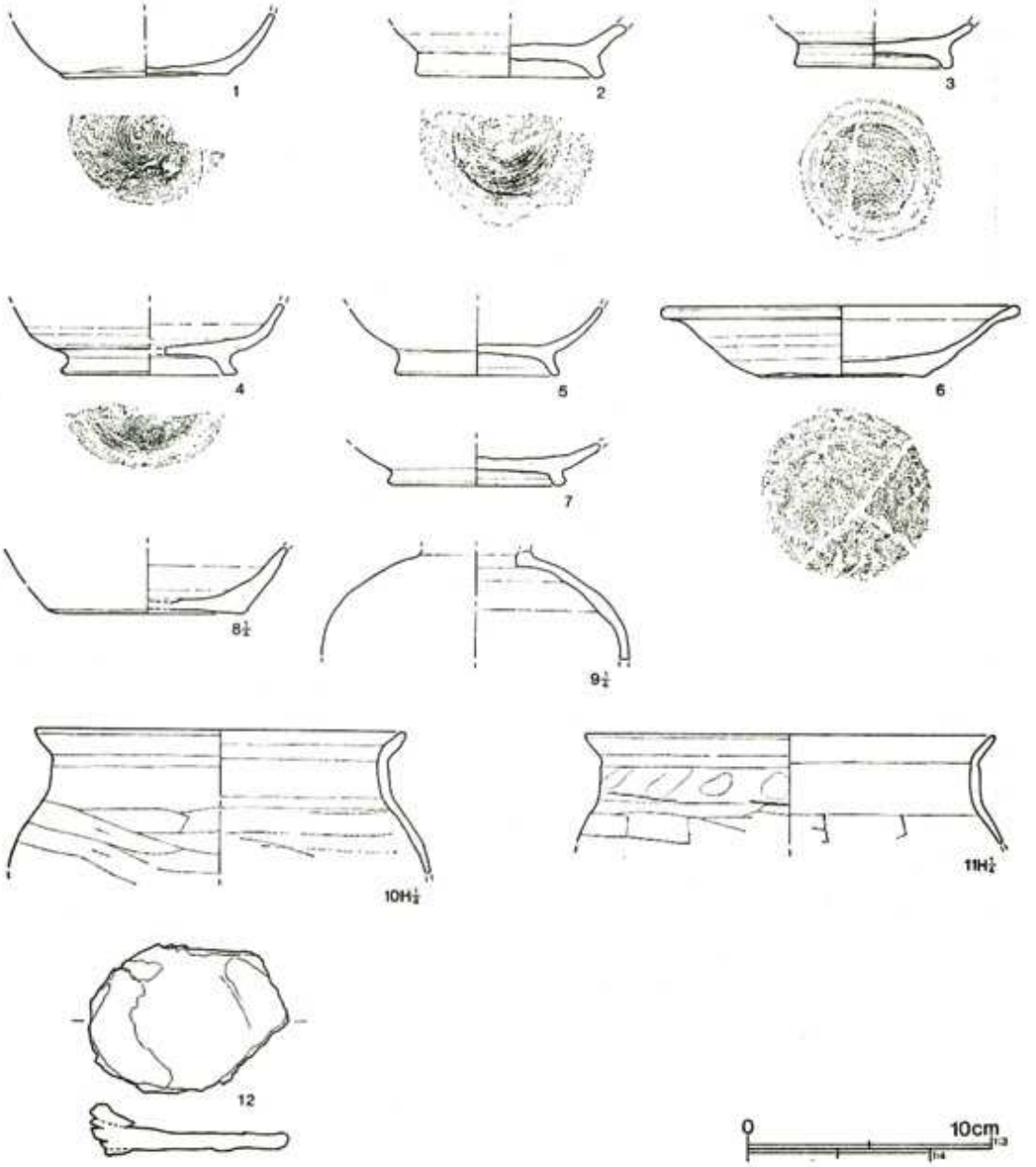
遺物は坏、皿、壺、甕、鉄片、に灰釉壺片が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓付着土器が1点と鉄滓が1.91kg出土する。



第81図　第58号住居跡

第58号住居跡出土遺物（第82図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	底径（6.7）	平底から内彎する体部に移る。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。　末野産	胎土：0.3以下A＋B＋C 焼成：5　色調：N4/0 灰 残存：底部40%
2	高台付椀 須恵器	高台径 7.8	高台はハの字状に開き、端面は外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ内外撫で。　末野産	胎土：0.5以下A＋B＋D＋E　焼成：2　色調：5Y 7/1 灰白　残存：55%



第82図　第58号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付椀 須恵器	高台径 6.6	高台は開き、端面は丸味を持つ。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外回転撫で。　末野産	胎土：0.3以下B＋C＋E 焼成：1　色調：7.5Y6/1 灰　残存：底部100%
4	高台付椀	高台径 7.2	高台は強く開き、外面は外へ張り出す。端面に浅い沈	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内	胎土：0.5以下A微　焼成：5　色調：N4/0 灰　残

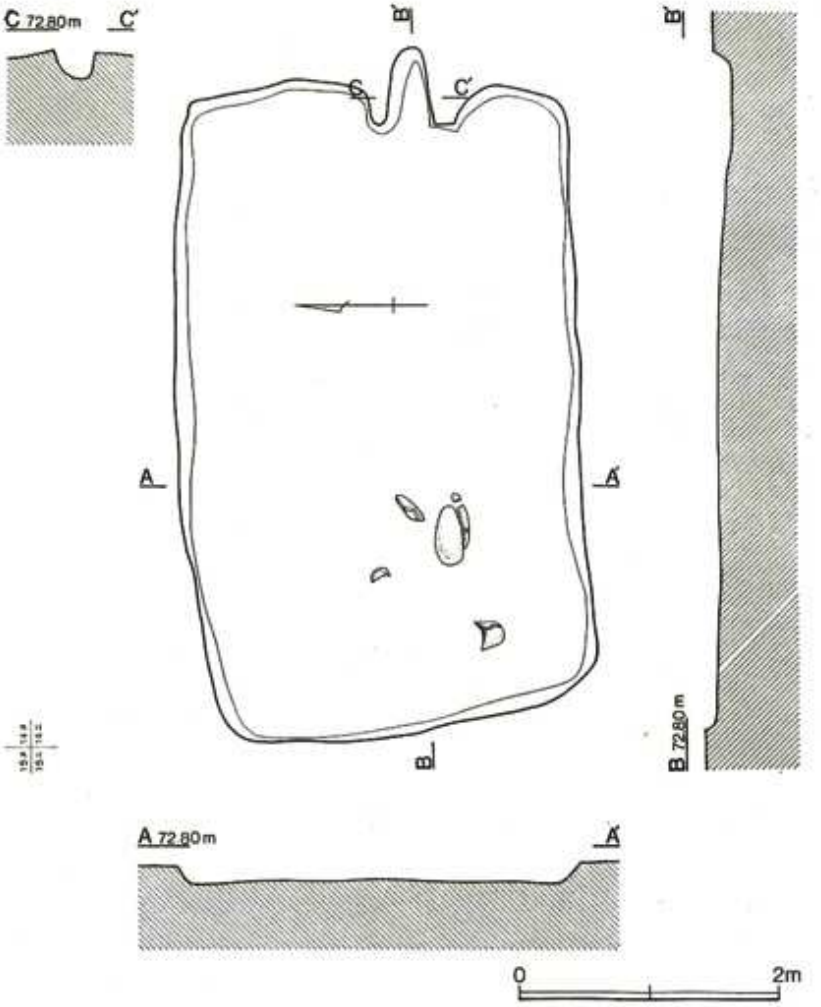
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	須恵器		線を入れる。膨が張る。	外回転撫で。　末野産	存：底部40%
5	高台付椀 須恵器	高台径 6.8	高台は薄く外に張る。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外回転撫で。　末野産	胎土：0.5以下B＋C＋E 焼成：1　色調：5Y7/3 浅黄　残存：底部100%
6	皿 須恵器	口径 14.8 底径 6.8 器高 2.9	平底から外傾して、肥厚する玉縁口唇に至る。	右回転撫で4周。底部右回転糸切り。　末野産	胎土：0.5以下B＋C＋E 焼成：2　色調：10Y7/1 灰白　残存：30%
7	高台付椀 須恵器	高台径 7.4	高台は低く張り出し、端面は外傾する。	摩滅著しく整形不明瞭であるが右回転撫で。　末野産	胎土：0.5以下B＋C＋E 焼成：1　色調：5YR4/8 赤褐　残存：55%
8	甕 須恵器	底径 10.0	やや上げ底。	軟質となり摩滅著しい。整形不明。　末野産	胎土：0.7以下B＋C＋E 焼成：1　色調：7.5Y6/2 灰オリーブ　残存：60%
9	壺 須恵器	頸部径 （6.0） 胴径 16.6	体部は丸味を持ち、頸部にて屈曲する。表に濃緑色の釉がかかる。	右回転撫で。　末野以外	胎土：0.1以下＋B＋C黒色粒　焼成：5　色調：5Y5/1灰　残存：40%
10	甕 土師器	口径(20.1)	コの字口縁で、口唇部は肥厚する。	口縁横撫で2段の後、胴部右→左への削り。内面右→左への篦撫で。	胎土：微A多＋E＋F　焼成：2　色調：2.5Y6/8明黄褐　残存：15%
11	甕 土師器	口径(22.2)	コの字口縁で、やや大形の甕である。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左へ篦削り。内面右→左への篦撫で。	胎土：微A多＋E＋F＋H 焼成：4　色調：7.5YR6/4にぶい橙　残存：10%
12	板状鉄片	厚さ 0.9	8.3×6.2㎝の不整形であり、重量がある。	板状にはがれるが鍛造であろうか。製品製作途中の板であろうか。	重量：120.52g

第59号住居跡（第83図）

14—ニ区に位置する。規模は5.05×3.15m、深さ0.15mを測る。形態は僅かに折れ曲る長方形を呈する。主軸はN—89°30′—Eで、床標高は72.5mである。

竈は短辺である東壁の、中央僅か右寄りにあり、長さ0.6m×幅0.75mの小形竈で、両側に袖が造り出されている。床の中央南には石が数個散乱するが、柱穴などの施設はない。

遺物は坏、皿、小形台付甕、大甕の他、鉄滓付着土器が1点出土する。



第83図　第59号住居跡

第59号住居跡出土遺物（第84図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 土師器	口径(12.1)	丸底から外反する口縁に至る。	口縁横撫で後、体部篦削り。	胎土：微A多＋C＋F　焼成：2　色調：10YR 6/6 明黄褐　残存：20%
2	皿 須恵器	口径　18.3 底径　6.7 器高　3.2	平底から大きく開き、口唇にて外反して玉縁をつくる。焼け歪む。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。　末野産	胎土：0.4以下B＋C　焼成：5　色調：N4/0 灰　残存：60%
3	高台付椀 須恵器	口径(13.2) 高台径 (6.5) 器高　5.2	高台はハの字に張り出し、体部は丸味を持ち。口唇は外反する。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。高台張り付け後内外右回転撫で。　末野産	胎土：0.6以下B＋C　焼成：5　色調：2.5Y5/2暗灰黄　残存：40%